

2021 年度
早稲田大学学生生活・学修行動調査報告書

2022 年 5 月

早稲田大学 大学総合研究センター

研究倫理番号 2020-169

目次

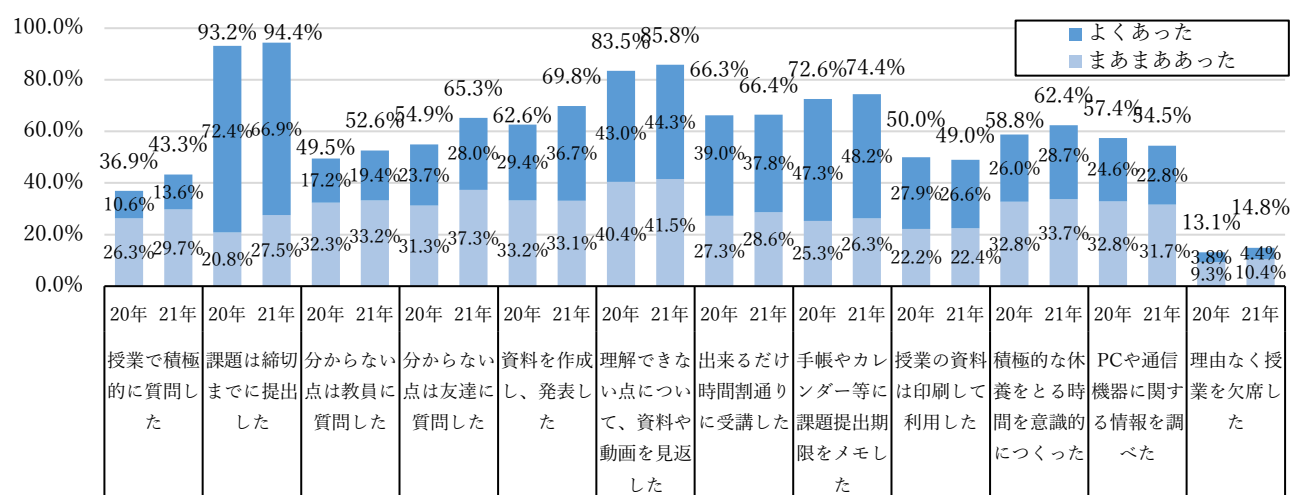
報告書概要.....	p. 2
第1章 調査概要と対象について.....	p. 3
1－1．調査概要.....	p. 3
1－2．調査対象者の学修・生活環境.....	p. 3
第2章 2020年度との比較.....	p. 7
2－1．新型コロナウイルス感染症の影響・アルバイト.....	p. 7
2－2．課外活動・不安や悩み・健康.....	p. 8
2－3．教育経験・学修行動.....	p. 11
2－4．留学・インターンシップ.....	p. 15
2－5．満足度.....	p. 17
2－6．大学院生.....	p. 18
第3章 AP（アドミッション・ポリシー）について.....	p. 21
3－1．APの認知.....	p. 22
3－2．APの認知のタイプ別分析.....	p. 25
3－3．APに関連する経験.....	p. 28
終章 課題と今後の展望.....	p. 32
付録.....	p. 33
・ 1．集計表.....	p. 35
・ 2．APに関する文献リスト・サマリー.....	p. 75

報告書概要

学生生活・学修行動調査は、2019年度まで38回にわたって行われてきた学生生活調査を継承し、2020年度から新たに企画、実施されたものである。第2回目となる本調査は2021年6月25日から7月16日まで、オンライン調査ツール（クアルトリクス）を用いて日英両言語で作成し、実施された。対象は、早稲田大学の全学生（45,884名）で、回答総数は10,835名（回収率：23.6%）となった。

本報告書では、まず2020年度に実施した前回調査との比較を通して、コロナ禍の学修や学生生活の変化を整理した。また、2021年度入学者を対象としたアドミッション・ポリシー（AP）の項目について分析を行った。

前年度との比較分析の結果、教育経験や学修行動では各項目の経験について肯定的な回答がより高くなった。特に、学修行動（図－概要）においては「分からない点は友達に質問した」（54.9%→65.3%）や「資料を作成し、発表した」（62.6%→69.8%）、「授業で積極的に質問した」（36.9%→43.3%）において肯定的な回答が高くなった。このような結果となった背景として、対面授業の再開や拡大、オンライン授業のインフラの充実、オンライン授業の経験値が教員・学生ともに蓄積されてきたことが、より双方向・対話型授業の実践に繋がったものと考えられる。



図－概要 学修行動

また2021年度入学者を対象としたAPの質問項目については、APを確認した学生は64.7%であり、確認していない学生は16.0%、APを知らなかった学生は19.3%となった。AP自体は8割程度の学生が認知しているという結果となった。またAPの認知については、学部や入試区分、地域、大学・学部の志望度によって傾向が異なっている。人間科学部（通信教育課程）では、APを確認していた割合が94.7%と高く、その背景として志願時にAPに関する記述を課していることが要因としてあげられた。APに関連する経験の質問群のなかで最も肯定的な回答の割合が高いのは「相手の立場や考え方に共感することができた」（91.5%）であった。在学時の教育・学修経験、学修成果との関連は今後の調査において引き続き検討する。

第1章 調査概要と対象について

1-1. 調査概要

学生生活・学修行動調査は、2019年度まで38回にわたって行われてきた学生生活調査を継承し、2020年度から新たに企画、実施されたものである。第2回目となる本調査は2021年6月25日から7月16日まで、オンライン調査ツール（クアルトリクス）を用いて日英両言語で作成し¹、実施された。対象は、早稲田大学の全学生（45,884名）で、回答総数は10,835名（回収率：23.6%）となった。

調査にあたっては、以下に示すように、全学の幅広い大学政策に資するような調査分析を行い、教育の一層の充実を通して、学生の成長に繋げ、それらを早稲田大学のステークホルダーである社会に対して示すことを目的とする。

- ・ **計画策定・政策形成への活用**：奨学金や学費などの大学政策検討時の基礎資料など
- ・ **社会的評価への活用**：在学時の満足度との相関分析など ※将来的に、卒業生調査より得られるデータと連結した分析も検討する
- ・ **評価活動への活用**：教学マネジメント検証、内部質保証検証など ※学修時間・学修行動の把握、公表および分析結果の授業等教育活動の見直しにも活用する
- ・ **学生の実態把握への活用**：入試形態別の学修成果等パフォーマンス分析や附属校・系属校出身学生のGPA以外での評価など ※学修成果の把握を通して、授業等教育活動の見直しに活用するのみならず、全体の集計結果を公表し、学生に周知することで学生本人の学修等の動機付けにも繋げる
- ・ **各種広報への活用**：入試説明会などの広報、および卒業生（校友）への広報など

なお、学生生活・学修行動調査は、学内の研究倫理を遵守の上実施し（研究倫理番号：2020-169、研究責任者：沖清豪、実施代表者：遠藤健）、本報告書の全体の編集・執筆を遠藤健（大学総合研究センター）、編集補助・付録2の作成を丸川拓己（同学生スタッフ）が担当した。

1-2. 調査対象者の学修・生活環境

ここでは、調査対象者となる学生の学修・生活環境の基本情報について、国内と早稲田大学のおもな動向を表1-1と表1-2に示す。周知の通り、2020年度初めには徐々に新型コロナウイルス感染症が国内に拡大し、早稲田大学では、4月の緊急事態宣言を受けキャンパスが立入禁止となり、5月11日から全面的なオンライン授業が実施された。2020年秋学期から徐々に対面授業へ戻す方針が示されたものの、2021年1月に2度目の緊急事態宣言が発出され（いわゆる第3波）、4月（第4波）、そして7月（第5波）と感染が拡大しては収束し、また再拡大を繰り返した。2021年度における学生生活・学修行動調査の調査（6月～7月）は、まさに第5波の感染拡大の時期と重なった。

¹ 英語調査名は、Student Survey。

表 1－1 2020 年における早稲田大学の学生を取り巻く状況

国内	早稲田大学
1 月 16 日：厚生労働省「新型コロナウイルスに関連した肺炎の患者の発生について（1 例目）」国内初の感染報告	
	2 月 27 日：「2019 年度卒業式・大学院学位授与式および 2020 年度入学式の中止について」卒業式・大学院学位授与式（2020 年 3 月 25 日、26 日）および 2020 年度入学式（2020 年 4 月 1 日、2 日）を中止に
	4 月 2 日：「2020 年度の春学期の授業の進め方について」2020 年度春学期（セメスター・／クォーター）の授業は、原則としてインターネットを通してオンラインに
	4 月 6 日：「早稲田大学における在宅研究・在宅勤務への移行の計画－それに伴うキャンパスの立入禁止について」学生・学外者の各キャンパスへの立入禁止
4 月 7 日：東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡に緊急事態宣言（16 日に全国に拡大：第 1 波）。	
4 月 10 日：東京都 4 月 11 日（土）から 5 月 6 日（水）までの期間、大学および学校などの教育機関に対して、休業を要請	
	4 月 14 日：「春学期の全面的なオンライン授業移行に伴う課外活動自粛等の継続について」春学期修了日（8 月 1 日）まで学内外における課外活動の自粛等
	5 月 11 日：春学期授業開始
5 月 25 日：首都圏 1 都 3 県の緊急事態措置解除	
	5 月 26 日：「早稲田大学における構内立入禁止の段階的解除について－今後の方針と考え方」6 月 1 日より入構制限の緩和
	6 月 22 日：「早稲田大学におけるキャンパスの門扉の開放について」6 月 22 日より門扉の開放
	6 月 26 日：「課外活動自粛等継続および今後の段階的な再開について」課外活動の限定的な再開や関連施設の利用が可能に
	7 月 15 日：「2020 年度秋学期授業について」教室、教場での授業を一部再開
8 月 3 日：酒類を提供する飲食店やカラオケ店への営業時間の短縮要請（第 2 波）。	
8 月 8 日：全国知事会「大切な『ふるさと』と命を守るために」電話やオンラインを通じた帰省を呼びかけ	
	9 月 14 日：「秋学期以降の課外活動の段階的な再開方針について」課外活動における制限を緩和
10 月 16 日：文部科学省 対面授業が半数未満の大学名公表を発表	
	11 月 16 日～12 月 7 日：学生生活・学修行動調査（第 1 回）実施
	11 月 22 日：「秋学期後半の授業のあり方について」対面授業の増加。

表 1－2 2021 年における早稲田大学の学生を取り巻く状況

国内	早稲田大学
	1月6日：「1月8日（金）以降の課外活動の禁止および学生会館の臨時閉館について（第5報）」。緊急事態宣言が解除されるまで、原則オンラインでの活動以外は禁止に。
1月8日：東京、神奈川、埼玉、千葉に緊急事態宣言（第3波）	
	3月19日：「課外活動の段階的な再開について（第6報）」。緊急事態宣言発出前のレベルに戻る。学生会館も開館
3月21日：首都圏1都3県の緊急事態措置解除。	
	4月11日：「2021年度春学期の対面授業の継続について－『まん延防止等重点措置』の東京都への適用を受けて」
4月25日：東京、京都、大阪、兵庫に緊急事態宣言（第4波）	
6月21日：東京都緊急事態措置解除。	
	6月25日～7月16日：学生生活・学修行動調査（第2回）実施
7月12日：東京都緊急事態宣言（第5波）	
7月23日～9月5日：東京オリンピック・パラリンピック	
10月1日：東京都緊急事態措置解除	

早稲田大学では、2021年度に対面授業を拡大しつつも、オンライン授業を併用した状況にあった。学生が授業を受けていた地域は、2020年と2021年を比較すると、図1－1の通りである。首都圏以外の国内で授業を受けていた学生は6.4%から3.4%に、海外で授業を受けていた学生は3.1%から2.5%に減少しているが、2021年度の調査時点（6月～7月）でも5.9%の学生がキャンパスから離れて授業を受けていた。これを学年別、課程別で見ると（図1－2）、1年生において「首都圏以外の国内」が1.9%（20年度は7.1%）、海外が1.9%（20年度は2.8%）で3.8%がキャンパスから離れて授業を受けており、東京近郊に来ることなく、地元等で授業を受けていた。「首都圏以外の国内」の割合は2年生（2.5%）、3年生（3.2%）、4年生（3.8%）と学年があがるにつけて微増傾向にある。

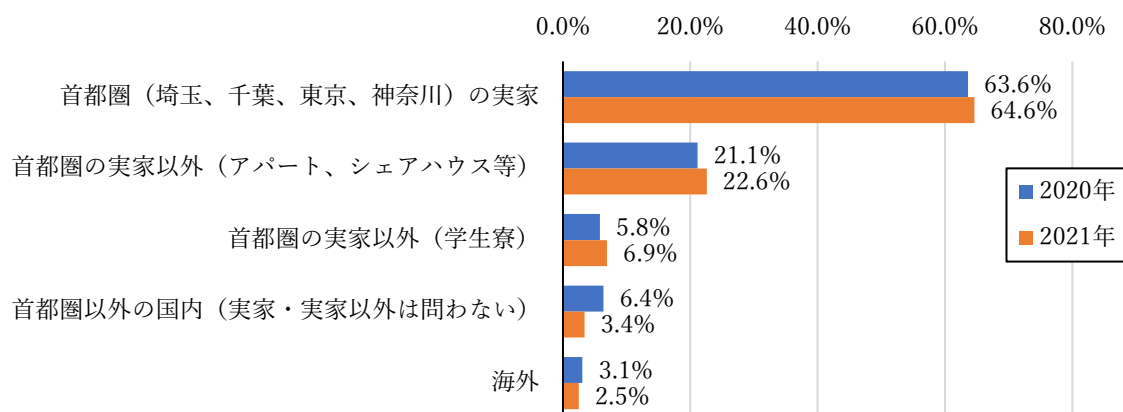


図 1－1 授業を受けていた地域

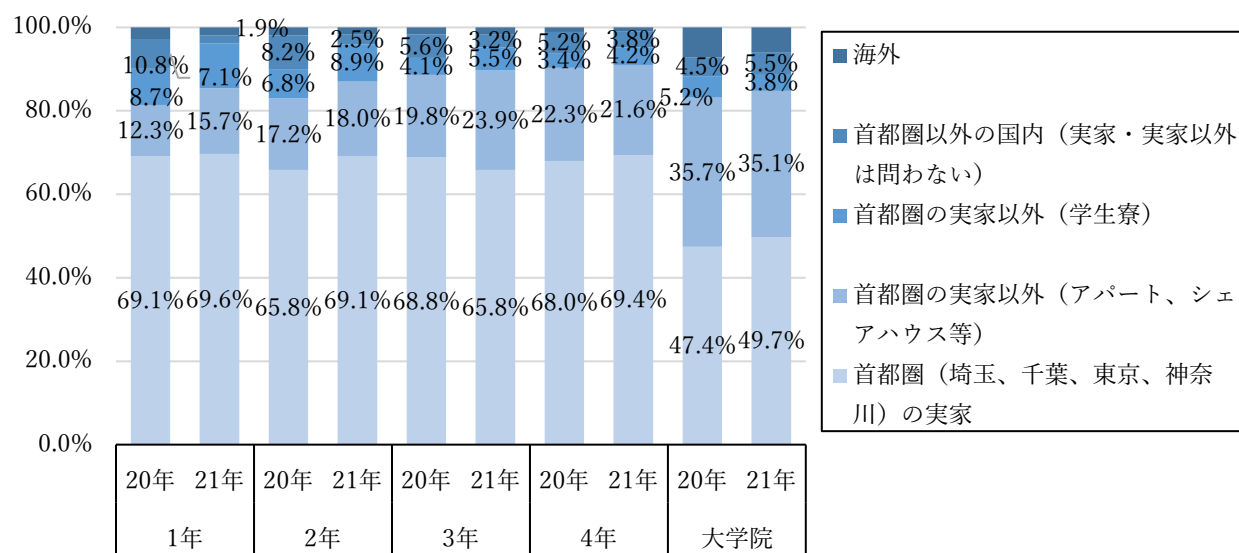


図 1－2 授業を受けていた地域・学年・課程別

以上のような基本情報を踏まえた上で、2021 年度の学生生活・学修行動調査も、例外的な状況下における学生の生活・学修状況を引き続き捉え、定点観測できる貴重なデータとなった。本報告書の第 2 章では、2020 年度から始めた前回調査との比較をし、コロナ禍の学修や学生生活の変化を整理する。第 3 章では、2021 年度入学者を対象としたアドミッション・ポリシー（AP）の項目について分析結果を示していく。

第2章 2020年度との比較

本章では、コロナ禍における学生の学修や学生生活の動向について前回調査と比較する。2020年度は11月～12月、2021年度は6月～7月にかけての調査結果である。

2-1. 新型コロナウイルス感染症の影響・アルバイト

新型コロナウイルス感染症拡大の影響については、全体的に前年度よりも小さくなった（図2-1）。「アルバイト収入が減少した」が2020年度の49.2%から33.1%に大きく減少した。また「主たる家計の収入が減少した」も25.1%から18.5%に減少した。2020年度と比較すると、新型コロナウイルス感染症の影響は全体的に減少傾向にあるものの、2021年度も経済的な課題や学修環境面での課題を抱える学生が一定数いる。

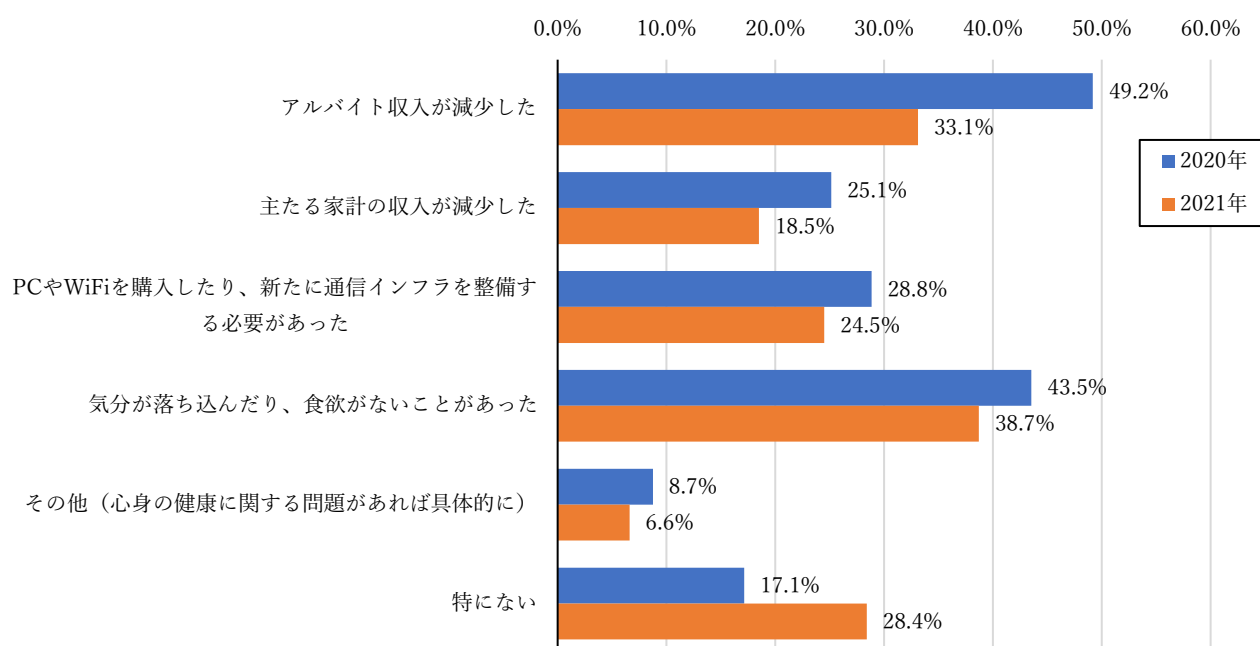


図2-1 新型コロナウイルスの影響（複数選択）

また、学生のアルバイトの状況は、前年度と比較して特に大きな変化はなかった（図2-2）。両年度ともに7割の学生はアルバイトをしており、1週間あたりの時間数では「1～5時間」（14.0%→16.6%）が若干増加し、「11～15時間」（15.6%→14.2%）、「16～20時間」（9.6%→8.1%）では微減していた。

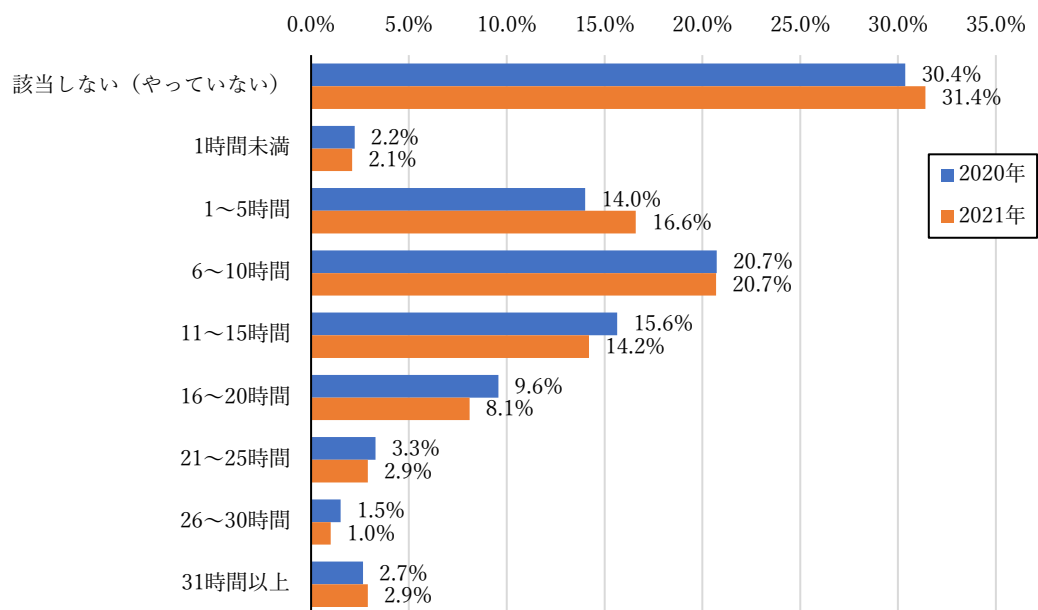


図 2－2 1週間あたりのアルバイト時間数

2－2. 課外活動・不安や悩み・健康

次に、課外活動の参加状況を比較する（図 2－3）。質問項目に掲載された組織や活動に「所属・参加していない」の割合は 38.2%から 31.7%へ減少し、より多くの学生が課外活動に参加するようになった。

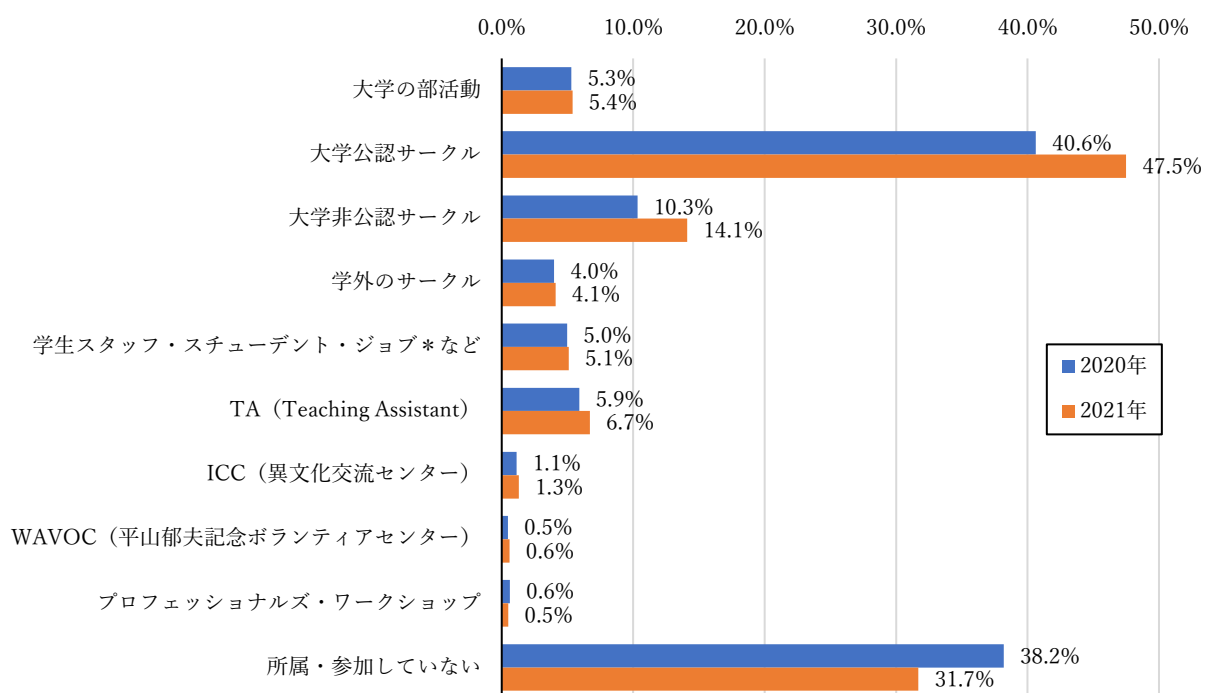


図 2－3 課外活動の参加状況

特に1年生に注目して見ると（図2-4）、「大学公認サークル」や「大学非公認サークル」の参加率が大きく上昇しており、2021年度は9割弱の学生が質問項目に掲載された組織や活動に参加していた。また、前年度の1年生は調査実施時期の11月～12月において約7割の学生が質問項目に掲載された組織や活動に参加していた。1年生間の比較においては、2021年度はより課外活動にも参加しやすくなった状況に変化したと考えられる。

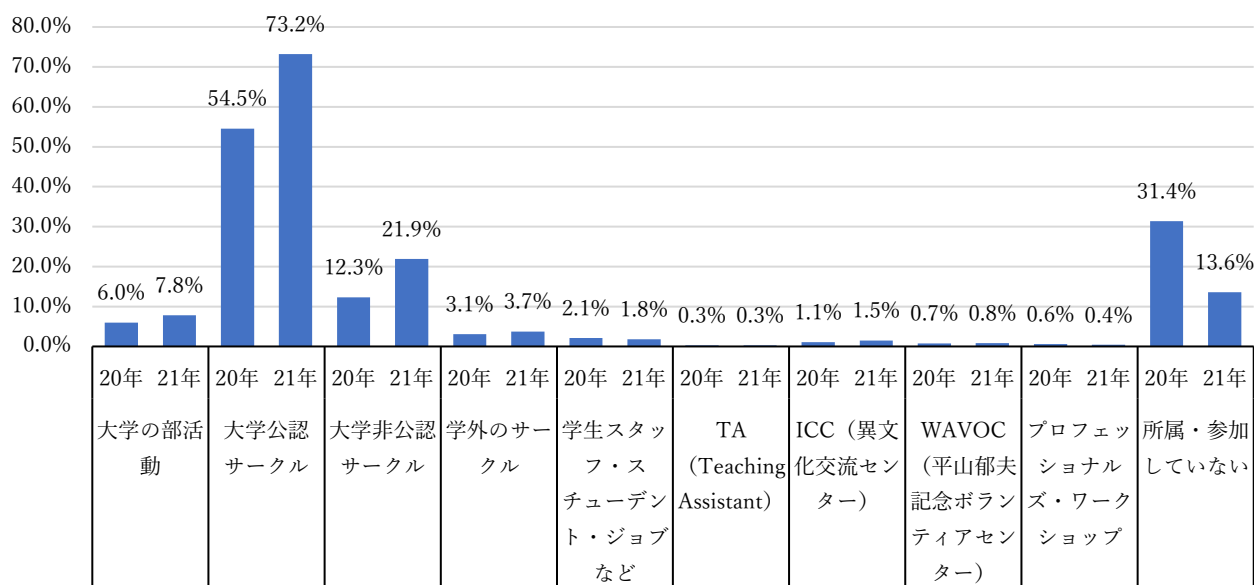


図2-4 課外活動の参加状況（20・21年度の1年生間の比較）

なお、2020年度の1年生（2021年度の2年生）の変化を図2-5で示す。「大学公認サークル」（54.5%→61.2%）や「大学非公認サークル」（12.3%→17.6%）への参加率が高まり、質問項目に掲載された組織や活動により参加していた。

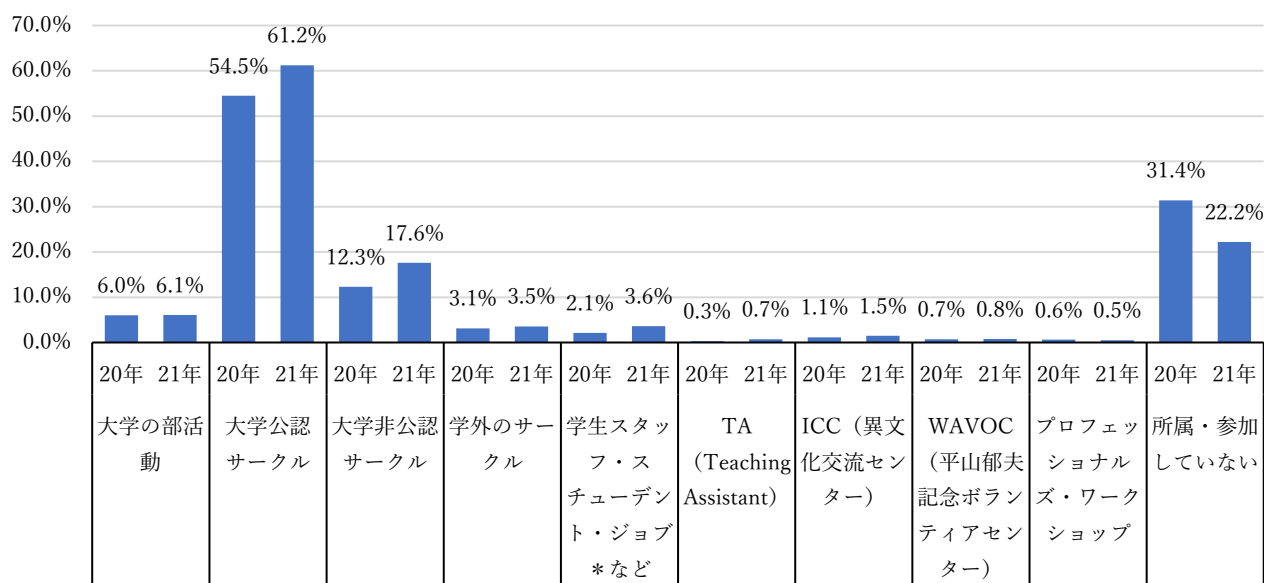


図2-5 課外活動の参加状況（現2年生の経年変化）

不安や悩み（図２－６）については、2020年度、2021年度ともに「進路・就職など」が最も高かった。前年度が秋学期、今年度が春学期に調査が実施された点に留意が必要であるが、「進路・就職など」は前年度に比べ4.6%減少した。他の項目を見ても、全体的に微減傾向である。一方で「成績不振」については微増しており（13.0%→14.5%）、学生の学修状況も引き続き注視が必要である。

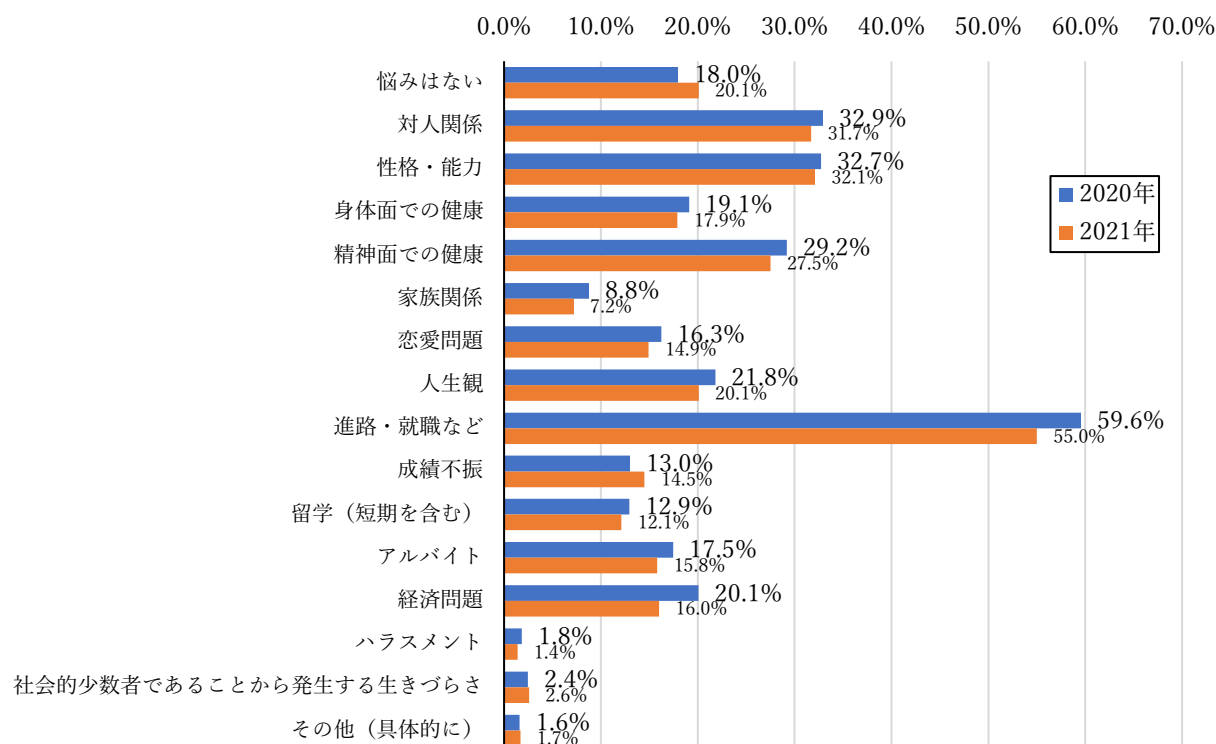


図２－６ 不安や悩み（複数回答）

また心身の健康面では、身体面についてはそれほど変化がない。一方で精神面については、「とても健康である」（29.3%→31.0%）が微増し、「あまり健康ではない」（10.2%→9.5%）は微減した。

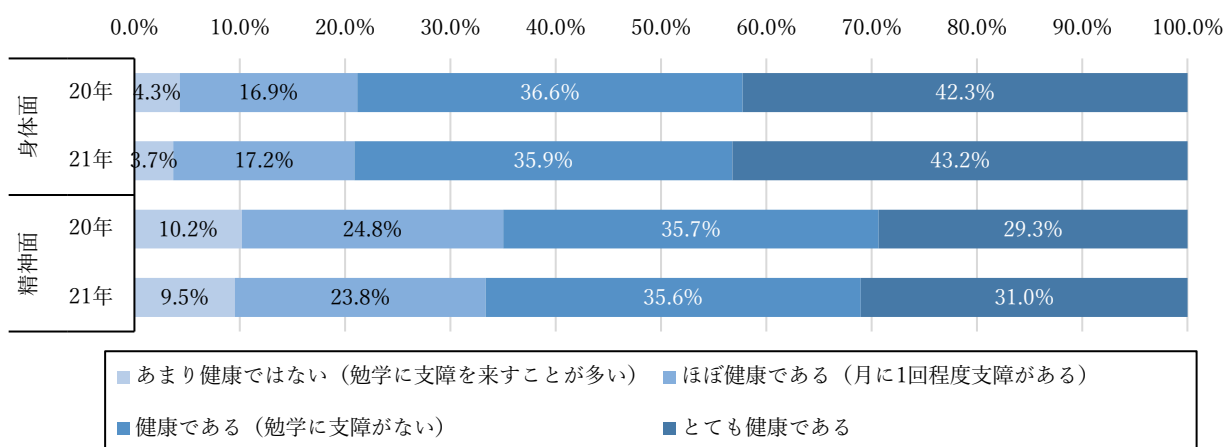


図２－７ 心身の健康

大学の休学や退学に関する意識の変化を見ると（図２－８）、「大学を休学したい」の割合が「よくある」（4.9%→4.1%）、「まあまあある」（12.2%→10.4%）ともに減少した。それ以外の項目はこの間、あまり変化はなかった。

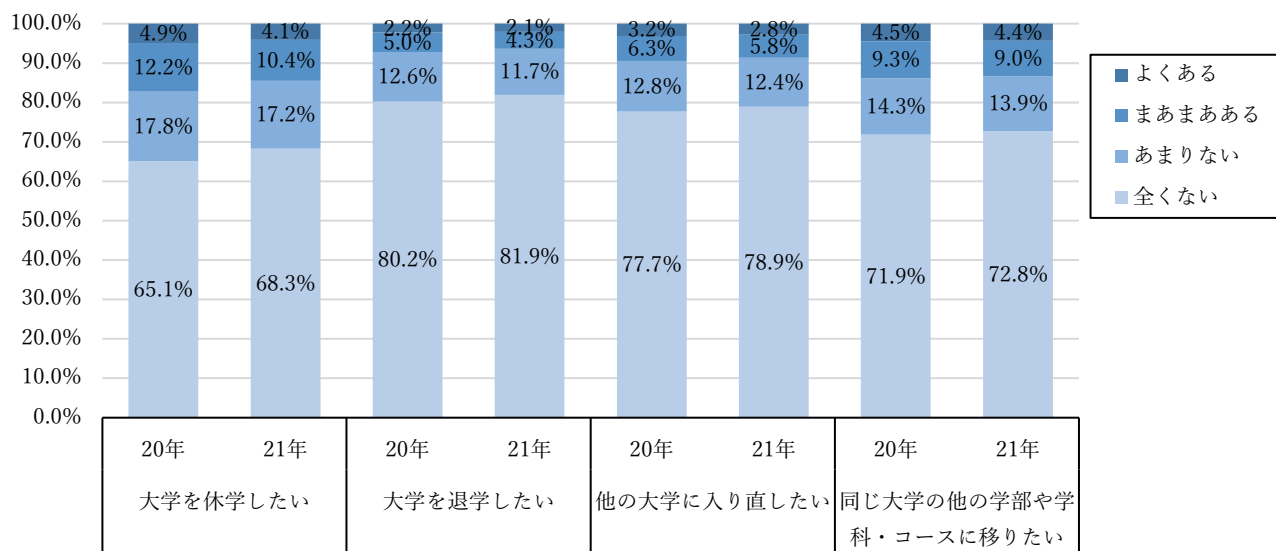


図２－８ 休学・退学等

２－３．教育経験・学修行動

次に、学生の学修行動の変化を見る。全面的なオンライン授業から 2021 年度にかけて対面授業が拡大していった変化を見てみたい。まず図２－９の履修選択について重視するものは、「授業形態」が 53.8%から 57.7%に微増している。オンライン授業や対面授業、さらにはハイブリッドなどどのような授業形態で授業が行われるのか、学生はより気にしていたようだ。

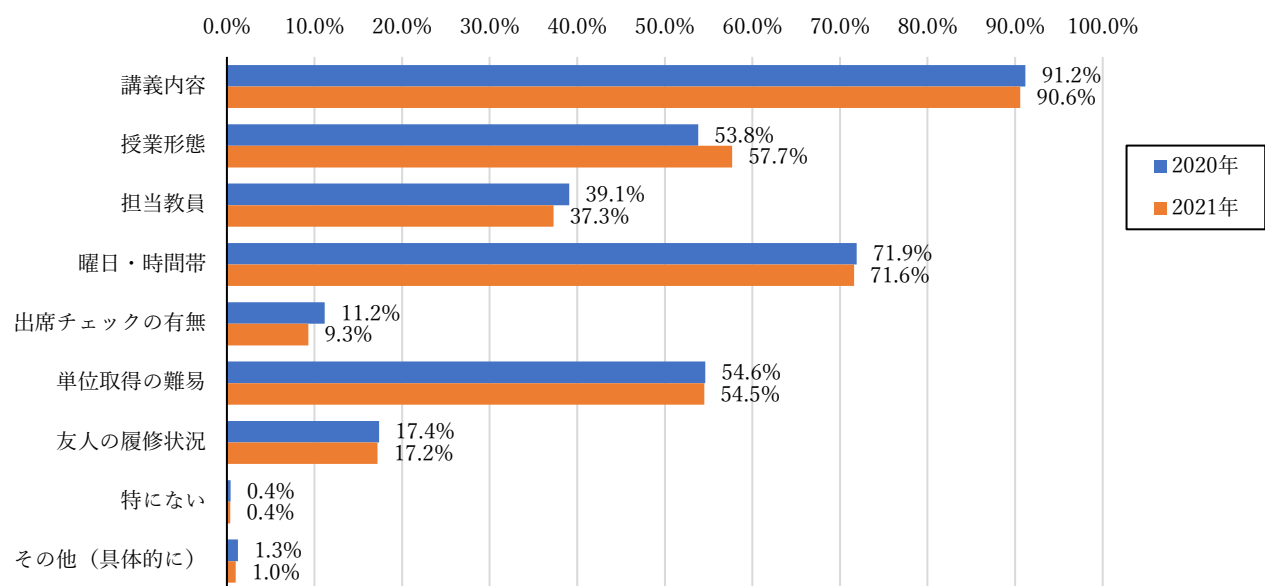


図２－９ 履修選択において重視するもの（複数回答）

授業の平均的な出席状況（図2-10）については、「90～100%」の割合が77.3%から75.0%に微減したものの、そこまで大きな変化が生じたわけではない。

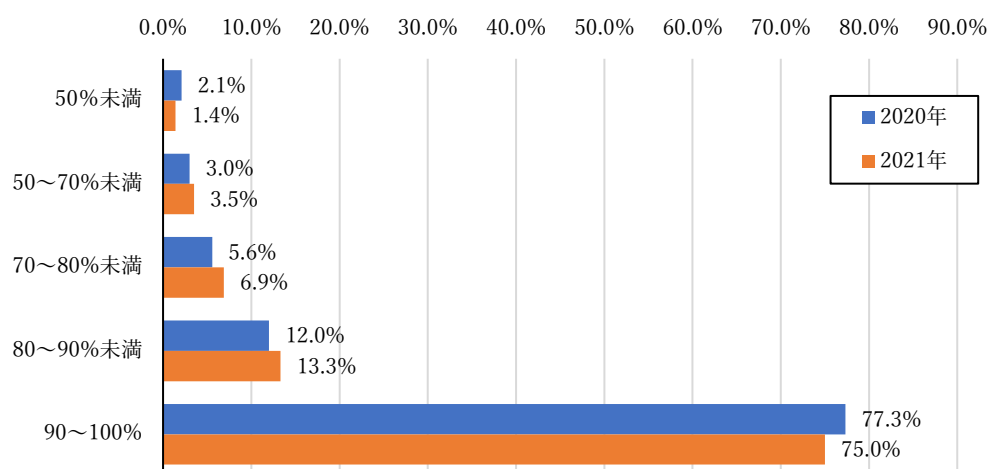


図2-10 授業の平均的な出席状況

また1日の予復習時間（図2-11）を見ると、両年度通じて「1時間～2時間未満」が最も高く、2021度は31.9%から33.4%に微増した。1時間未満、5時間以上の割合は前年度と比較して微減していた。

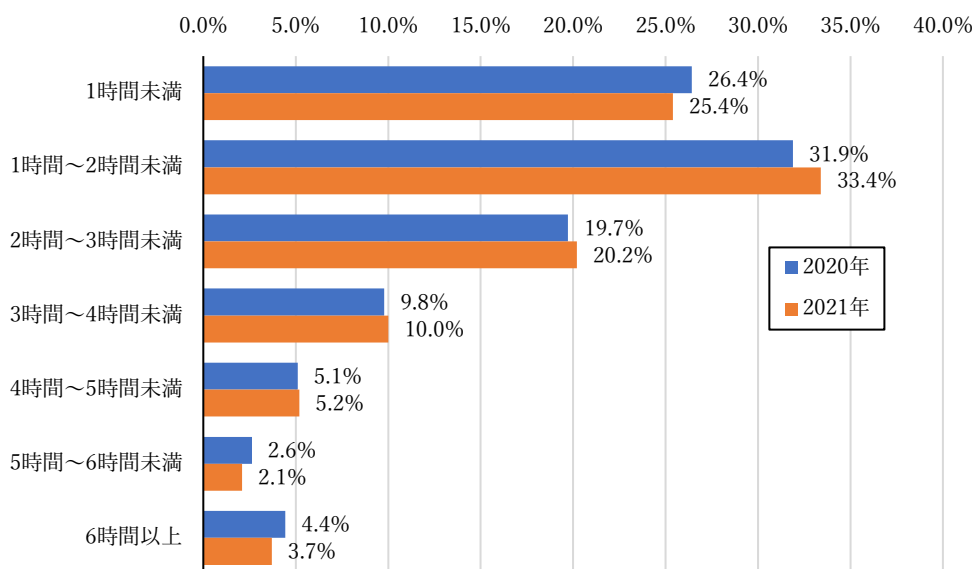


図2-11 1日の予復習時間

次に学生の教育経験の変化を見る（図2-12）。図には各項目の経験について「よくあった」、「まあまああった」の割合を掲載した。まず全体的に各項目の経験頻度が増加している傾向にある。特に、「グループワークなどで授業に積極的に参加する」（42.7%→57.7%）や「授業中に自分の意見や考えを

述べる」(47.9%→61.1%)についてはかなり高まった。対面授業の再開や拡大、オンライン授業のインフラの充実、オンライン授業の経験値が教員・学生ともに蓄積されてきたことなどが要因としてあげられよう。2021年度においては、より対話型・双方向型の授業を学生は経験することができたようだ。また「将来に役立つ実践的な知識や技能を学ぶ(実験、実習、実技など)」(39.5%→47.5%)や「社会や現実との関わりから学問の意義を学ぶ(フィールドワーク・体験型授業)」(22.6%→29.0%)などオンライン授業では制約の多い教育経験も前年度に比べ増加した。

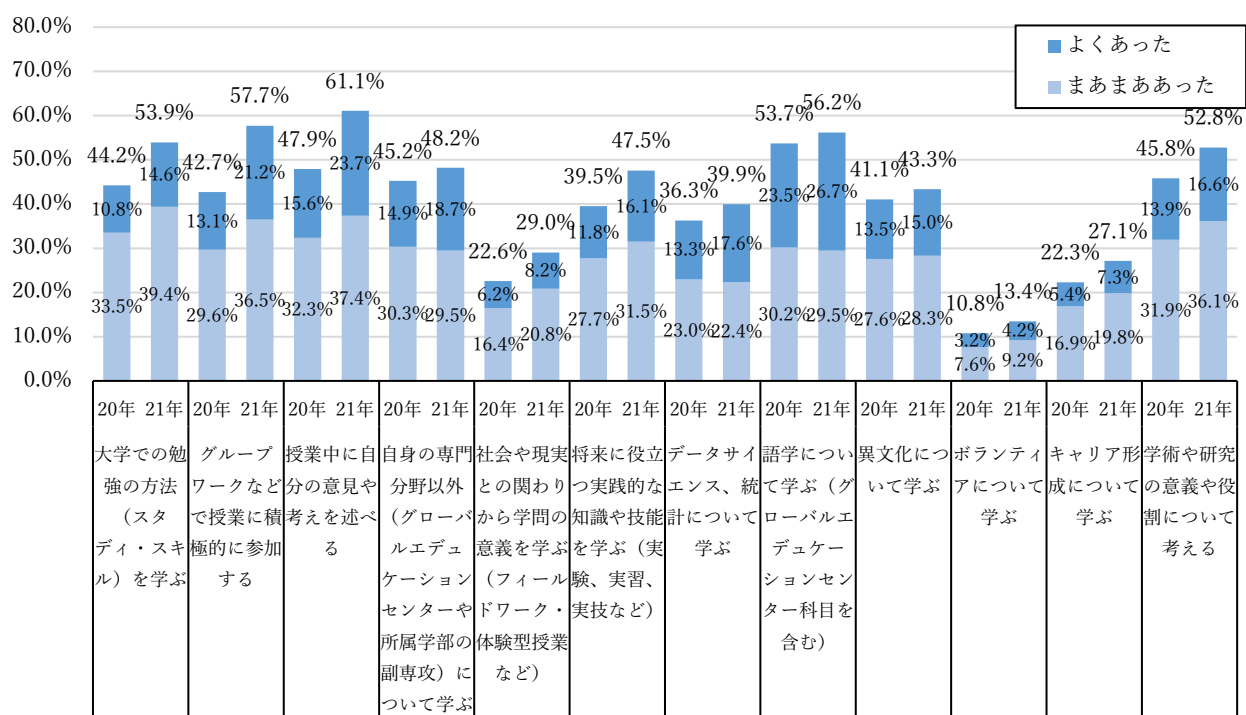


図2-12 教育経験

次に、学修行動の項目について示す(図2-13)。教育経験と同様に図には各項目の経験について「よくあった」、「まあまああった」の割合を掲載した。学修行動についても全体的に高くなった項目が確認できる。特に、「分からない点は友達に質問した」(54.9%→65.3%)や「資料を作成し、発表した」(62.6%→69.8%)、「授業で積極的に質問した」(36.9%→43.3%)については肯定的な回答が高くなった。教育経験とともに、学修経験も対面授業の再開や拡大、オンライン授業のインフラの充実、オンライン授業の経験値が教員・学生ともに蓄積されてきたことが、より双方向・対話型授業の実践に繋がったものと考えられる。

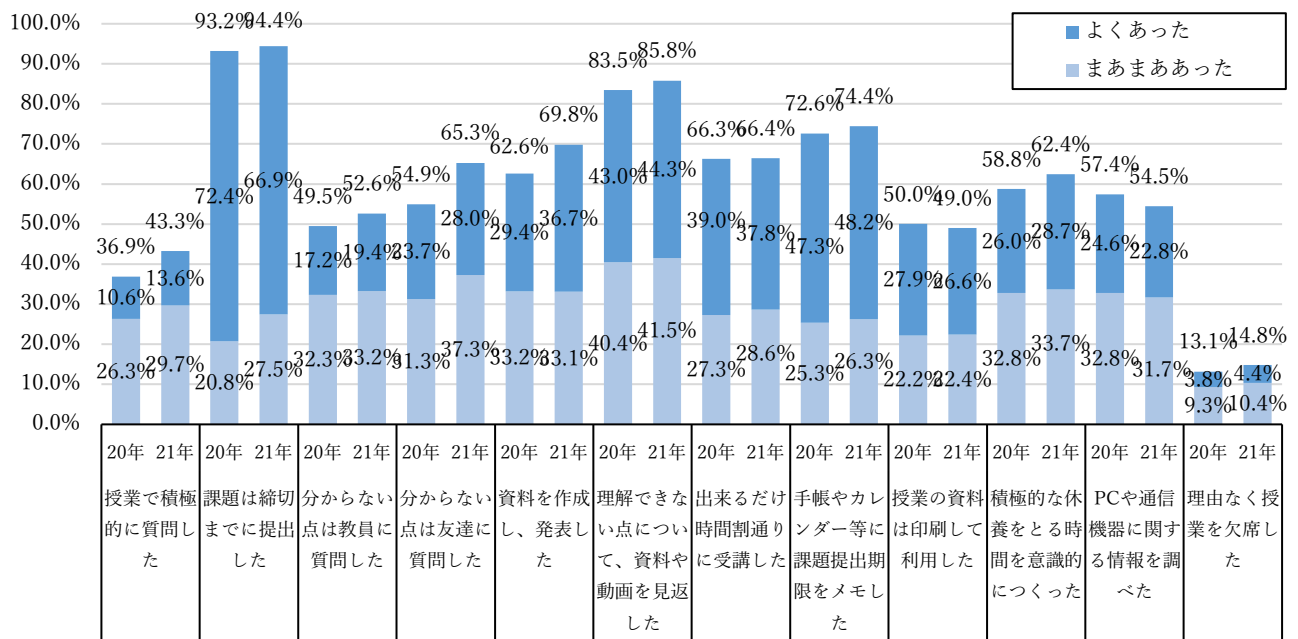


図 2-13 学修行動

2-4. 留学・インターンシップ

次に、留学とインターンシップの2020年から2021年にかけての変化について見る。双方ともに新型コロナウイルス感染症拡大の影響を大いに受けたものと考えられる。

まず留学経験や関心（図2-14）については、「留学した（現在、留学中を含む）」が11.4%から7.5%へと減少し、「留学していないが、留学に関心がある」が40.0%から43.3%に増加した。感染状況の収束がなかなか見込めない中で、学生の留学の機会が現実として少なくなっている。

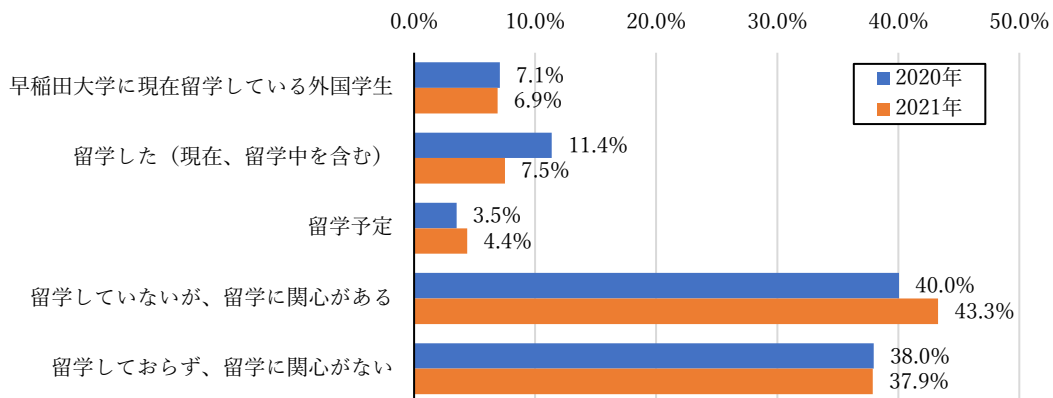


図2-14 留学経験・関心

また、「留学していないが、留学に関心がある」と回答した学生を対象にその理由を問うたのが図2-15である。両年度ともに大きな要因として3つがあげられる。1つ目が「経済的理由から」（45.2%→41.9%）であり、2つ目が「語学力が不安・準備が不足しているため」（42.3%→41.1%）、3つ目が「感染症や政情不安など安全面が心配だから」（40.3%→41.6%）である。若干の変化はあるが、両年度ともに変わらず、この3つの項目が高い傾向にあった。

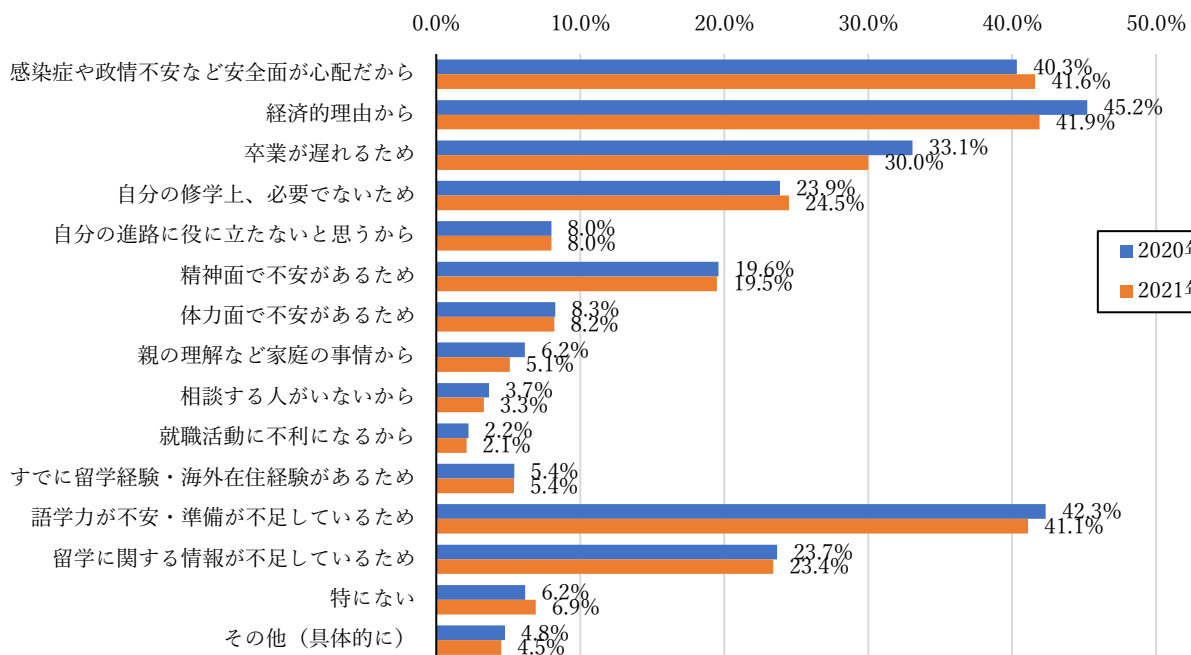


図2-15 留学を妨げる理由（複数回答）

またインターンシップの参加状況（図2-16）については、前年度が秋学期、本年度が春学期という調査時期の違いもあってか、「1～2つに参加した」（14.3%→10.6%）がやや減少し、「エントリーのみした（インターンシップには参加していない）」（8.4%→11.5%）がやや増加した。この間についてはインターンシップの参加状況にあまり大きな変化は見られない。

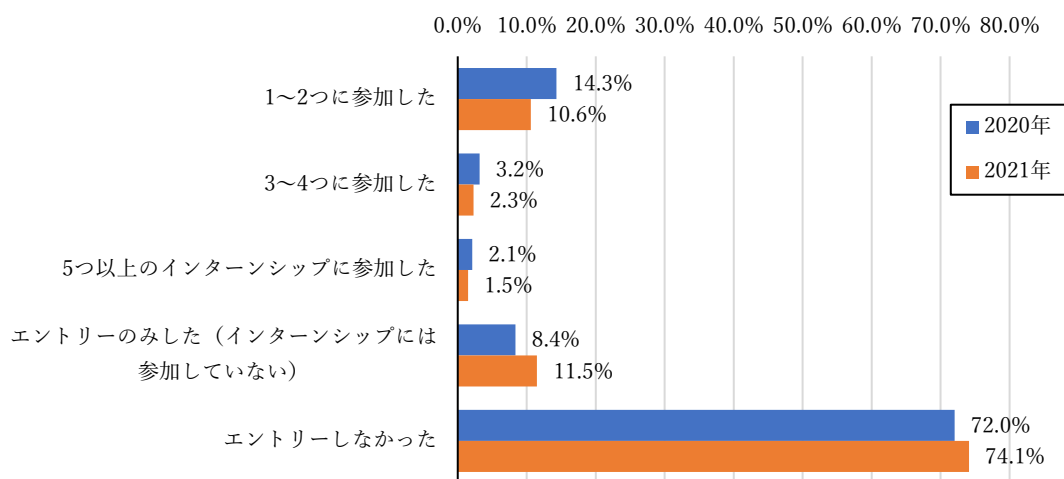


図2-16 インターンシップの参加状況

2-5. 満足度

これまで学生生活や教育・学修、留学・インターンシップ等の前年度との比較について述べてきた。それらとも関連する満足度の変化を見る（図2-17）。実際の質問項目は図の各項目について5件法で尋ねており、ここでは「満足している」、「どちらかと言えば、満足している」の回答率を示す。

結果を見ると、「学生生活全体の満足度」は肯定的な回答が35.0%から57.5%に大きく増加している。特に増加していたのは、「図書館サービスの満足度」（33.2%→61.1%）や「保健・健康に関するサービスの満足度」（24.9%→41.9%）であった。前者は前年度の感染状況においては利用が制限されており満足度が相対的に低かったが、改善された。また、後者は空調設備の強化を始めとした感染対策が学生により評価されているものと考えられる。その他、教育に関する項目（一般教育科目、語学科目、専門科目、ゼミ、卒業論文・卒業研究）いずれも前年度と比較して満足度が高くなった。

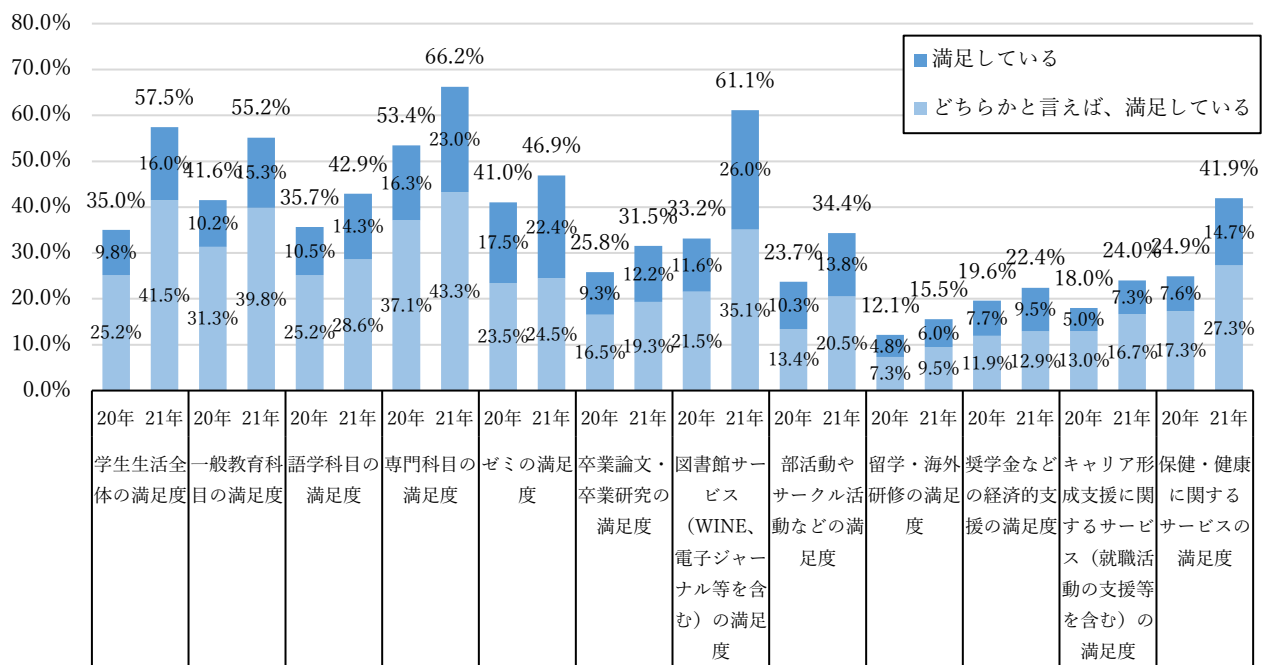


図2-17 満足度

2-6. 大学院生

次に、大学院生に注目する。まず、授業を受けていた地域を見ると（図2-18）、前年度とは大きな違いは生じていない。それでも、学部生を含めた全体（図1-1、p.5）と比較すると、学部生より多い割合で東京近郊からは離れた地域で授業を受けていたようである。2021年度の「首都圏以外の国内」の割合はむしろ増加しており（4.5%→5.5%）、「海外」も7.2%から減少しているものの5.9%いることから、一定数の大学院生がキャンパスからは離れた地域で授業を受けていたといえる。

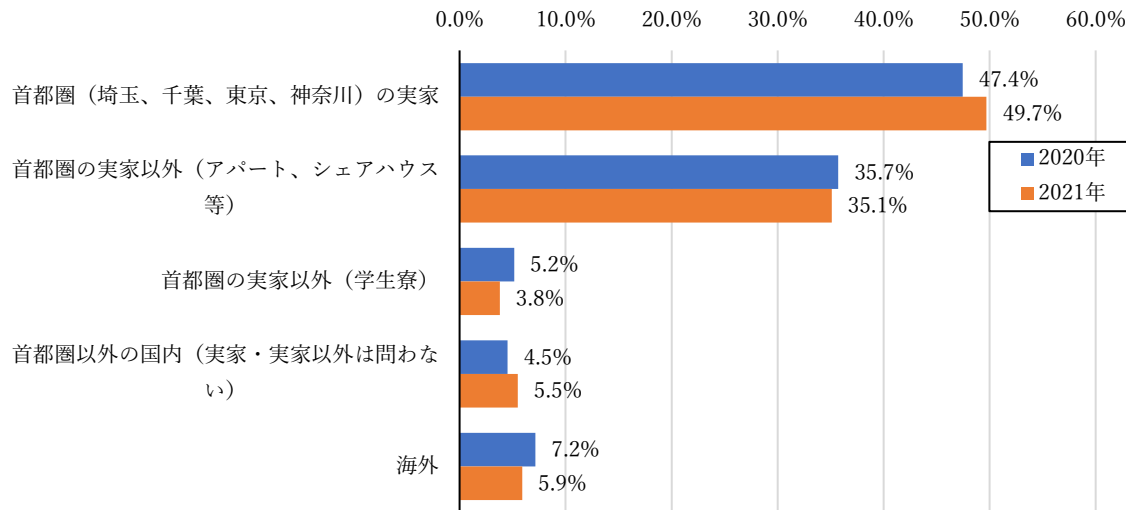


図2-18 授業を受けていた地域（大学院生）

また、新型コロナウイルス感染症の影響（図2-19）は、「アルバイト収入が減少した」（47.9%→38.9%）、「主たる家計の収入が減少した」（31.4%→25.7%）の割合は減少した。その他の項目は前年度と比較してあまり変化はなかった。

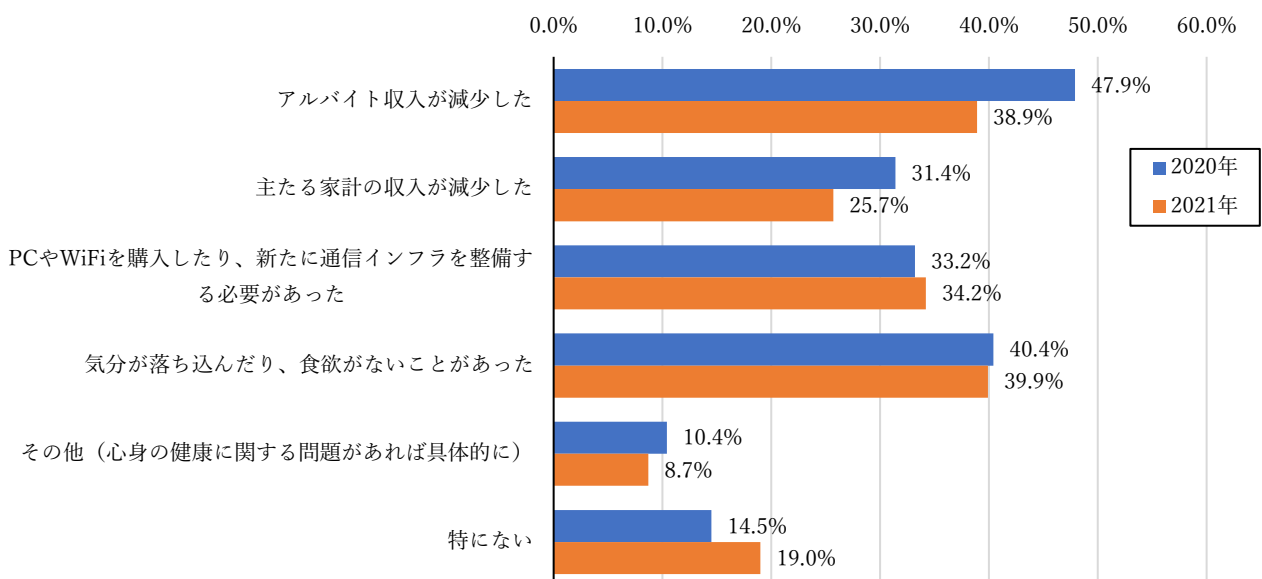


図2-19 新型コロナウイルス感染症の影響

1 週間あたりのアルバイト時間数（図 2－20）については、「該当しない（やっていない）」の割合が 37.6%から 33.6%にやや減少し、大学院生は今年度の方がよりアルバイトに従事しているようだ。また「16～20 時間」（5.3%→6.8%）、「31 時間以上」（6.5%→8.1%）と比較的長い時間もやや増加していた。

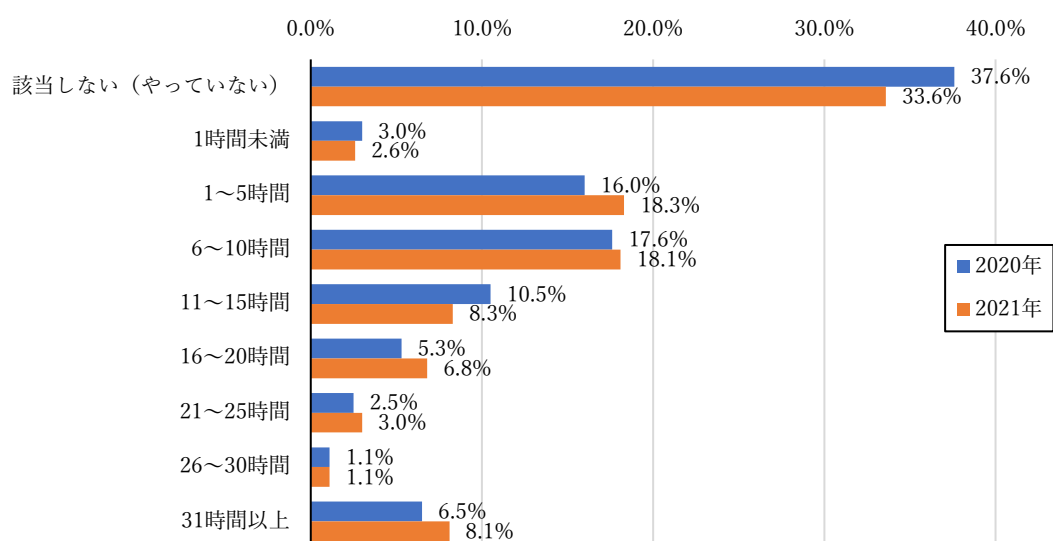


図 2－20 1 週間あたりのアルバイト時間数

大学院生の不安や悩みについて変化のあった項目を取り上げると（図 2－21）、「進路・就職など」は 55.6%から 53.2%に、「経済問題」は 28.7%から 24.3%に、「アルバイト」は 12.4%から 9.3%にやや減少した。

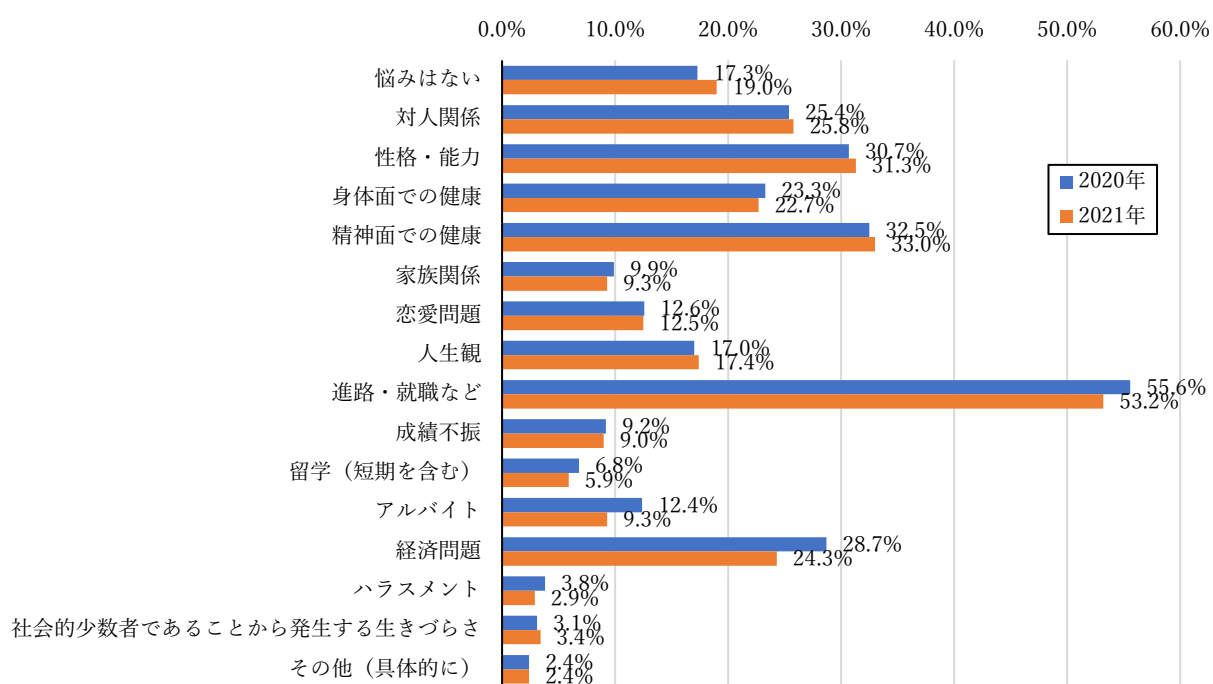


図 2－21 不安や悩み（複数回答）

また心身の健康（図2-22）については、前年度から大きな変化は見られなかった。しかし、コロナ禍前のデータはないため、コロナ禍以前との比較については慎重になる必要があるだろう。

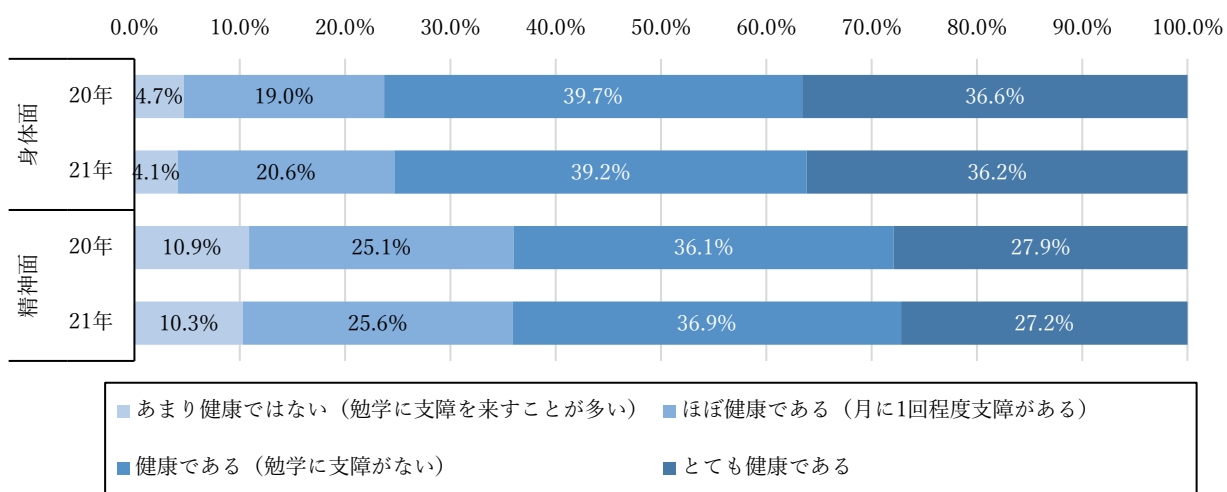


図2-22 心身の健康

第3章 AP（アドミッション・ポリシー）について

本章では、今年度から 2021 年度入学者を対象に新たに設定した AP（アドミッション・ポリシー）について、その回答や傾向を記述していく。AP は文部科学省のガイドラインでは以下のように示されている。「ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを踏まえるとともに、『学力の3要素』を念頭に置き、入学前にどのような多様な能力をどのようにして身に付けてきた学生を求めているか、入学後にどのような能力をどのようにして身に付けられる学生を求めているかなど、多様な学生を評価できるような入学者選抜の在り方について、できる限り具体的に示すこと。また、必要に応じ、入学前に学習しておくことが期待される内容についても示すこと」（文部科学省 2016²）。学力の3要素については、（1）知識・技能、（2）思考力・判断力、表現力等の能力、（3）主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度であり、これらに基づいて早稲田大学では全学的に以下のように定めている（図3-1）。

入学前に身につけることを求める能力

本学を志望する者には、入学前に以下の能力・素養を身につけてもらいたい。

初等・中等教育段階では

- ◆ 本学の教養教育および専門教育の基礎となる水準の知識・技能
- ◆ 本学での学修に必要な論理的思考力・判断力・表現力
- ◆ これらを身につけるための主体性・協働性

また、本学の理念に沿った

- ◆ 進取の精神に富んだ旺盛な知的好奇心とそれから導かれる独創性
- ◆ 自主独立の精神と他者への共感を育む豊かな感性
- ◆ 社会に貢献する強い意志を支える高い勉学意欲

図3-1 早稲田大学のアドミッション・ポリシー³

今回の調査では、（1）まず入学前に AP そのものを確認していたかを尋ね、（2）AP に関連する学習経験を質問項目（後述）にブレイクダウンして尋ねた。

² 文部科学省、2016、「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）及び「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/_icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369248_01_1.pdf

³ 早稲田大学 HP 早稲田大学の3つのポリシー https://www.waseda.jp/top/about/disclosure/univ_policy

3-1. AP の認知

2012 年に全国の大学一年生を対象に AP の認知度を調査した大学入試センター（2014）⁴によると、AP を「よく知っていた」は全体で 6.4%、「ある程度知っていた」は 32.2%であった。入試区分別では図 3-2 のように、公募推薦や AO 入試においてよく認知している傾向にある。

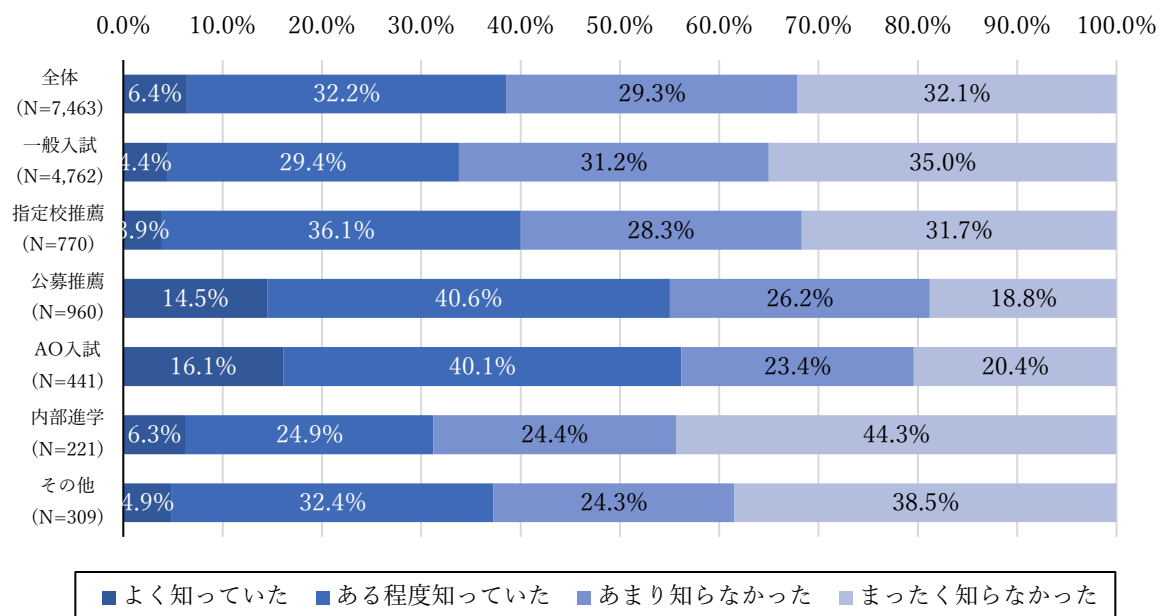


図 3-2 入学者の AP の認知度（大学入試センター 2014、p. 42 をもとに作成）

今回の早稲田大学の場合（図 3-3）には、対象者 1 年生のうち AP を確認したのは 64.7%であり、確認していないのは 16.0%、AP を知らなかったのは 19.3%となった。AP 自体は 8 割程度の学生が認知しているという結果となった。

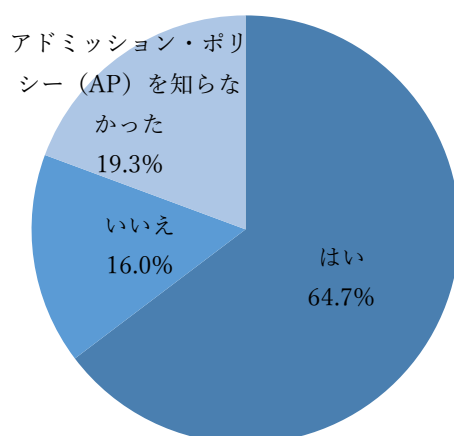


図 3-3 AP を確認したか

⁴ 大学入試センター研究開発部編、2014、『アドミッション・ポリシーの効果に関する研究』。

次に、学部別に AP の認知度を示す（図 3－4）。結果を見ると、学部によって違いがある。特に、人間科学部（通信教育課程）については AP を確認していた割合が 94.7% とかなり高い。この背景に、志願時に AP に関する記述を課していることが要因となっていると考えられる（図 3－5）。次に AP をより認知していたのは人間科学部（通学教育課程）の 81.2% であり、国際教養学部の 77.4% が続いた。一方で、政治経済学部（52.9%）や法学部（57.6%）では AP を確認した割合が相対的に低かった。

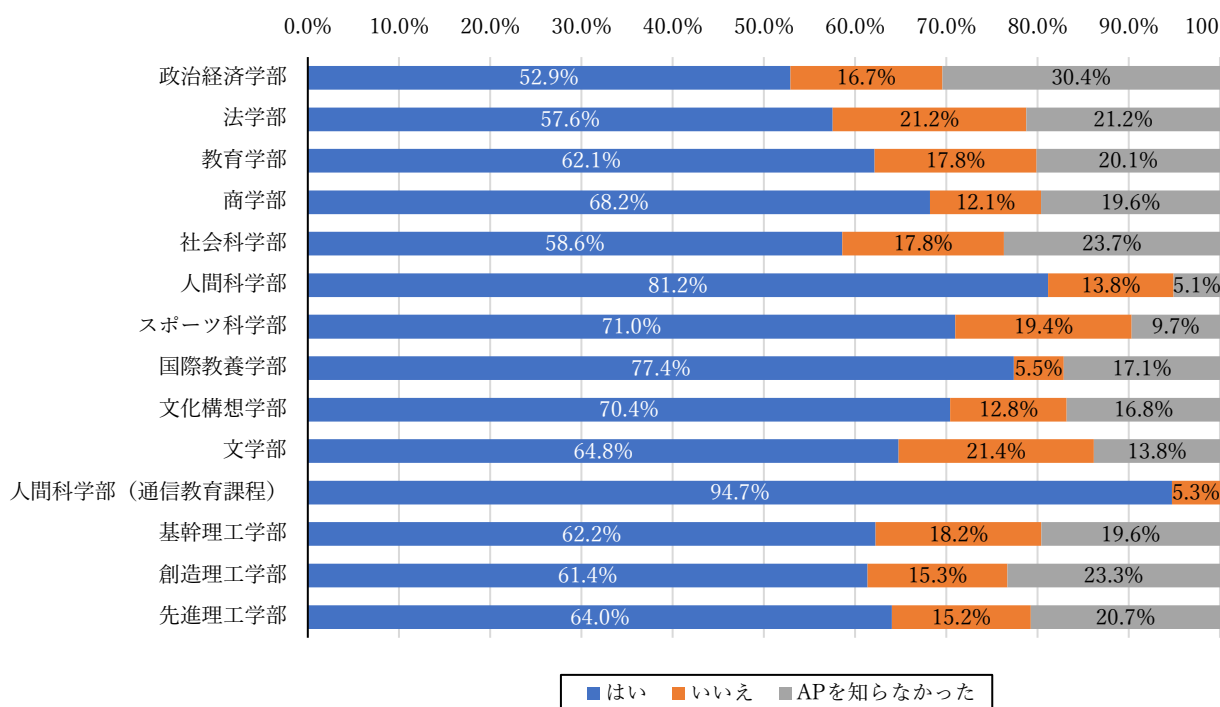


図 3－4 AP を確認したか（学部別）

3. 志望動機書について

オンライン出願にて以下の内容を入力してください。なお、オンライン出願の画面上で直接入力を行うと、正常に送信されない可能性があります。事前に「入学試験情報」に掲載されているフォーマット※に入力を行ってください。

※https://www.waseda.jp/e-school/pdf/38_common_doukisho_shitagaki.xlsx



1) 入学試験要項掲載の「人間科学部 eスクールの3つの方針」を踏まえて、以下の各設問について出願者本人が入力してください。

- (1) アドミッション・ポリシーと自身の経験を関連付け、志望に至った経緯を記述してください。（700 字以上 800 字以内）
- (2) ディプロマ・ポリシーと自身の興味を関連付け、将来に向けて“人間科学”の分野で何を学びたいか記述してください。（700 字以上 800 字以内）
- (3) カリキュラム・ポリシーを確認し、入学から卒業までの自身の学修計画を記述してください。（500 字以上 600 字以内）
- (4) 各教員の研究内容や各科目のシラバスを確認し、その中から現在最も関心の高いものを取り上げ、履修を通して自身の学びにどのように活かしたいかを掲載されている文章を引用して記述してください。（700 字以上 800 字以内）

図 3－5 人間科学部（通信教育課程）の一般選抜入学試験要項⁵

⁵ 早稲田大学人間科学部、「一般選抜入試募集要項」、https://www.waseda.jp/e-school/pdf/35_yoko_beta.pdf（2022 年 2 月 7 日閲覧）。

また入試区分別（図３－６）では、上述した大学入試センター（2014）と類似した傾向を確認できる。「一般入試入学」で AP を確認した割合は 62.4%であり、「AO 入試」では 84.4%、や「推薦入学」は 89.1%であった。また附属・系属校の認知が相対的に低く、「AP を知らなかった」の割合も早稲田高校を除くと 60～70%代である。

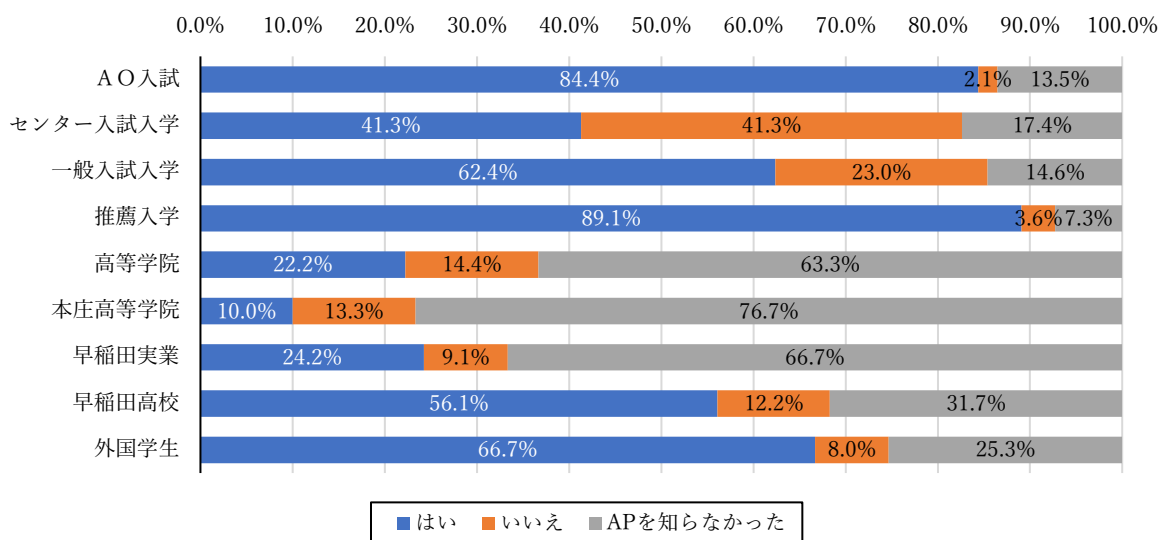


図３－６ AP を確認したか（入試区分別）

また、地域によっても AP の認知は異なる（図３－７）。ここでは出身高校所在地を首都圏（埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県）と非首都圏（それ以外の国内）に分けた。非首都圏の学生は、AP を確認した割合が 77.4%と比較的高く、一方で首都圏では 58.4%と低い。非首都圏では、「AP を知らなかった」の割合も 7.3%と低い。首都圏には首都圏附属・系属校の影響等もあると考えられるが、地域によって AP の認知は異なる結果となった。

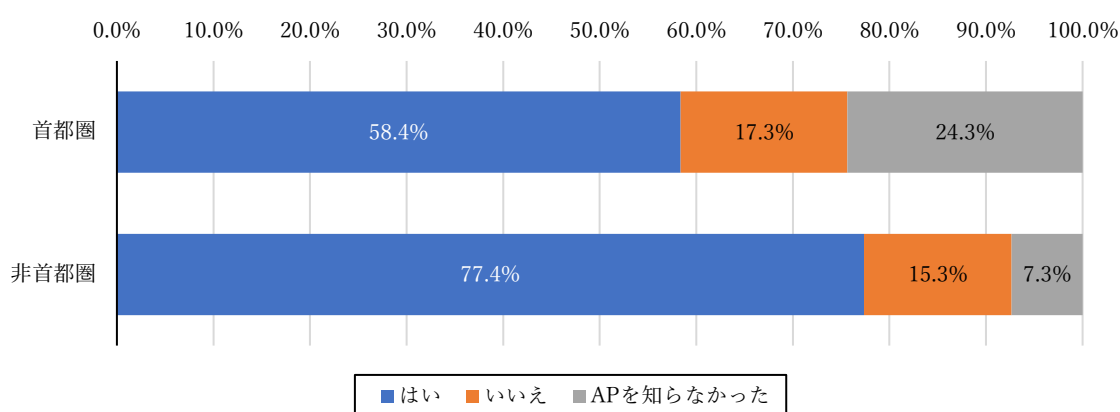


図３－７ AP を確認したか（出身高校所在地別）

次に、大学（図３－８）と学部（図３－９）の志望度によって AP の認知が異なるのか示す。直感的に予想されるように、大学・学部いずれにおいても、第一志望の方が、非第一志望と比較して AP を確認していることが示された。

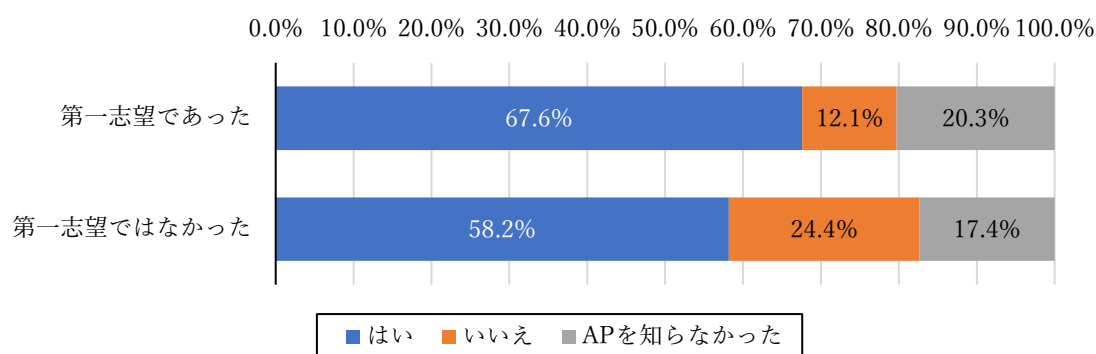


図 3－8 APを確認したか（大学志望度別）

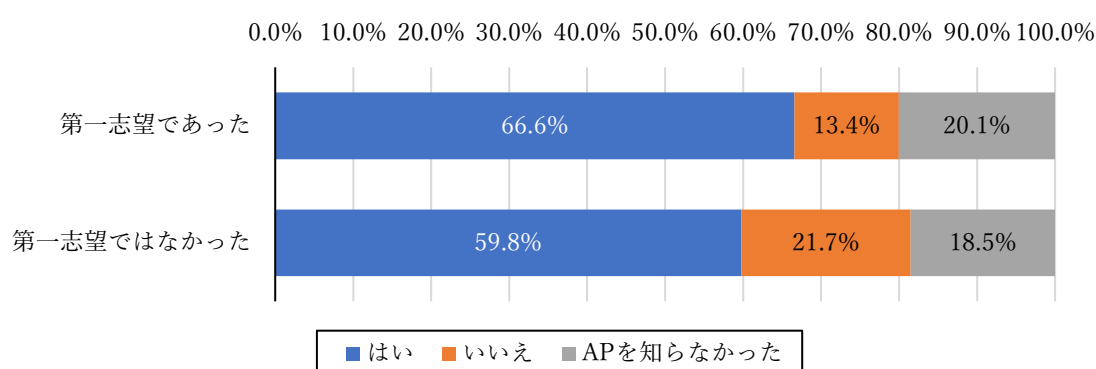


図 3－9 APを確認したか（学部志望度別）

以上見てきたように、APの認知については、入試区分や地域、大学・学部の志望度によって傾向が異なる。それらの傾向が学部として集約されて、図3－4のような学部間の違いが生じているものと考えられる。その他の属性や意識についても引き続き分析課題としたい。

3－2. APの認知のタイプ別分析

次に、①APを確認している学生、②APを確認していない学生、③APを知らなかった学生の間で入学後の学修状況等は異なるのか示す。APを知っており確認する行為は、入学後の学修にどのように関連するのだろうか。

図3－10においては、履修選択において参考にする情報をAP認知別に示した。結果は、APを確認していた層（凡例：はい）は、「MyWasedaのお知らせ」（57.9%）や「大学や学部事務所からのメール」（35.9%）、「大学や学部のHP」（46.4%）など大学からのオフィシャルな情報をより参考にしている。他方で、「APを知らなかった」層は大学からのオフィシャルな情報は比較的参考にはしない傾向にあるが、「友人とのやりとり」（53.7%）や「先輩からの情報」（38.2%）をより参考にして履修選択をしている傾向にある。大学で学ぶにあたってどこから情報を得るのか、その経路が異なっているようだ。

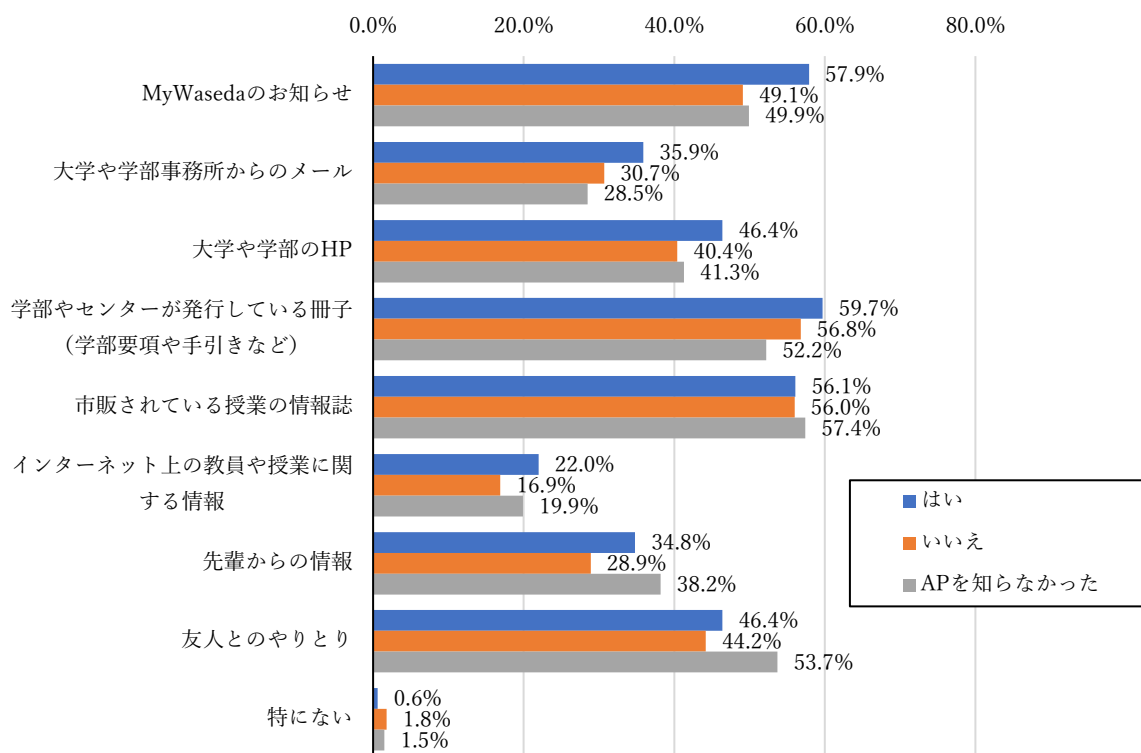


図 3-10 履修選択において参考にする情報 (AP 認知別)

また AP 認知別に授業の出席状況 (図 3-11) を見ると、AP を確認していた層 (図中：はい) の方が「90～100%」の割合が 84.2%と比較的高かった。一方で AP を確認していない層 (図中：いいえ) は「90～100%」の割合が 77.3%、「AP を知らなかった」層は 76.6%と比較的低い。

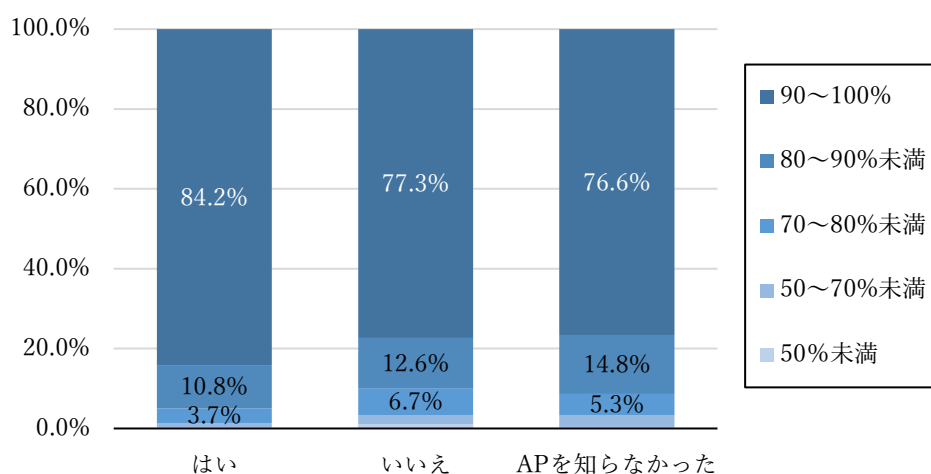


図 3-11 平均授業出席率 (AP 認知別)

続いて 1 日あたりの予復習時間についても同様の傾向が見て取れる (図 3-12)。どのタイプも「1 時間～2 時間未満」が最も多いものの、AP を確認していた層では「1 時間未満」の割合が 19.3%と比較的低く、2 時間以上の割合が 41.9%とやや高い。このように、本調査の実施時である入学して間もない

春学期の学修状況ではあるが、AP の認知度別に見てみると、AP を確認していた学生ほどより在学中の学びも熱心であることがうかがえる。

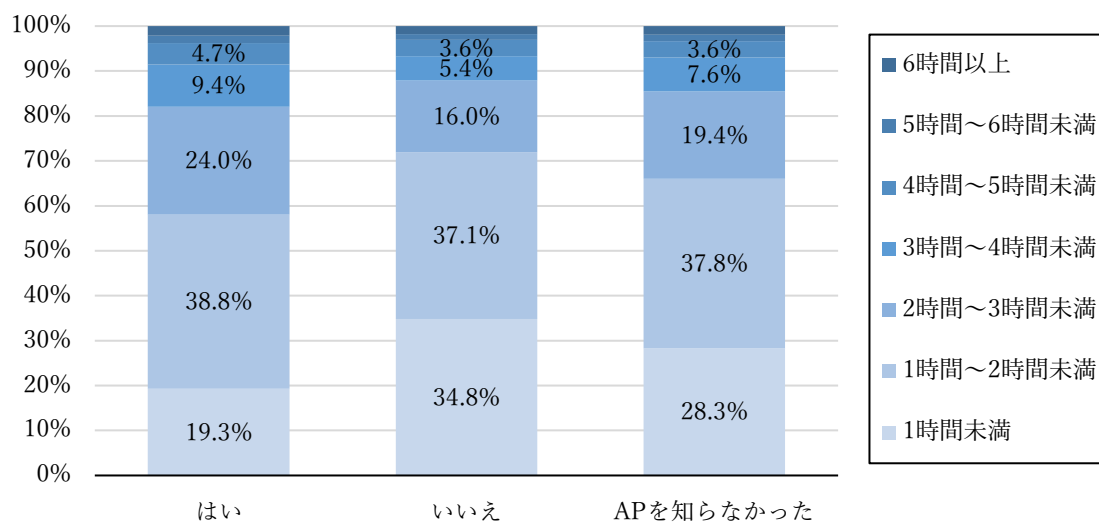


図 3-12 1日の予復習時間（AP 認知別）

3-3. APに関連する経験

次に、図3-1で示した早稲田大学が定めるAPについて、入学前までの経験を尋ねた項目を11設定し、経験を修得の程度とし4件法で尋ねた(図3-13)。修得度では、高校で学習した科目を外国語科目、理系科目、文系科目の3つに分け、それらの学習の程度について設定した(図中上3つ)。

全体的に各項目の修得度は肯定的な回答(「あてはまる」+「まあまああてはまる」)が高く、最も肯定的な回答の割合が高いのは「相手の立場や考え方に共感することができた」(91.5%)であった。科目以外の項目では「自分の考えを口頭あるいは図や文章を用いて明確に表現することができた」の肯定的な回答が76.8%と相対的に低かった。

また、科目に関する項目では理系科目(数学・理科)について学習する経験が全体としては低い。肯定的な回答の割合は外国語科目が90.0%であり、文系科目が82.3%、理系科目が63.6%となった。

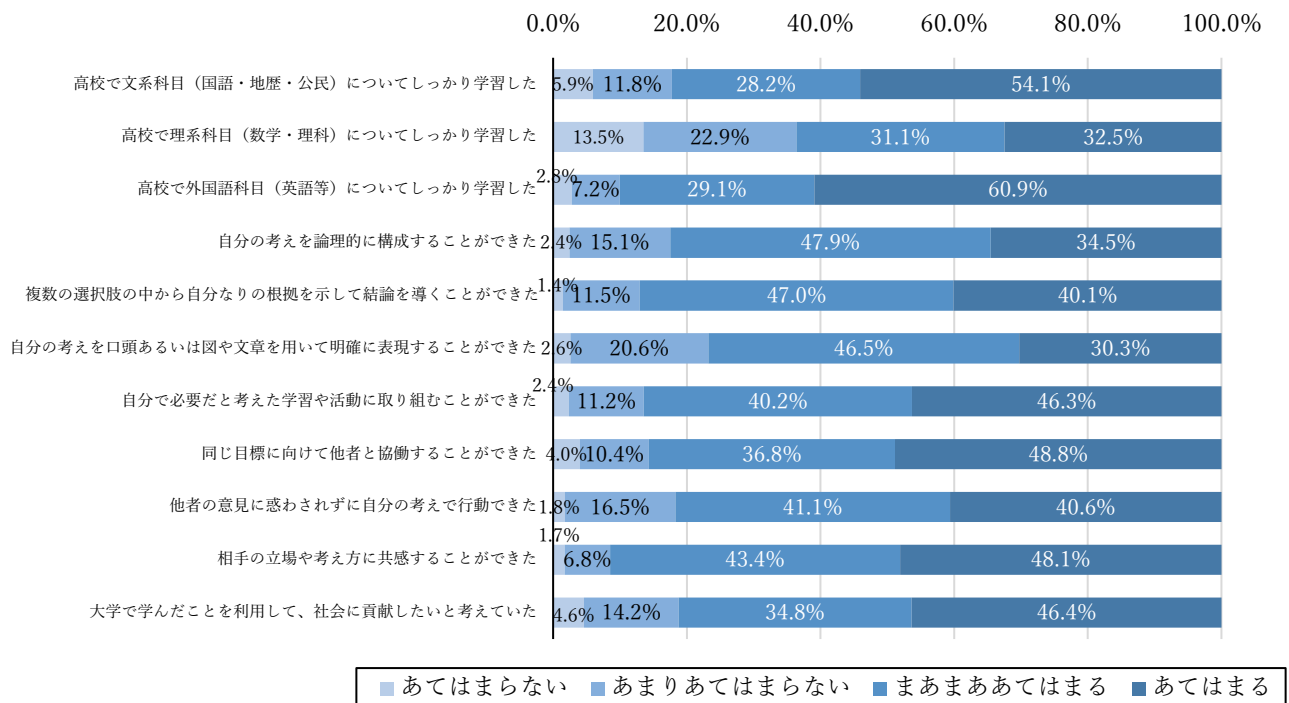


図3-13 大学入学前の経験

このような傾向は当然、入学する学部によって異なると考えられるため、図3-14では学部を文系と理系に分けて示す。理系には、理工学術院(基幹理工学部、創造理工学部、先進理工学部)に該当する3つの学部が含まれ、文系はそれ以外の学部とした。まず科目については、文系学部では文系科目(87.2% > 61.9%)、外国語科目(90.8% > 86.9%)の肯定的な回答が理系学部に比べて高い。また予想される通り、理系科目は理系学部のほうが文系学部よりも高い(96.5% > 55.6%)。その他の項目においては、「自分の考えを口頭あるいは図や文章を用いて明確に表現することができた」については理系学部の方がやや高い(82.2% > 75.5%)。

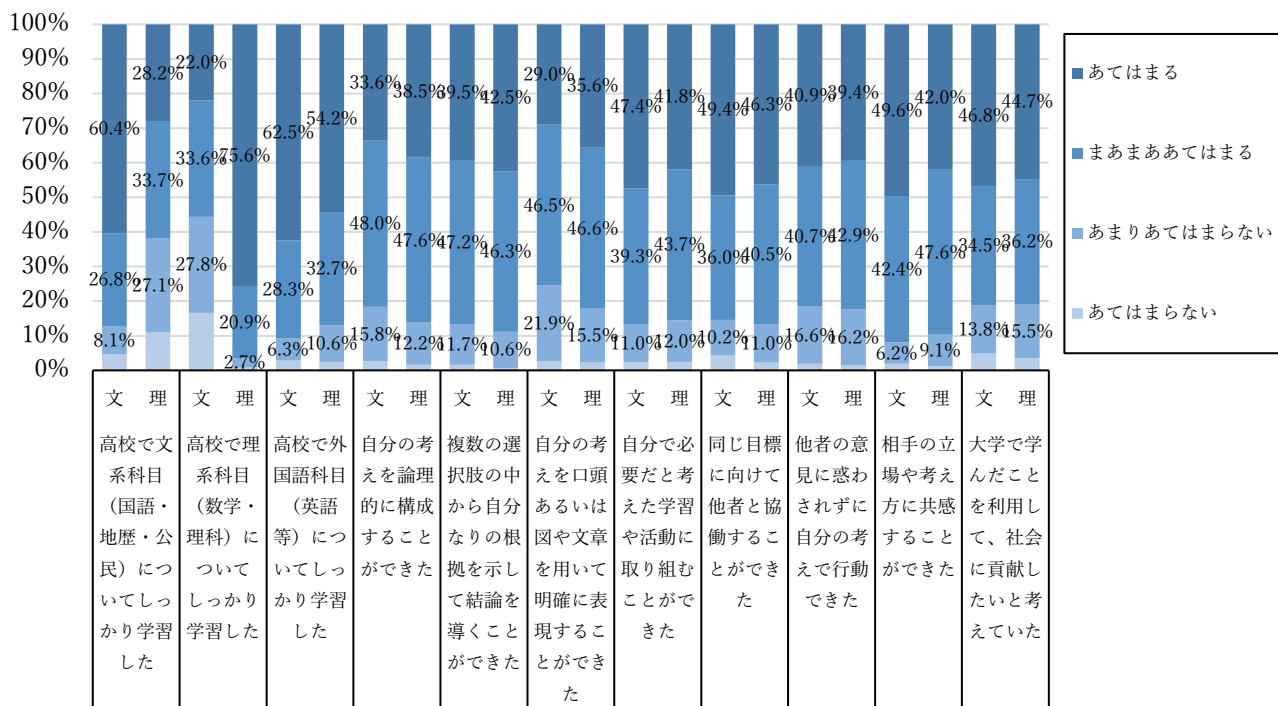


図3-14 大学入学前の経験（文理別）

次に、入学前までの経験間の相関を示す（表3-1）。ここでも、文系理系別に分け、相関係数が.500以上のセルを色付けした。まず文系、理系ともに相関が中程度の項目として、「④自分の考えを論理的に構成することができた」、「⑤複数の選択肢の中から自分なりの根拠を示して結論を導くことができた」、「⑥自分の考えを口頭あるいは図や文章を用いて明確に表現することができた」をあげることができる。いずれも論理的思考力・判断力・表現力に該当する項目である。一方で、文系理系問わず、科目に関する学習経験（①～③）は、それ以外のAPに関する経験（④～⑪）との相関係数は低い。この点はより深い分析が必要となるが、科目に関する学習経験は直接的には早稲田大学の定めるAPに関連する項目の修得には繋がっていない。

また文系においては、「⑧同じ目標に向けて他者と協働することができた」と「⑩相手の立場や考え方に共感することができた」の相関が高く、理系においては、「②高校で理系科目（数学・理科）についてしっかり学習した」と「③高校で外国語科目（英語等）についてしっかり学習した」の相関が比較的高い。

さらに、これまで見てきた大学入学前の経験と早稲田大学が定めるディプロマ・ポリシーの調査時点での修得度、APとDPの関係を示す。まだ調査対象者は入学して2～3ヶ月程度の時点である点に留意しつつ、結果を見ると、弱い正の相関を確認できる。科目の学習との関係では、「③高校で外国語科目（英語等）についてしっかり学習した」と「外国語を理解し、話せる」（.322）を除くと、ほぼ相関関係はない。上述した経験間の相関関係のように、科目の学習経験が直接的に、DPの修得に繋がるとは考えにくい。この点を含め、2021年度入学者の今後の動向を注視したい。

表 3－1 大学入学前の経験間の相関係数（右上文系。左下理系。）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
①高校で文系科目（国語・地歴・公民）についてしっかり学習した	1	.048*	.467**	.198**	.244**	.147**	.302**	.251**	.153**	.190**	.176**
②高校で理系科目（数学・理科）についてしっかり学習した	.367**	1	.198**	.212**	.175**	.222**	.149**	.179**	.071**	.174**	.169**
③高校で外国語科目（英語等）についてしっかり学習した	.402**	.534**	1	.281**	.269**	.226**	.318**	.274**	.172**	.223**	.218**
④自分の考えを論理的に構成することができた	.331**	.397**	.278**	1	.698**	.637**	.356**	.246**	.351**	.262**	.244**
⑤複数の選択肢の中から自分なりの根拠を示して結論を導くことができた	.338**	.383**	.304**	.684**	1	.644**	.405**	.254**	.386**	.282**	.219**
⑥自分の考えを口頭あるいは図や文章を用いて明確に表現することができた	.293**	.277**	.155**	.663**	.653**	1	.399**	.268**	.365**	.278**	.248**
⑦自分で必要だと考えた学習や活動に取り組むことができた	.238**	.386**	.277**	.372**	.435**	.435**	1	.467**	.420**	.385**	.324**
⑧同じ目標に向けて他者と協働することができた	.220**	.319**	.244**	.273**	.317**	.328**	.449**	1	.305**	.507**	.420**
⑨他者の意見に惑わされずに自分の考えで行動できた	.137**	.292**	.164**	.382**	.420**	.407**	.464**	.290**	1	.312**	.213**
⑩相手の立場や考え方に共感することができた	.201**	.230**	.188**	.299**	.311**	.323**	.353**	.469**	.314**	1	.428**
⑪大学で学んだことを利用して、社会に貢献したいと考えていた	.131**	.223**	.150**	.253**	.253**	.282**	.296**	.317**	.211**	.357**	1

※**< $p.01$

表 3-2 大学入学前の経験と DP の相関係数

	新しいこ とに挑戦 できる	既存の考 え方にと らわれ ず、新し いアイデ アを生み 出せる	物事を論 理的に考 えること ができる	課題の解 決方法を 提案でき る	自分の考 えを分か りやすく 表現でき る	相手の状 況や考え 方を尊重 できる	物事を多 面的に考 えること ができる	健全に批 判するこ とができ る	公正な視 点で多様 性を受け 入れられ る	異文化を 理解でき る	外国語を 理解し、 話せる
①高校で文系科目（国語・地歴・公民）についてしっかり学習した	.107**	.069**	.081**	.103**	.112**	.145**	.122**	.120**	.136**	.155**	.132**
②高校で理系科目（数学・理科）についてしっかり学習した	.105**	.124**	.169**	.161**	.122**	.100**	.105**	.085**	.096**	.047*	.078**
③高校で外国語科目（英語等）についてしっかり学習した	.131**	.094**	.109**	.129**	.131**	.160**	.126**	.128**	.141**	.189**	.322**
④自分の考えを論理的に構成することができた	.282**	.331**	.466**	.424**	.427**	.198**	.331**	.340**	.247**	.188**	.257**
⑤複数の選択肢の中から自分なりの根拠を示して結論を導くことができた	.258**	.310**	.415**	.400**	.371**	.224**	.344**	.349**	.269**	.194**	.205**
⑥自分の考えを口頭あるいは図や文章を用いて明確に表現することができた	.299**	.349**	.382**	.412**	.463**	.189**	.354**	.344**	.245**	.193**	.257**
⑦自分で必要だと考えた学習や活動に取り組むことができた	.305**	.273**	.246**	.275**	.259**	.244**	.265**	.256**	.251**	.205**	.196**
⑧同じ目標に向けて他者と協働することができた	.249**	.218**	.195**	.222**	.243**	.292**	.240**	.227**	.271**	.258**	.191**
⑨他者の意見に惑わされずに自分の考えで行動できた	.253**	.282**	.264**	.283**	.283**	.168**	.299**	.291**	.244**	.173**	.170**
⑩相手の立場や考え方に共感することができた	.251**	.232**	.200**	.221**	.241**	.455**	.315**	.255**	.335**	.277**	.180**
⑪大学で学んだことを利用して、社会に貢献したいと考えていた	.255**	.234**	.183**	.234**	.212**	.261**	.227**	.200**	.257**	.222**	.209**

※**< $p.01$

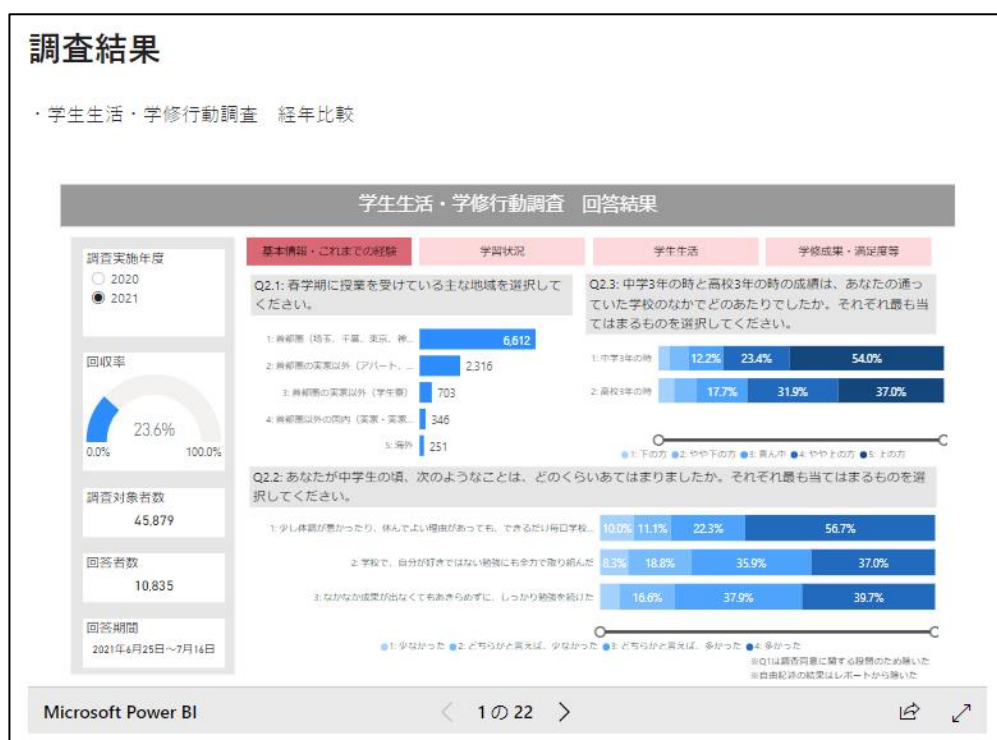
終章 課題と今後の展望

本報告書では、2019年度まで38回にわたって行われてきた学生生活調査を継承し、2020年度から新たに企画、実施された学生生活・学修行動調査の第2回（2021年度）の分析結果を示した。具体的には、まず2020年度に実施した前回調査との比較を通して、コロナ禍の学修や学生生活の変化を整理した（第2章）。また、2021年度入学者を対象としたアドミッション・ポリシー（AP）の項目について分析を行った（第3章）。

これらの分析結果を総括すると、第2章の前年度との比較分析の結果、教育経験や学修行動では各項目の経験について肯定的な回答がより高くなった。このような結果となった背景として、対面授業の再開や拡大、オンライン授業のインフラの充実、オンライン授業の経験値が教員・学生ともに蓄積されてきたことが、より双方向・対話型授業の実践に繋がったものと考えられる。

また第3章の2021年度入学者を対象としたAPの分析の結果、APを確認した学生は64.7%であり、確認していない学生は16.0%、APを知らなかった学生は19.3%となった。AP自体は8割程度の学生が認知しているという結果となった。APに関連する経験の質問群のなかで、最も肯定的な回答の割合が高いのは「相手の立場や考え方に共感することができた」（91.5%）であった。

以上の概略した結果は全学の会議において報告しており、引き続き調査目的（計画策定・政策形成への活用、社会的評価への活用、評価活動への活用、学生の実態把握への活用、各種広報への活用）に合う定点観測的な学生データの収集と分析を行っていく。なお大学総合研究センターのHPで経年調査の結果の公開もBIツールで公開しており（図終ー1）、参考にしてもらいたい。



図終ー1 HP 上での集計結果の公開

<https://www.waseda.jp/inst/ches/cher/about/>

付録 1. 集計表

2021 年度 学生生活・学修行動調査 集計表

I. 調査概要

II. 調査項目 ※網掛け部分の自由記述は割愛

1. 基本情報・これまでの経験

Q01. 秋学期に授業を受けている主な地域を選択してください。

Q02. あなたが中学生の頃、次のようなことは、どのくらいあてはまりましたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。

Q03. 中学 3 年の時と高校 3 年の時の成績は、あなたの通っていた学校のなかでどのあたりでしたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。

Q04. あなたが早稲田大学（大学院）に進学した理由は何ですか。あてはまるものすべて選択してください。

Q05. 【Q04】で選択したもののうち、進学理由として最もあてはまるものを一つ選択してください。

Q06. （大学院生のみ）あなたの大学院入学までのキャリアについてあてはまるものを一つ選択してください。

Q07. （大学院生のみ）あなたが大学院に進学した理由は何ですか。あてはまるものをすべて選択してください。

Q08. （大学院生のみ）【Q07】で選択したもののうち、進学理由として最もあてはまるものを一つ選択してください。

Q09. 早稲田大学（大学院）と学部（研究科）は第一志望でしたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。

2. 学修状況

Q10. （学部 1 年生のみ）あなたは入学前に、早稲田大学のアドミッション・ポリシー（AP）を確認しましたか。

Q11. （学部 1 年生のみ）あなたが大学に入学するまでに、次のようなことは、どれくらいあてはまりましたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。

Q12. 【大学（学部・大学院）入学時】に、次のようなことは、どれくらい身に付いていたと考えていましたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。

Q13. 大学教育について、「現在の」あなたの考え方で、A、B により近い方をそれぞれ一つ選択してください。

Q14. あなたは大学（学部・大学院）での授業や研究・勉強が、あなたの今後の進路先で役に立つと思いますか。あてはまるもの一つを選択してください。

Q15. あなたが授業を選ぶ際に重視することは何ですか。あてはまるものすべて選択してください。

Q16. 通常、あなたは、科目登録の手続きに関する情報を、何から得ていますか。あてはまるものすべて選択してください。

Q17. あなたが今年度春学期（春クォーター・夏クォーター、以降同様）に登録している授業コマ数は週当たりどれく

らいですか（90 分を 1 コマとします。）もっともあてはまるものを一つ選択してください。

Q18. 今年度春学期のあなたの授業平均出席率はどれくらいですか。もっともあてはまるものを一つ選択してください。

Q19. 現在、あなたは 1 日に平均すると、大学の授業の予習・復習などにどれくらいの時間をかけていますか。もっともあてはまるものを一つ選択してください。

Q20. あなたは大学の授業の予習・復習などは主にどの時間帯に行っていますか。もっともあてはまるものを一つ選択してください。

Q21. 2020 年度春学期を通して、以下の経験はどれくらいありましたか。それぞれの内容についてあてはまるものを選択してください。

Q22. 2020 年度春学期の授業を通して、以下のようなあなたの取組はどれくらいありましたか。それぞれの内容についてあてはまるものを選択してください。

3. 学生生活

Q23. 新型コロナウイルス感染症拡大による、経済的あるいは学習環境への影響について、当てはまるものすべてを選択してください（複数選択可）。

Q24. 現在の 1 週間のアルバイト・定職の時間について、もっともあてはまるものを選択してください。

Q25. あなたは現在、以下のような課外活動に所属、参加していますか。あてはまるものすべてを選択してください。

Q26. あなたは現在、修学上および学生生活全般で、次のような不安や悩みがありますか。あてはまるものすべてを選択してください。

Q27. 【Q24】の不安や悩みをあなたは誰に相談しますか。あてはまるものすべてを選択してください。

Q28. 【Q25】で回答したうち、もっともよく相談する相手を一つ選択してください。

Q29. あなたは大学入学後、留学しましたか（1 週間程度の短期間の研修・ゼミを含みます）。また、留学生していない方は留学に関心がありますか？もっともあてはまるものを一つ選択してください。

Q30. 【Q27 で「留学した（現在、留学中を含む）」か「留学予定」と回答した方にお尋ねします】あなたはいつ留学しましたか、あるいはいつ留学予定ですか。あてはまるものすべてを選択してください。

Q31. 【Q27 で「留学した（現在、留学中を含む）」か「留学予定」と回答した方にお尋ねします】あなたが留学した、留学する期間はどのくらいですか。あてはまるものすべてを選択してください。

Q32. 【Q27 で「留学していないが、留学に関心がある」と回答した方にお尋ねします】あなたが留学したい期間はどのくらいですか。もっともあてはまるものを選択してください。

Q33. 【Q27 で「留学していないが、留学に関心がある」、「留学しておらず、留学に関心がない」と回答した方にお尋ねします】留学を妨げる要因は何ですか。あてはまるものすべてを選択してください。

Q34. あなたはインターンシップ・プログラム（5 日以上のもの）にこれまで参加しましたか。もっともあてはまるものを一つ選択してください。

Q35. 【Q32 で「インターンシップに参加した」と回答した人にお尋ねします】あなたがインターンシップにこれまでに参加した時期はいつですか？あてはまるものすべてを選択してください。

Q36. 【Q32 で「インターンシップに参加した」と回答した人にお尋ねします】あなたはどのように参加しましたか。あてはまるものすべて選択してください。

Q37. 現在、あなたは学部・大学院卒業後、どのような進路を考えていますか。あてはまるものすべて選択してください。内定している場合には、内定先を選択してください。

4. 学修成果・満足度等

Q38. 【現在】あなたは、次のそれぞれについて、どれくらい身に付いたと思いますか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。

Q39. 2020 年度春学期の授業や学生生活等の満足度について、それぞれ最も当てはまるものを選択してください。

Q40. あなたは現在、身体面・精神面で健康ですか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。この質問項目に回答したくない場合には、未回答のままで結構です。

Q41. 現在、次のような不安や悩みがありますか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。この質問項目に回答したくない場合には、未回答のままで結構です。

Q42. 最後に学生生活や学修環境に対する要望等がもしあれば自由に回答してください。

I. 調査概要

- ◆ **調査方法** 「Qualtrics」を用いたオンライン調査
- ◆ **調査時期** 2021 年 6 月 25 日（金）～2021 年 7 月 16 日（金）
- ◆ **調査対象者** 早稲田大学の学生 45,884 名
- ◆ **回収状況** 10,835 件 回収率（23.6%）

- ◆ **調査結果引用に関するお願い**

本調査結果を引用される際には、下記の出典を明記くださいますようお願いいたします。

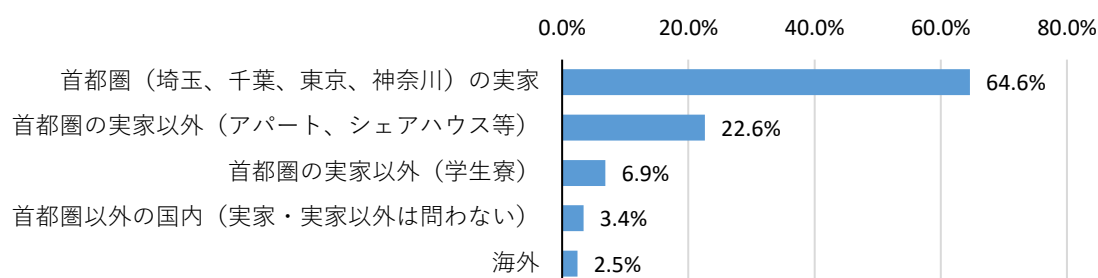
著者：早稲田大学大学総合研究センター

タイトル：2021 年度 学生生活・学修行動調査

Ⅱ. 調査項目

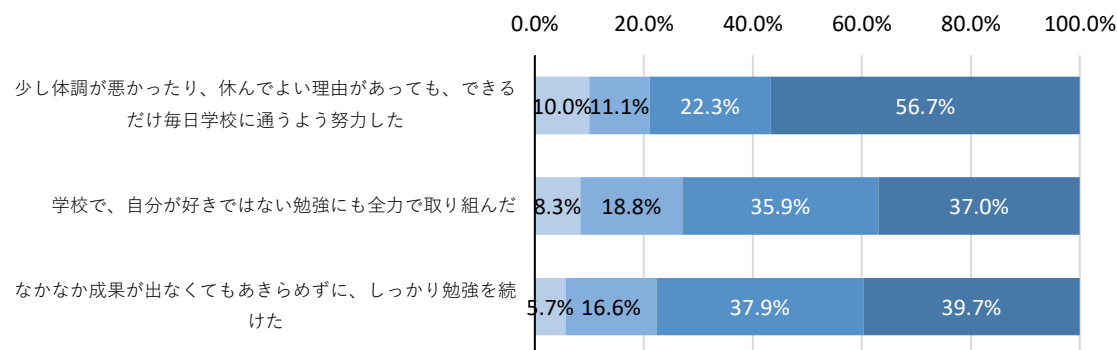
1. 基本情報・これまでの経験

Q01. 秋学期に授業を受けている主な地域を選択してください。



首都圏（埼玉、千葉、東京、神奈川）の実家	6,612
首都圏の実家以外（アパート、シェアハウス等）	2,316
首都圏の実家以外（学生寮）	703
首都圏以外の国内（実家・実家以外は問わない）	346
海外	251

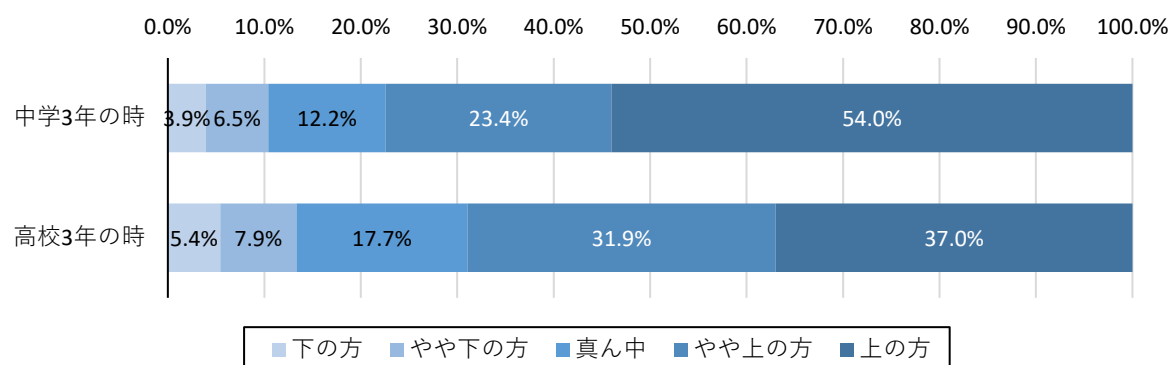
Q02. あなたが中学生の頃、次のようなことは、どのくらいあてはまりましたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。



■ 少なかった ■ どちらかと言えば、少なかった ■ どちらかと言えば、多かった ■ 多かった

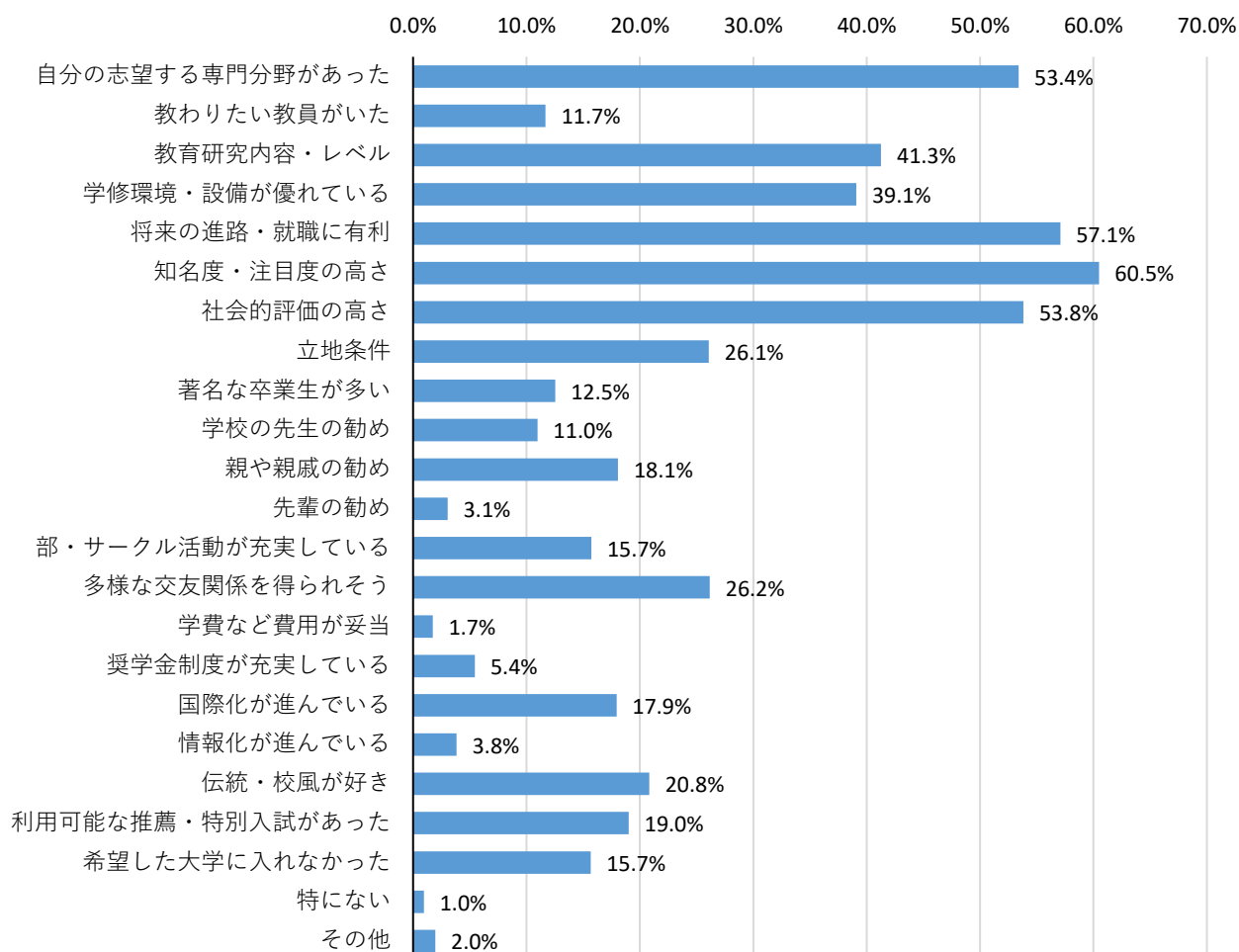
	少なかった	どちらかと言え ば、少なかった	どちらかと言え ば、多かった	多かった
少し体調が悪かったり、休んでよい理由があっても、できるだけ毎日学校に通うよう努力した	1,015	1,123	2,264	5,759
学校で、自分が好きではない勉強にも全力で取り組んだ	845	1,901	3,636	3,745
なかなか成果が出なくてもあきらめずに、しっかり勉強を続けた	579	1,680	3,840	4,023

Q03. 中学 3 年の時と高校 3 年の時の成績は、あなたの通っていた学校のなかでどのあたりでしたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。



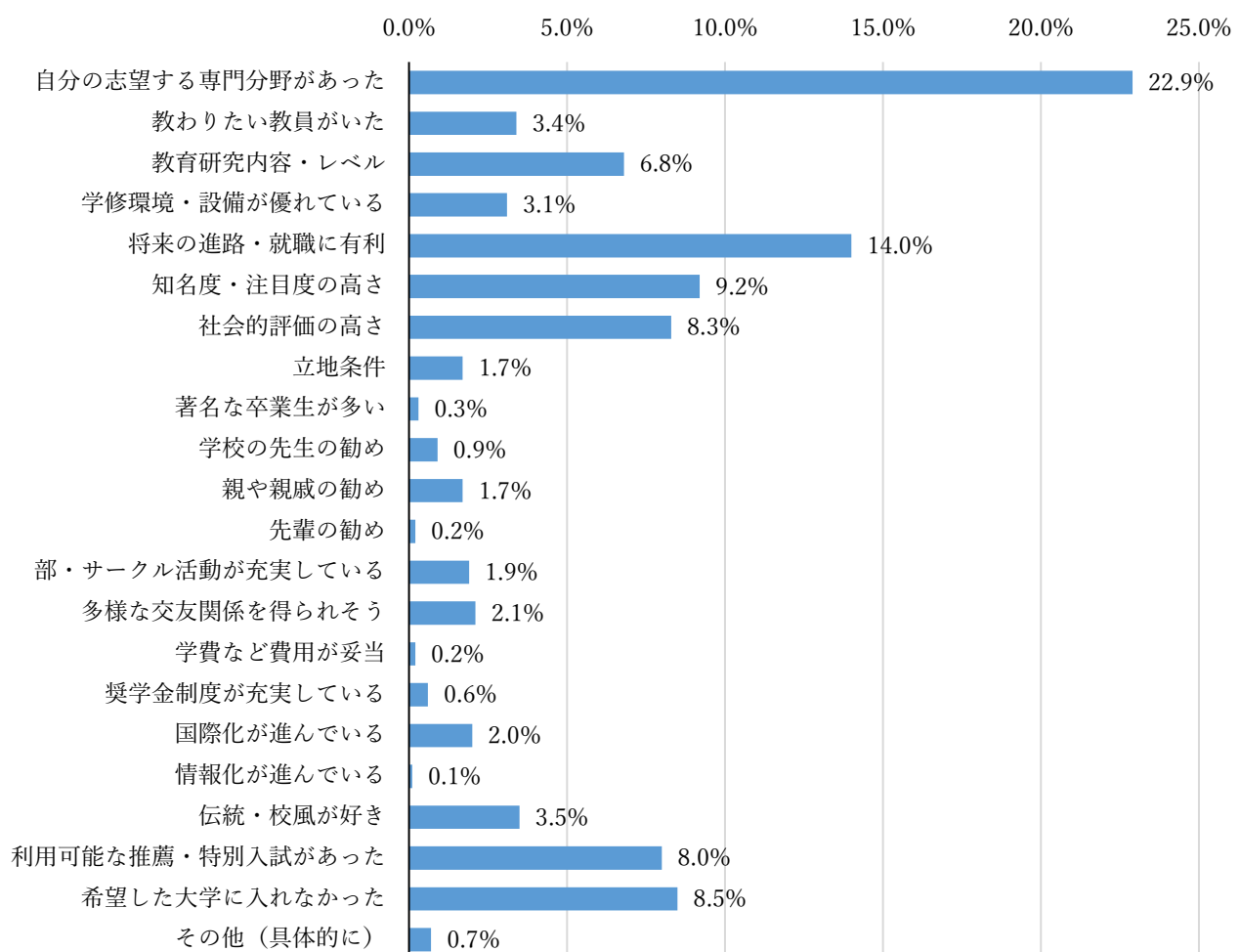
	下の方	やや下の方	真ん中	やや上の方	上の方
中学 3 年の時	401	657	1,236	2,377	5,484
高校 3 年の時	551	802	1,801	3,243	3,755

Q04. あなたが早稲田大学（大学院）に進学した理由は何ですか。あてはまるものすべて選択してください。



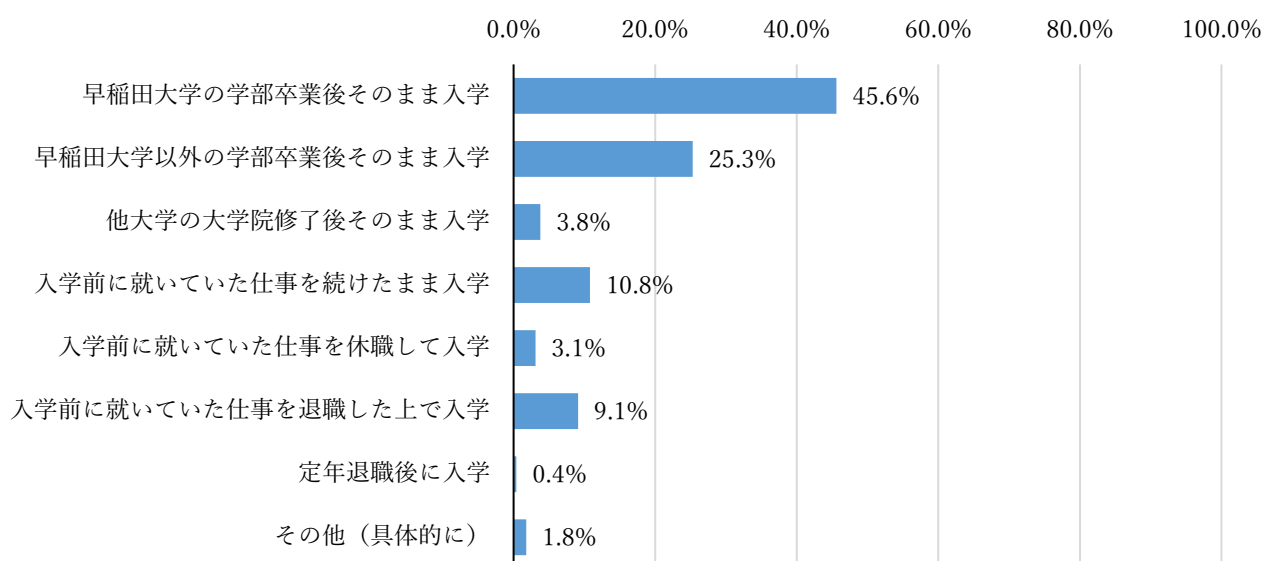
自分の志望する専門分野があった	5,438	部・サークル活動が充実している	1,601
教わりたい教員がいた	1,190	多様な交友関係を得られそう	2,665
教育研究内容・レベル	4,204	学費など費用が妥当	177
学修環境・設備が優れている	3,981	奨学金制度が充実している	554
将来の進路・就職に有利	5,814	国際化が進んでいる	1,828
知名度・注目度の高さ	6,162	情報化が進んでいる	391
社会的評価の高さ	5,482	伝統・校風が好き	2,123
立地条件	2,657	利用可能な推薦・特別入試があった	1,937
著名な卒業生が多い	1,276	希望した大学に入れなかった	1,596
学校の先生の勧め	1,118	特にな	97
親や親戚の勧め	1,841	その他（具体的に）	199
先輩の勧め	311		

Q05. 【Q04】で選択したもののうち、進学理由として最もあてはまるものを一つ選択してください。



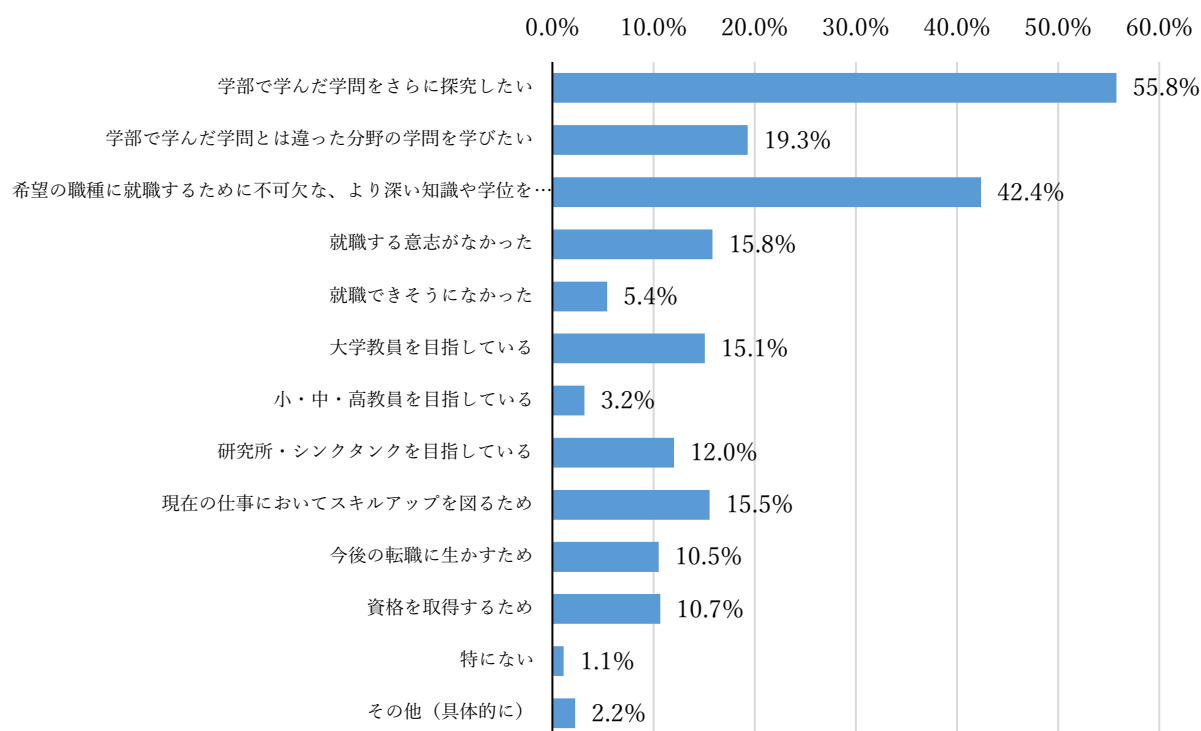
自分の志望する専門分野があった	2,025	先輩の勧め	17
教わりたい教員がいた	297	部・サークル活動が充実している	168
教育研究内容・レベル	600	多様な交友関係を得られそう	182
学修環境・設備が優れている	274	学費など費用が妥当	16
将来の進路・就職に有利	1,241	奨学金制度が充実している	51
知名度・注目度の高さ	816	国際化が進んでいる	176
社会的評価の高さ	738	情報化が進んでいる	6
立地条件	152	伝統・校風が好き	310
著名な卒業生が多い	30	利用可能な推薦・特別入試があった	712
学校の先生の勧め	81	希望した大学に入れなかった	753
親や親戚の勧め	152	その他（具体的に）	65

Q06.（大学院生のみ）あなたの大学院入学までのキャリアについてあてはまるものを一つ選択してください。



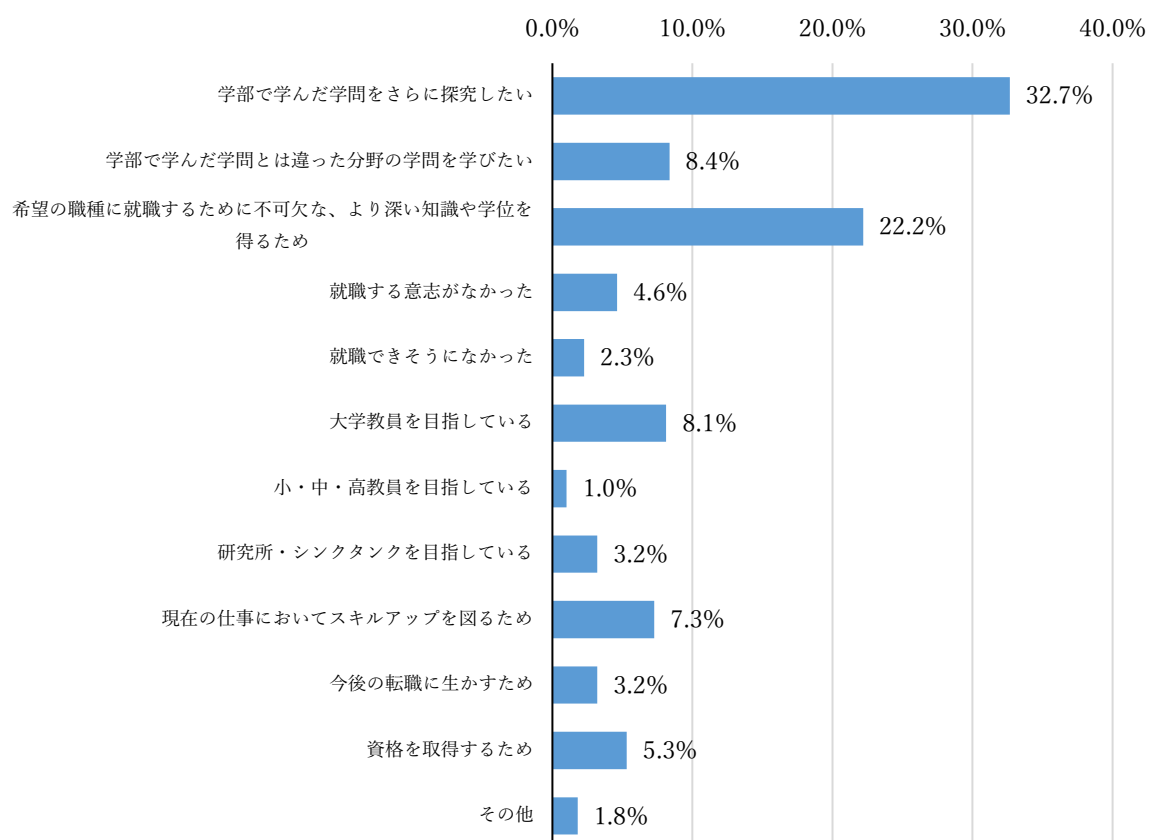
早稲田大学の学部卒業後そのまま入学	934
早稲田大学以外の学部卒業後そのまま入学	519
他大学の大学院修了後そのまま入学	77
入学前に就いていた仕事を続けたまま入学	222
入学前に就いていた仕事を休職して入学	64
入学前に就いていた仕事を退職した上で入学	187
定年退職後に入学	8
その他（具体的に）	37

Q07. （大学院生のみ）あなたが大学院に進学した理由は何ですか。あてはまるものをすべて選択してください。



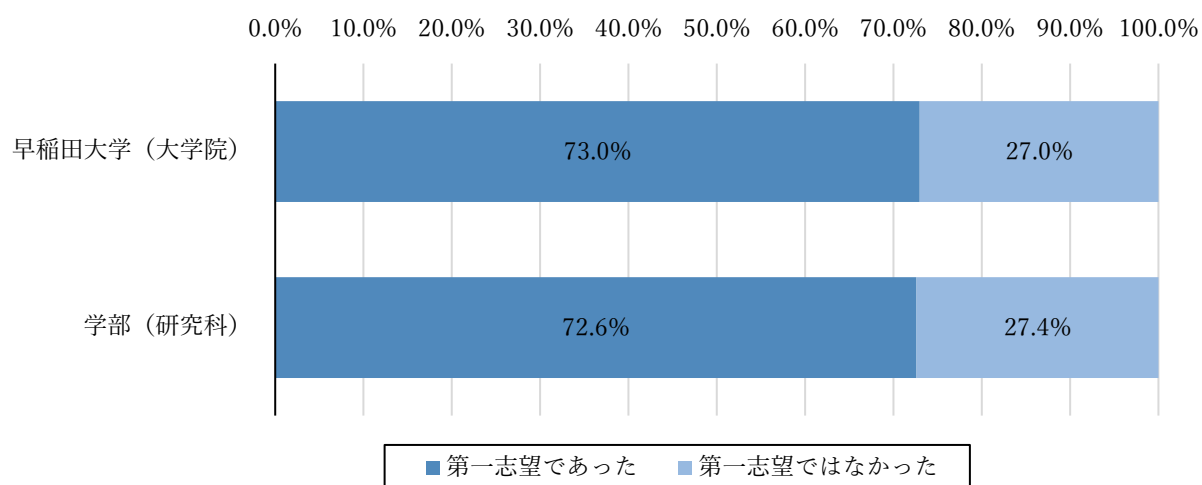
学部で学んだ学問をさらに探究したい	1,141
学部で学んだ学問とは違った分野の学問を学びたい	395
希望の職種に就職するために不可欠な、より深い知識や学位を得るため	867
就職する意志がなかった	324
就職できそうになかった	111
大学教員を目指している	308
小・中・高教員を目指している	65
研究所・シンクタンクを目指している	246
現在の仕事においてスキルアップを図るため	318
今後の転職に生かすため	215
資格を取得するため	218
特にない	23
その他（具体的に）	46

Q08. （大学院生のみ）【Q07】で選択したもののうち、進学理由として最もあてはまるものを一つ選択してください。



学部で学んだ学問をさらに探究したい	418
学部で学んだ学問とは違った分野の学問を学びたい	107
希望の職種に就職するために不可欠な、より深い知識や学位を得るため	284
就職する意志がなかった	59
就職できそうになかった	29
大学教員を目指している	104
小・中・高教員を目指している	13
研究所・シンクタンクを目指している	41
現在の仕事においてスキルアップを図るため	93
今後の転職に生かすため	41
資格を取得するため	68
その他	23

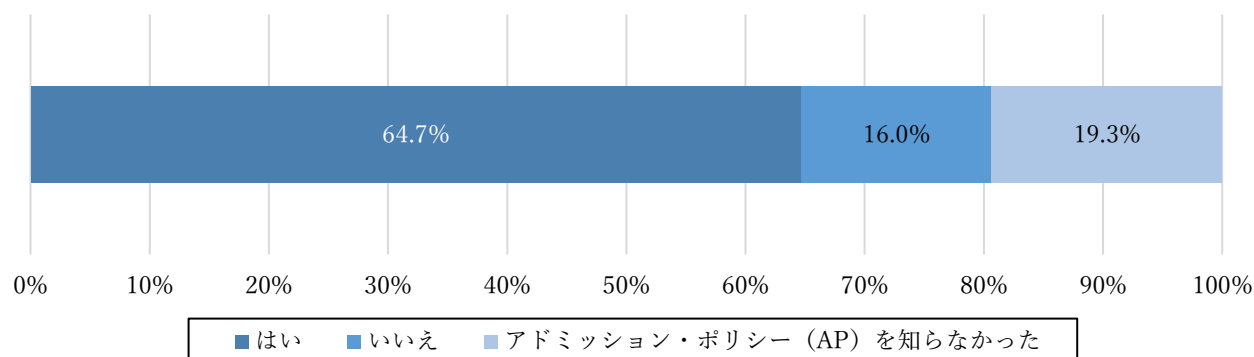
Q09. 早稲田大学（大学院）と学部（研究科）は第一志望でしたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。



	第一志望であった	第一志望ではなかった
早稲田大学（大学院）	7,013	2,596
学部（研究科）	7,026	2,650

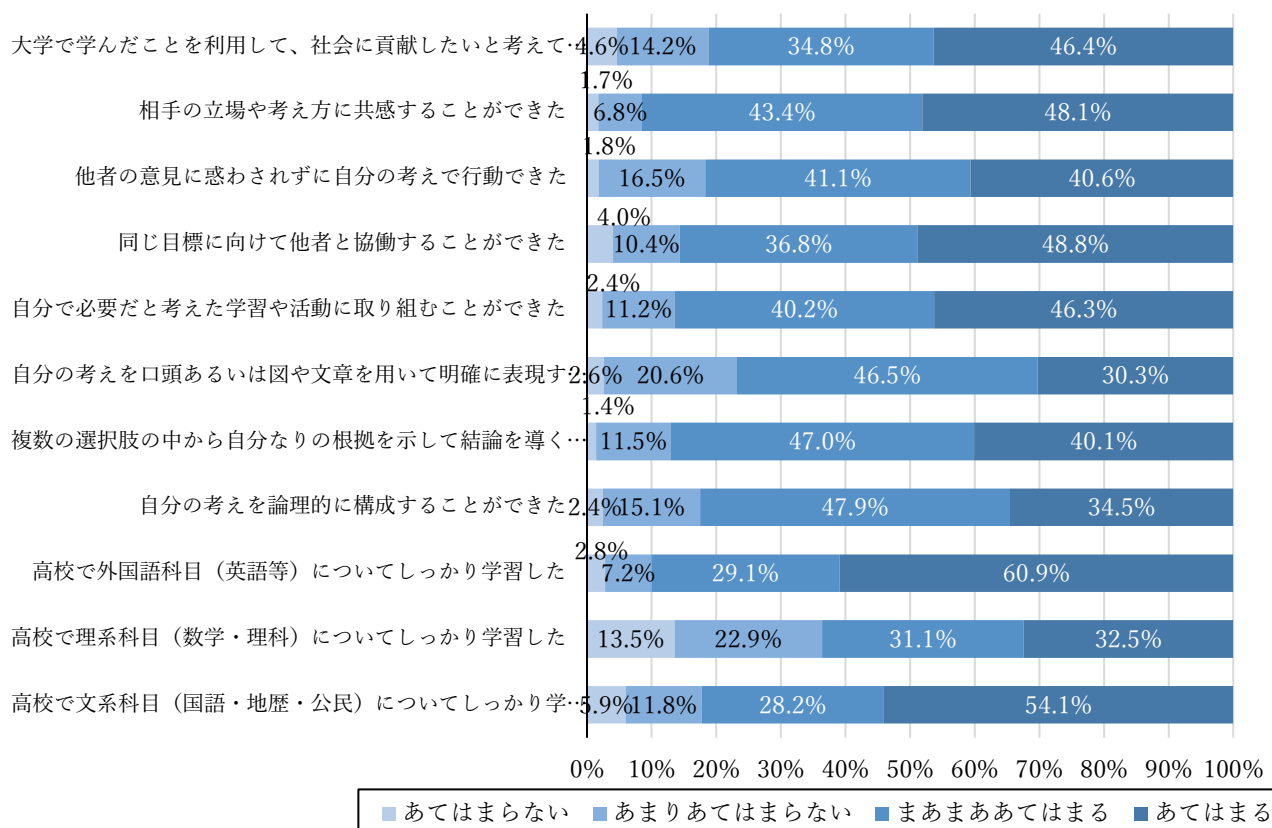
2. 学修状況

Q10. (学部 1 年生のみ) あなたは入学前に、早稲田大学のアドミッション・ポリシー (AP) を確認しましたか。



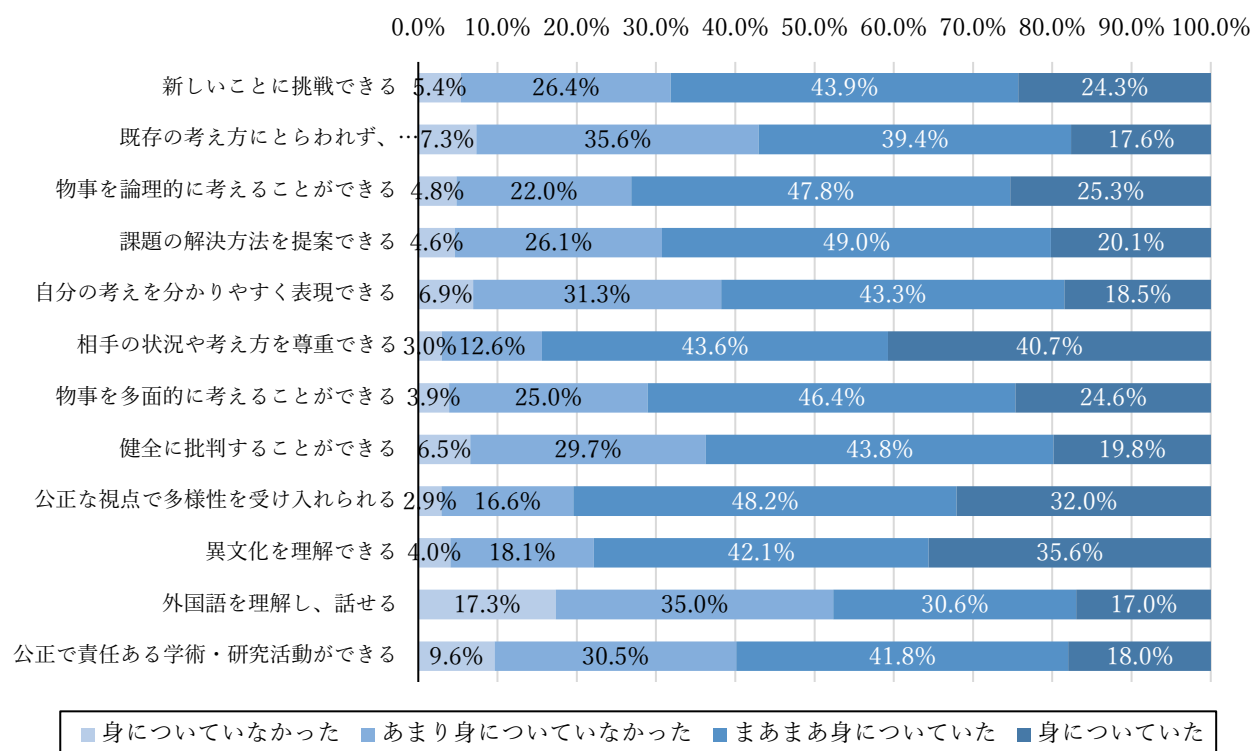
はい	1,605
いいえ	396
アドミッション・ポリシー (AP) を知らなかった	480

Q11. (学部 1 年生のみ) あなたが大学に入学するまでに、次のようなことは、どれくらいあてはまりましたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。



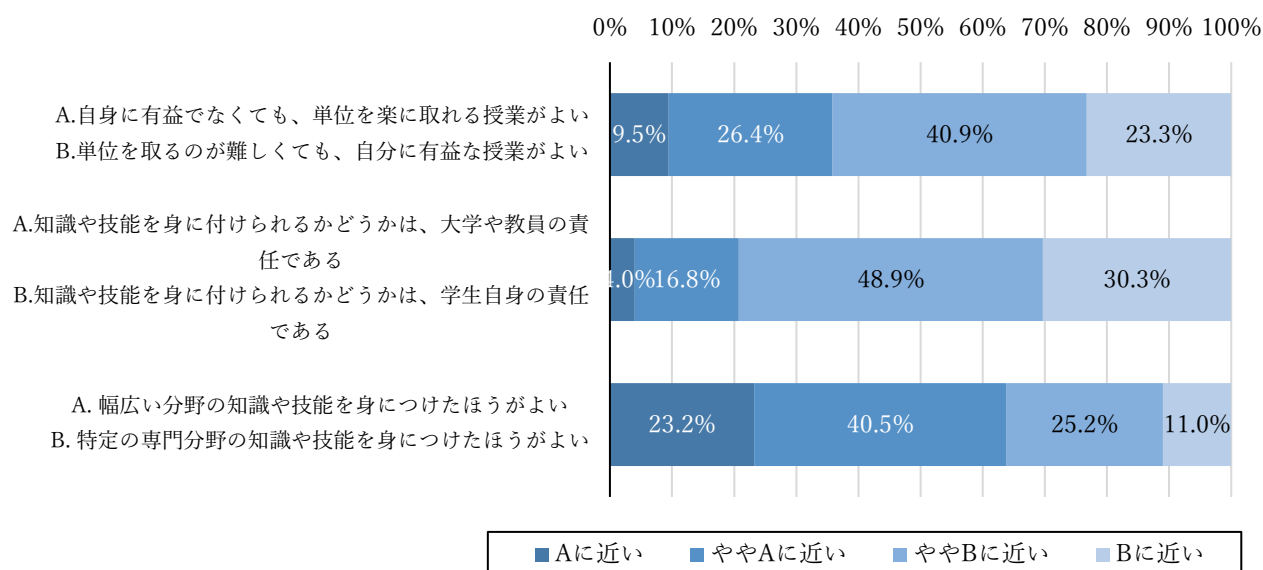
	あては まらな い	あまり あては まらな い	まあまあ あてはま る	あてはま る
高校で文系科目（国語・地歴・公民）についてしっかり学習した	147	292	696	1,336
高校で理系科目（数学・理科）についてしっかり学習した	334	565	769	802
高校で外国語科目（英語等）についてしっかり学習した	69	177	719	1,503
自分の考えを論理的に構成することができた	60	373	1,185	854
複数の選択肢の中から自分なりの根拠を示して結論を導くことができた	35	284	1,160	989
自分の考えを口頭あるいは図や文章を用いて明確に表現することができた	64	509	1,148	747
自分で必要だと考えた学習や活動に取り組むことができた	58	276	989	1,140
同じ目標に向けて他者と協働することができた	98	255	907	1,202
他者の意見に惑わされずに自分の考えで行動できた	44	407	1,014	1,002
相手の立場や考え方に共感することができた	43	167	1,071	1,187
大学で学んだことを利用して、社会に貢献したいと考えていた	114	350	860	1,145

Q12. 【大学（学部・大学院）入学時】に、次のようなことは、どれくらい身に付いていたと考えていましたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。



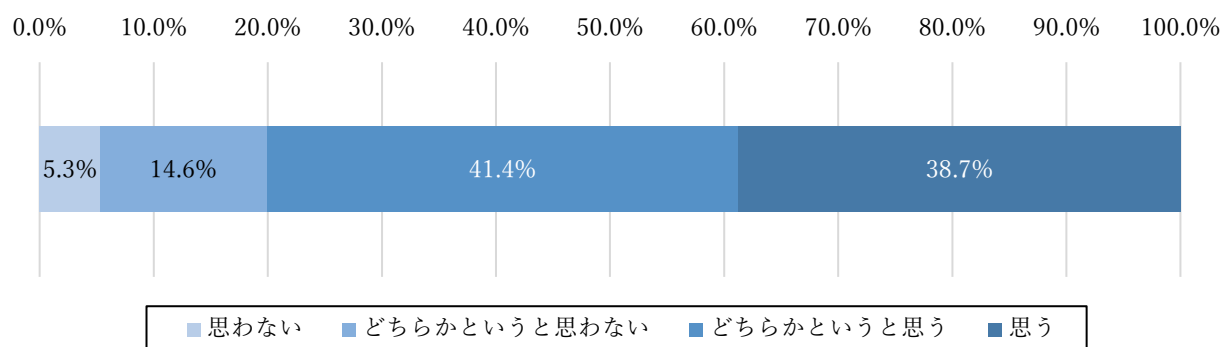
	身に付いていなかった	あまり身に付いていなかった	まあまあ身に付いていた	身に付いていた
新しいことに挑戦できる	533	2,610	4,335	2,398
既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる	723	3,517	3,891	1,740
物事を論理的に考えることができる	476	2,174	4,721	2,497
課題の解決方法を提案できる	457	2,573	4,838	1,988
自分の考えを分かりやすく表現できる	682	3,087	4,272	1,824
相手の状況や考え方を尊重できる	292	1,248	4,304	4,020
物事を多面的に考えることができる	384	2,472	4,579	2,432
健全に批判することができる	645	2,931	4,325	1,959
公正な視点で多様性を受け入れられる	288	1,642	4,764	3,164
異文化を理解できる	398	1,785	4,162	3,511
外国語を理解し、話せる	1,709	3,454	3,023	1,674
公正で責任ある学術・研究活動ができる	948	3,009	4,129	1,774

Q13. 大学教育について、「現在の」あなたの考え方で、A、B により近い方をそれぞれ一つ選択してください。



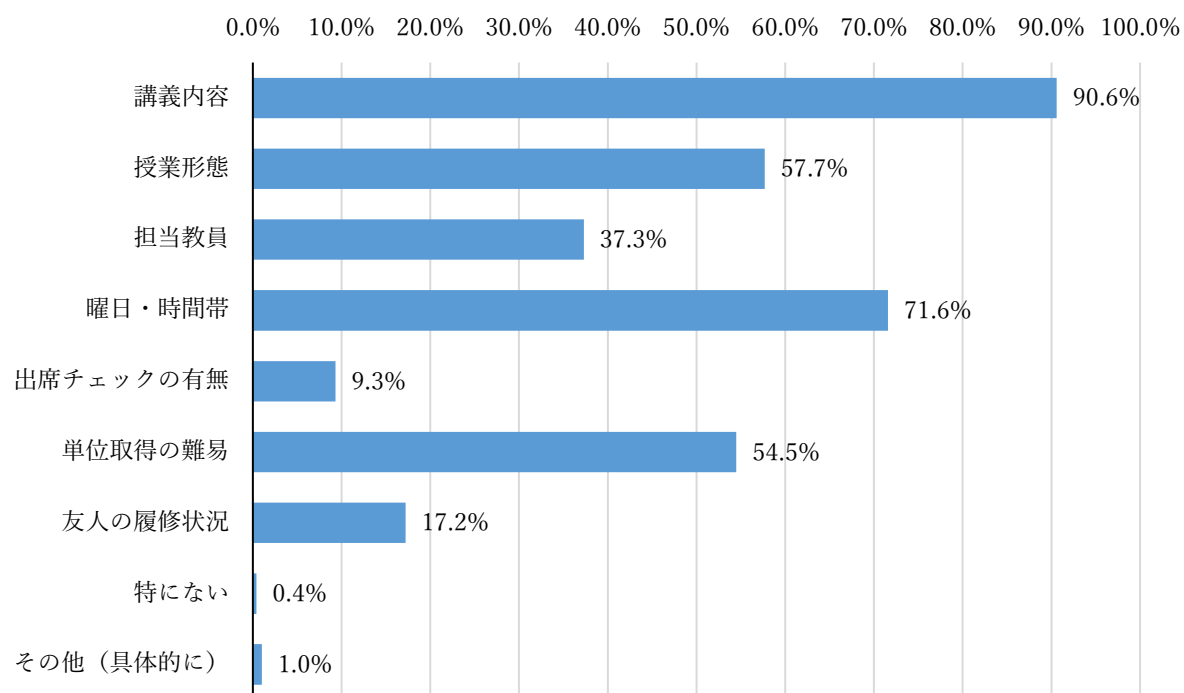
	Aに近い	ややAに近い	ややBに近い	Bに近い
A.自身に有益でなくても、単位を楽に取れる授業がよい B.単位を取るのが難しくても、自分に有益な授業がよい	933	2,597	4,029	2,293
A.知識や技能を身に付けられるかどうかは、大学や教員の責任である B.知識や技能を身に付けられるかどうかは、学生自身の責任である	395	1,650	4,820	2,984
A. 幅広い分野の知識や技能を身につけたほうがよい B. 特定の専門分野の知識や技能を身につけたほうがよい	2,287	3,991	2,482	1,083

Q14. あなたは大学（学部・大学院）での授業や研究・勉強が、あなたの今後の進路先で役に立つと思いますか。あてはまるもの一つを選択してください。



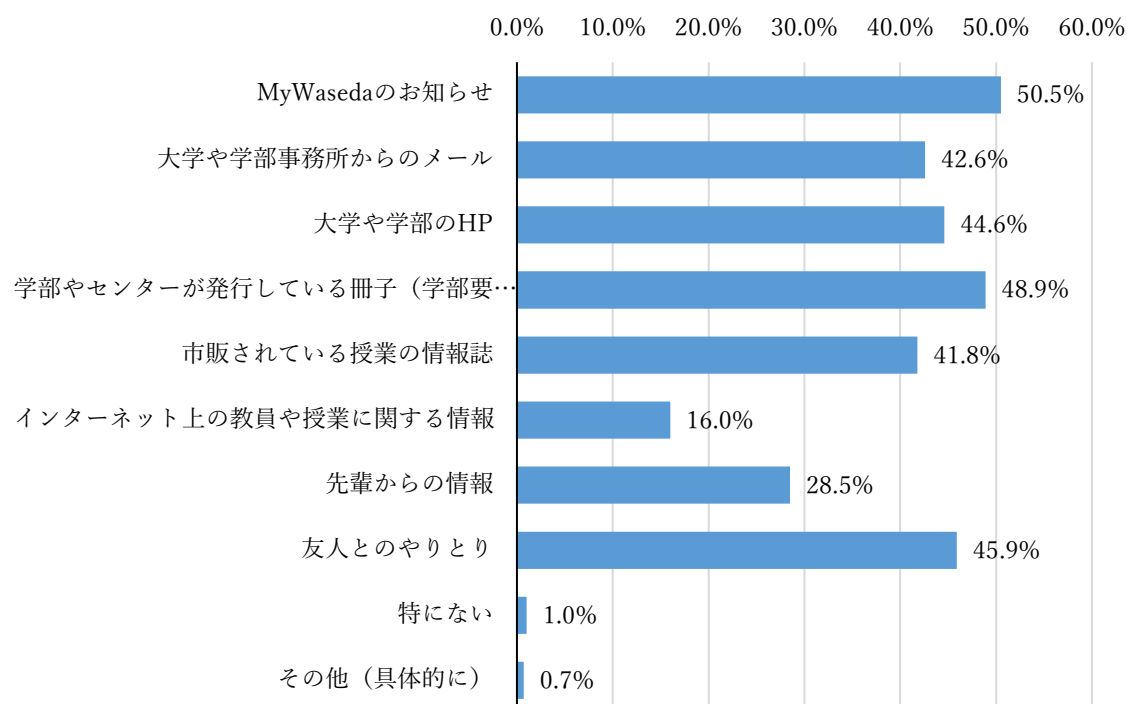
思わない	どちらかというと思わない	どちらかというと思う	思う
523	1,440	4,079	3,822

Q15. あなたが授業を選ぶ際に重視することは何ですか。あてはまるものすべて選択してください。



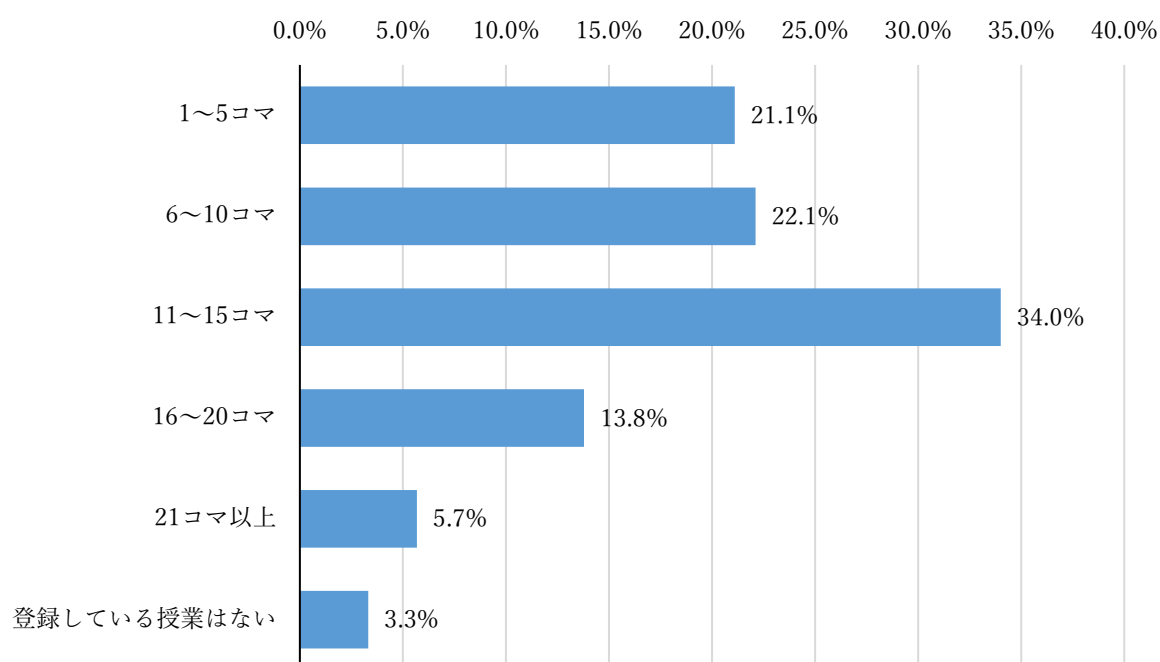
講義内容	8,943
授業形態	5,691
担当教員	3,678
曜日・時間帯	7,066
出席チェックの有無	917
単位取得の難易	5,379
友人の履修状況	1,696
特にない	43
その他（具体的に）	96

Q16. 通常、あなたは、科目登録の手続きに関する情報を、何から得ていますか。あてはまるものすべて選択してください。



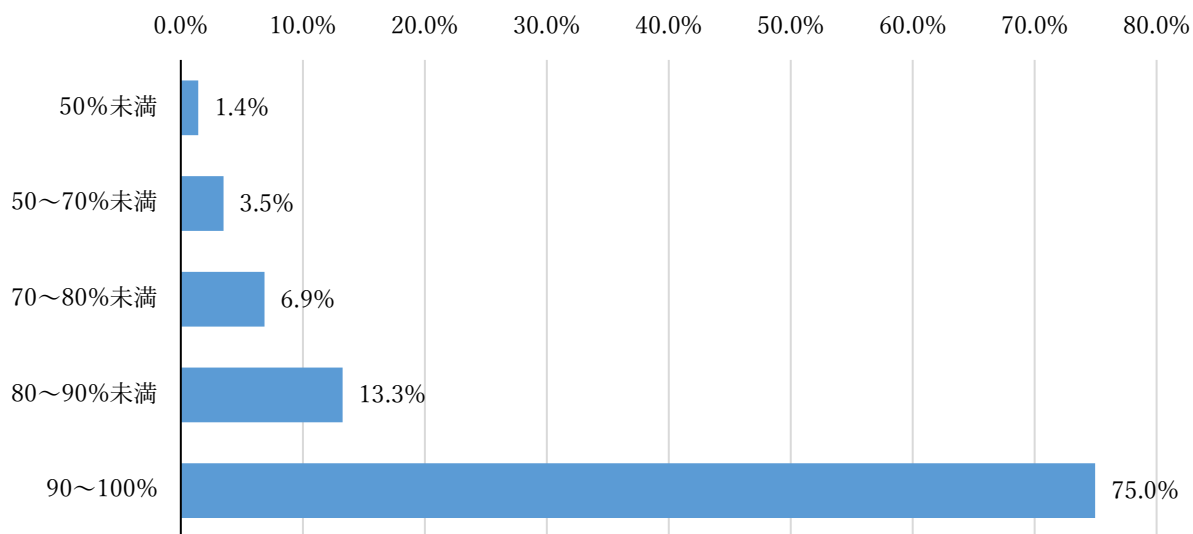
MyWaseda のお知らせ	4,980
大学や学部事務所からのメール	4,197
大学や学部の HP	4,395
学部やセンターが発行している冊子（学部要項や手引きなど）	4,819
市販されている授業の情報誌	4,117
インターネット上の教員や授業に関する情報	1,579
先輩からの情報	2,812
友人とのやりとり	4,529
特にない	95
その他（具体的に）	71

Q17. あなたが今年度春学期（春クォーター・夏クォーター、以降同様）に登録している授業コマ数は週当たりどれくらいですか（90 分を 1 コマとします。） もっともあてはまるものを一つ選択してください。



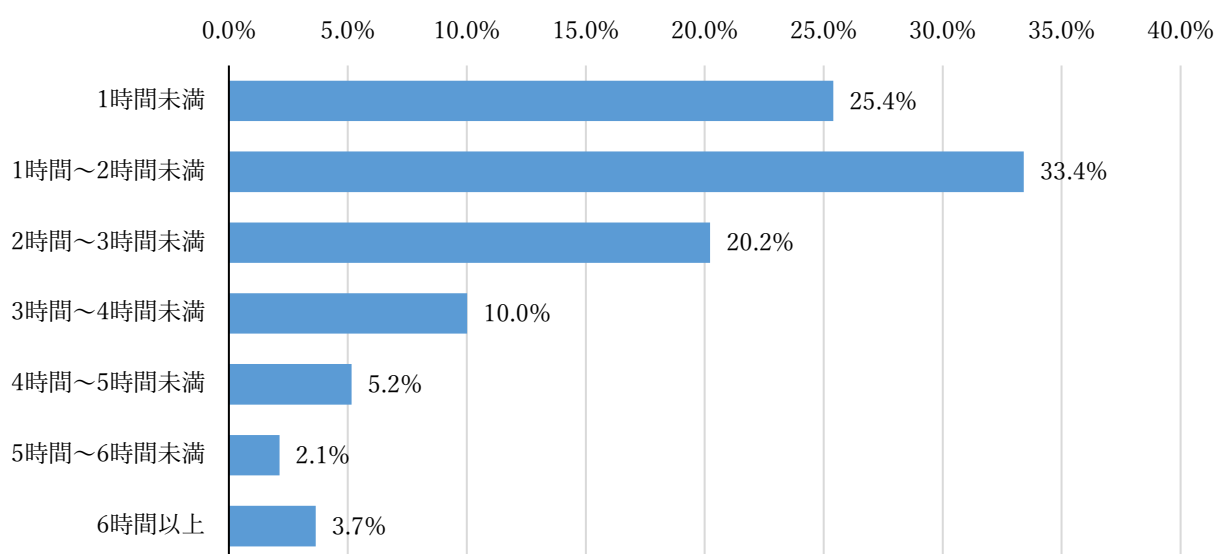
1～5 コマ	2,223
6～10 コマ	2,241
11～15 コマ	3,106
16～20 コマ	1,369
21 コマ以上	610
登録している授業はない	321

Q18. 今年度春学期のあなたの授業平均出席率はどれくらいですか。もっともあてはまるものを一つ選択してください。



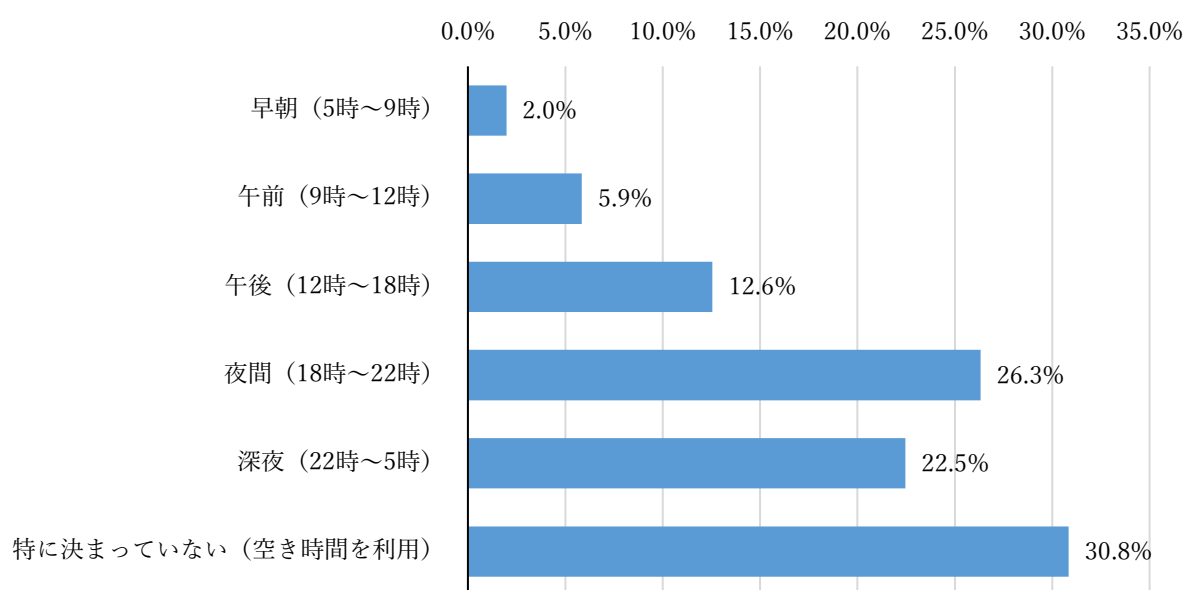
50%未満	136
50～70%未満	332
70～80%未満	651
80～90%未満	1,260
90～100%	7,124

Q19. 現在、あなたは 1 日に平均すると、大学の授業の予習・復習などにどれくらいの時間をかけていますか。もっともあてはまるものを一つ選択してください。



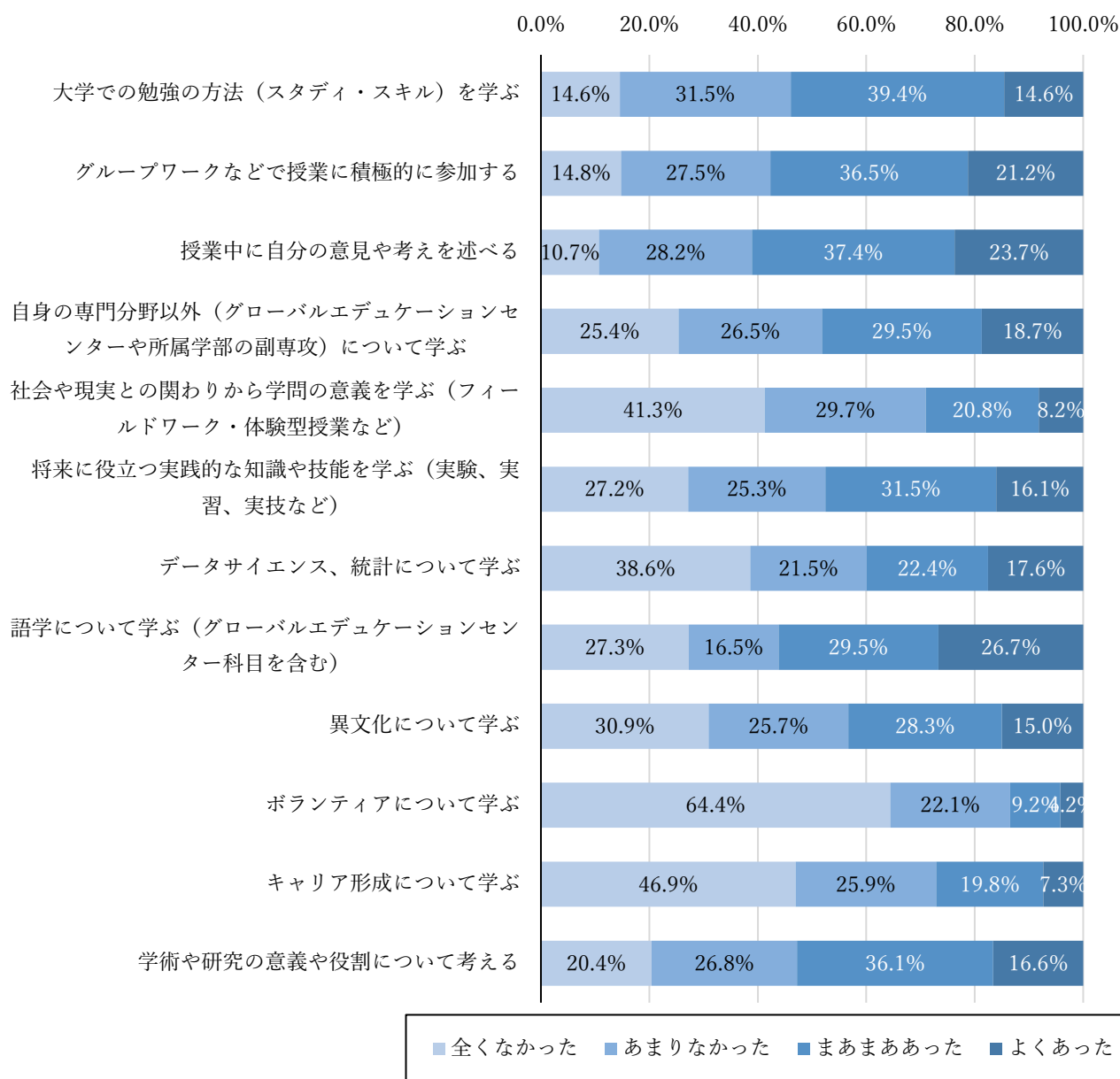
1 時間未満	2,407
1 時間～2 時間未満	3,166
2 時間～3 時間未満	1,917
3 時間～4 時間未満	949
4 時間～5 時間未満	489
5 時間～6 時間未満	202
6 時間以上	346

Q20. あなたは大学の授業の予習・復習などは主にどの時間帯に行っていますか。もっともあてはまるものを一つ選択してください。



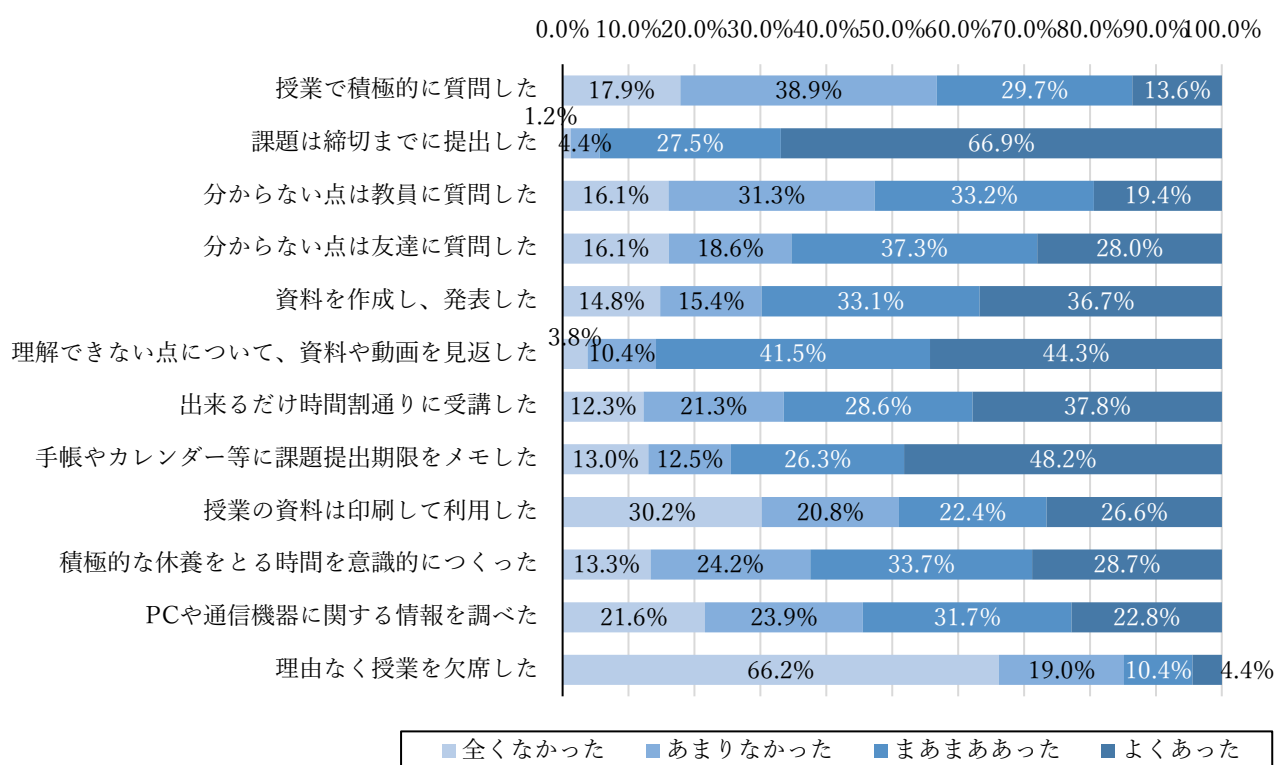
早朝 (5 時～9 時)	187
午前 (9 時～12 時)	554
午後 (12 時～18 時)	1,188
夜間 (18 時～22 時)	2,491
深夜 (22 時～5 時)	2,126
特に決まっていない (空き時間を利用)	2,919

Q21. 2020 年度春学期を通して、以下の経験はどれくらいありましたか。それぞれの内容についてあてはまるものを選択してください。



	全くなかつた	あまりなかった	まあまああった	よくあった
大学での勉強の方法（スタディ・スキル）を学ぶ	1,378	2,979	3,723	1,380
グループワークなどで授業に積極的に参加する	1,397	2,606	3,452	2,010
授業中に自分の意見や考えを述べる	1,013	2,666	3,532	2,239
自身の専門分野以外（グローバルエデュケーションセンターや所属学部の副専攻）について学ぶ	2,399	2,502	2,785	1,770
社会や現実との関わりから学問の意義を学ぶ（フィールドワーク・体験型授業など）	3,904	2,806	1,970	776
将来に役立つ実践的な知識や技能を学ぶ（実験、実習、実技など）	2,570	2,394	2,979	1,519
データサイエンス、統計について学ぶ	3,646	2,031	2,112	1,660
語学について学ぶ（グローバルエデュケーションセンター科目を含む）	2,577	1,564	2,786	2,526
異文化について学ぶ	2,923	2,432	2,675	1,418
ボランティアについて学ぶ	6,086	2,093	872	399
キャリア形成について学ぶ	4,441	2,453	1,873	694
学術や研究の意義や役割について考える	1,929	2,536	3,416	1,572

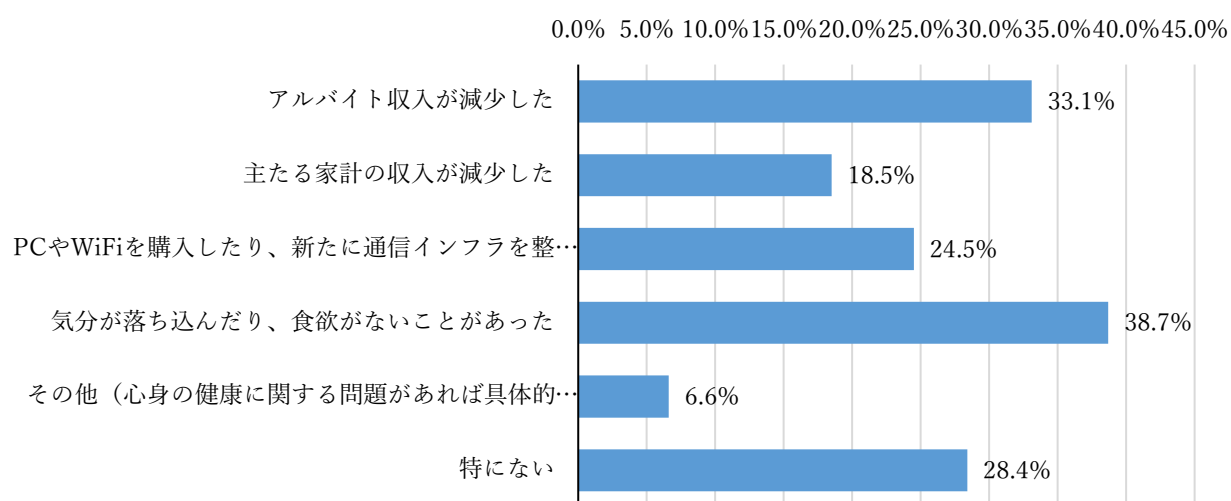
Q22. 2020 年度春学期の授業を通して、以下のようなあなたの取組はどれくらいありましたか。それぞれの内容についてあてはまるものを選択してください。



	全くなかった	あまりなかった	まあまああった	よくあった
授業で積極的に質問した	1,692	3,681	2,812	1,283
課題は締切までに提出した	115	416	2,603	6,334
分からない点は教員に質問した	1,519	2,962	3,146	1,836
分からない点は友達に質問した	1,527	1,758	3,529	2,648
資料を作成し、発表した	1,401	1,456	3,131	3,474
理解できない点について、資料や動画を見返した	359	984	3,931	4,188
出来るだけ時間割通りに受講した	1,162	2,013	2,709	3,577
手帳やカレンダー等に課題提出期限をメモした	1,231	1,186	2,485	4,557
授業の資料は印刷して利用した	2,860	1,968	2,121	2,515
積極的な休養をとる時間を意識的につくった	1,261	2,294	3,186	2,720
PC や通信機器に関する情報を調べた	2,045	2,263	2,994	2,157
理由なく授業を欠席した	6,260	1,797	982	420

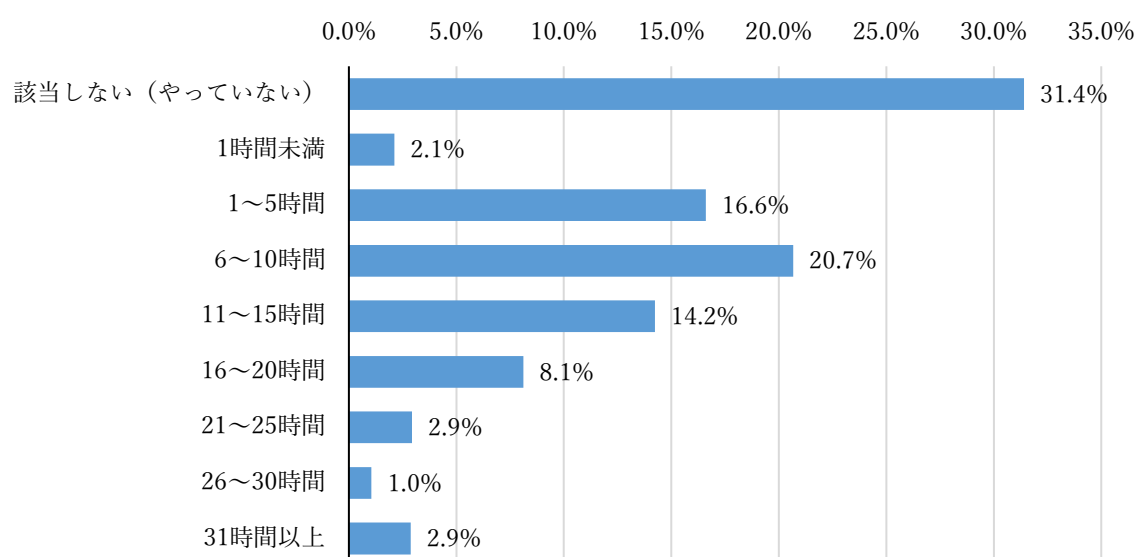
3. 学生生活

Q23. 新型コロナウイルス感染症拡大による、経済的あるいは学習環境への影響について、当てはまるものすべて選択してください（複数選択可）。



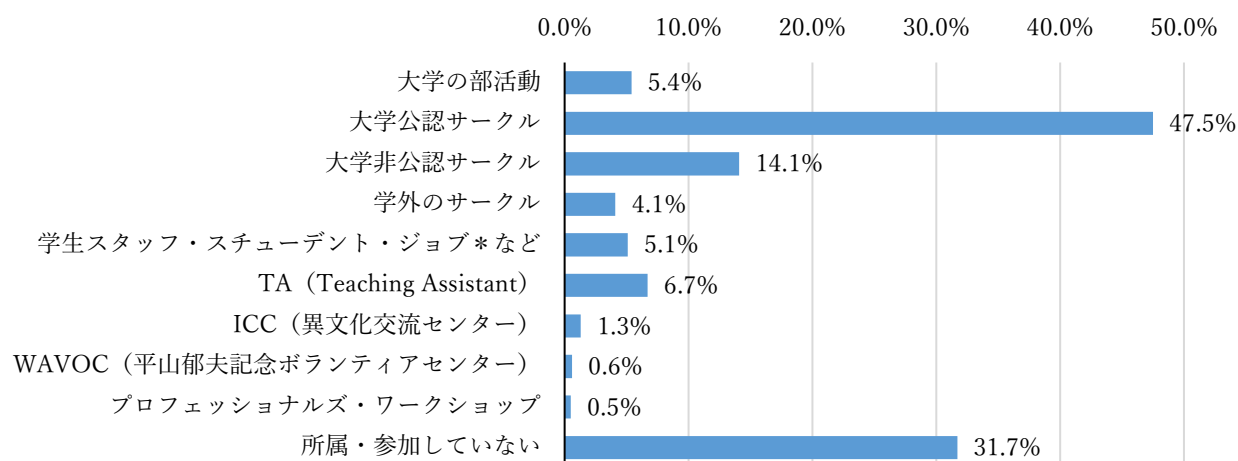
アルバイト収入が減少した	3,234
主たる家計の収入が減少した	1,808
PC や WiFi を購入したり、新たに通信インフラを整備する必要があった	2,393
気分が落ち込んだり、食欲がないことがあった	3,778
その他（心身の健康に関する問題があれば具体的に）	646
特になし	2,775

Q24. 現在の1週間のアルバイト・定職の時間について、もっとも当てはまるものを選択してください。



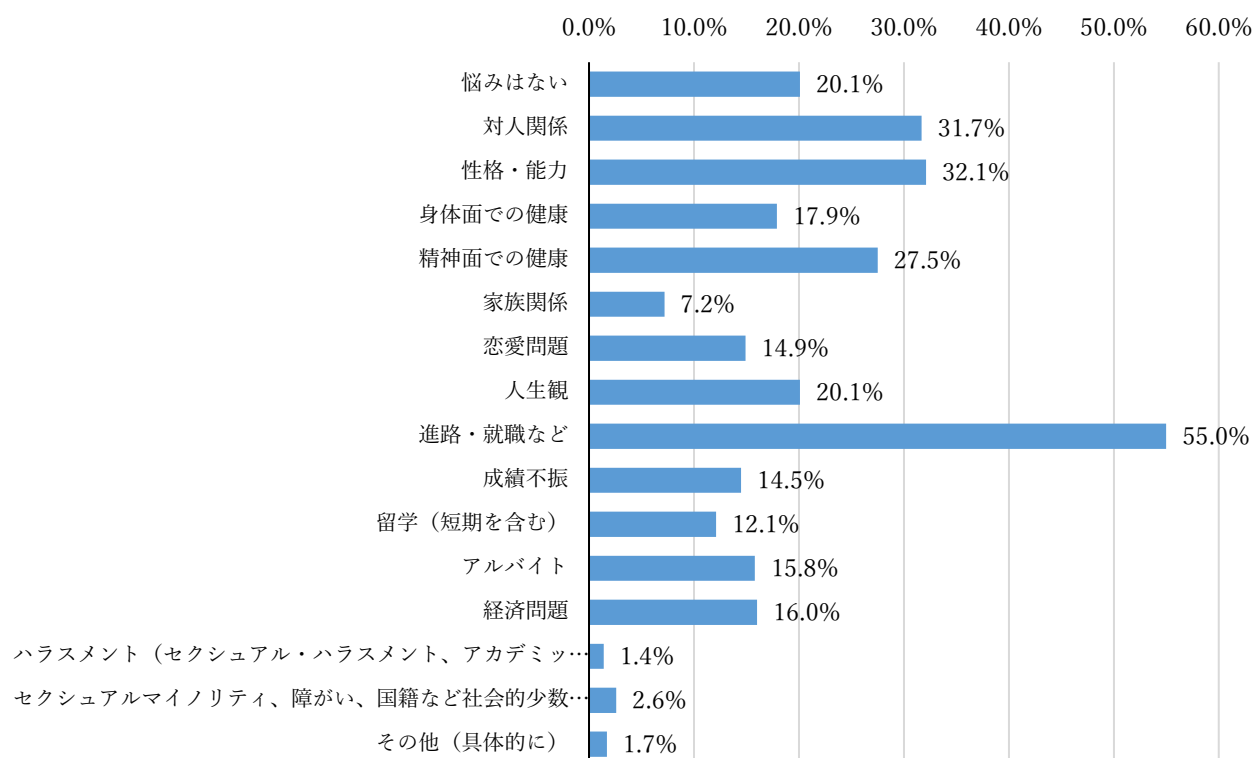
該当しない（やっていない）	3,074
1 時間未満	207
1～5 時間	1,625
6～10 時間	2,023
11～15 時間	1,393
16～20 時間	794
21～25 時間	287
26～30 時間	102
31 時間以上	281

Q25. あなたは現在、以下のような課外活動に所属、参加していますか。あてはまるものすべて選択してください。



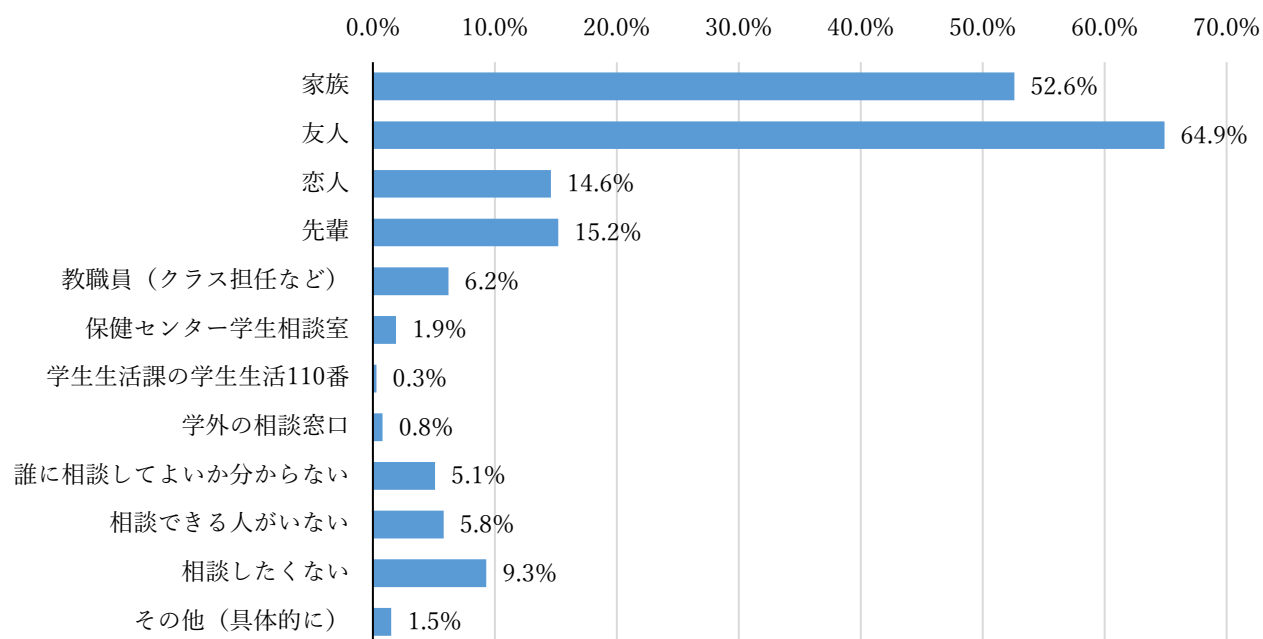
大学の部活動	522
大学公認サークル	4,629
大学非公認サークル	1,375
学外のサークル	397
学生スタッフ・スチューデント・ジョブ* など	500
TA (Teaching Assistant)	652
ICC (異文化交流センター)	123
WAVOC (平山郁夫記念ボランティアセンター)	60
プロフェッショナルズ・ワークショップ	46
所属・参加していない	3,092

Q26. あなたは現在、修学上および学生生活全般で、次のような不安や悩みがありますか。あてはまるものすべて選択してください。



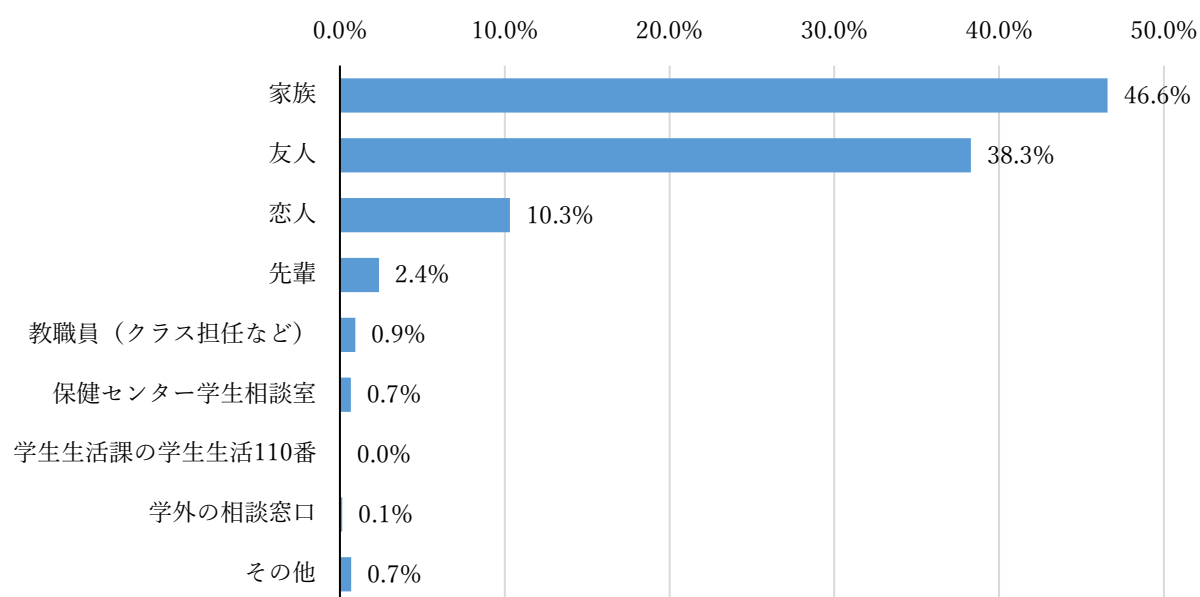
悩みはない	1,952
対人関係	3,082
性格・能力	3,116
身体面での健康	1,738
精神面での健康	2,671
家族関係	699
恋愛問題	1,450
人生観	1,948
進路・就職など	5,346
成績不振	1,411
留学（短期を含む）	1,173
アルバイト	1,531
経済問題	1,558
ハラスメント（セクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメントなど）	140
セクシュアルマイノリティ、障がい、国籍など社会的少数者であることから発生する生きづらさ	253
その他（具体的に）	165

Q27. 【Q26】の不安や悩みをあなたは誰に相談しますか。あてはまるものすべて選択してください。



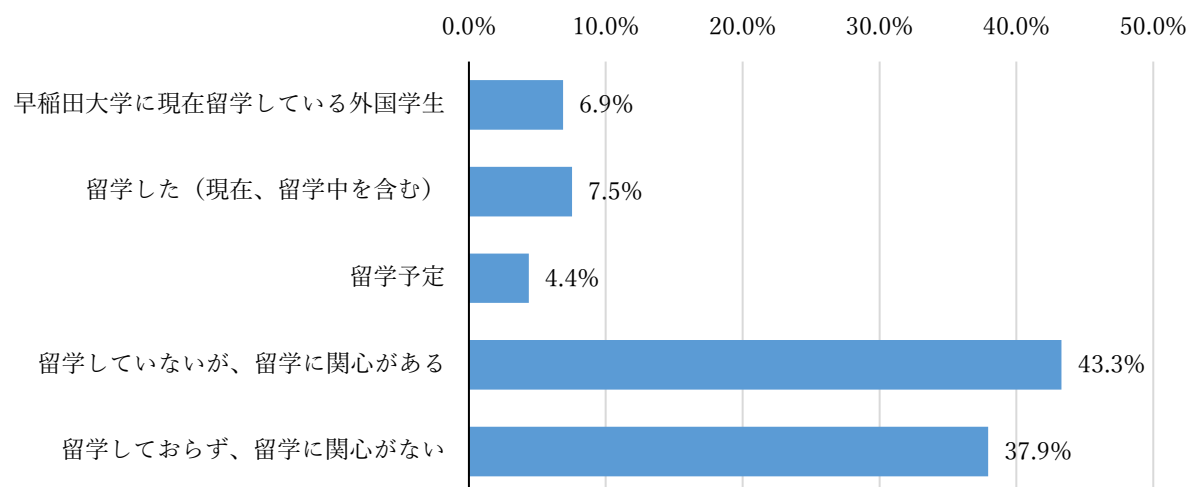
家族	4,063
友人	5,013
恋人	1,132
先輩	1,173
教職員（クラス担任など）	479
保健センター学生相談室	143
学生生活課の学生生活 110 番	25
学外の相談窓口	65
誰に相談してよいか分からない	394
相談できる人がいない	451
相談したくない	722
その他（具体的に）	115

Q28. 【Q27】で回答したうち、もっともよく相談する相手を一つ選択してください。



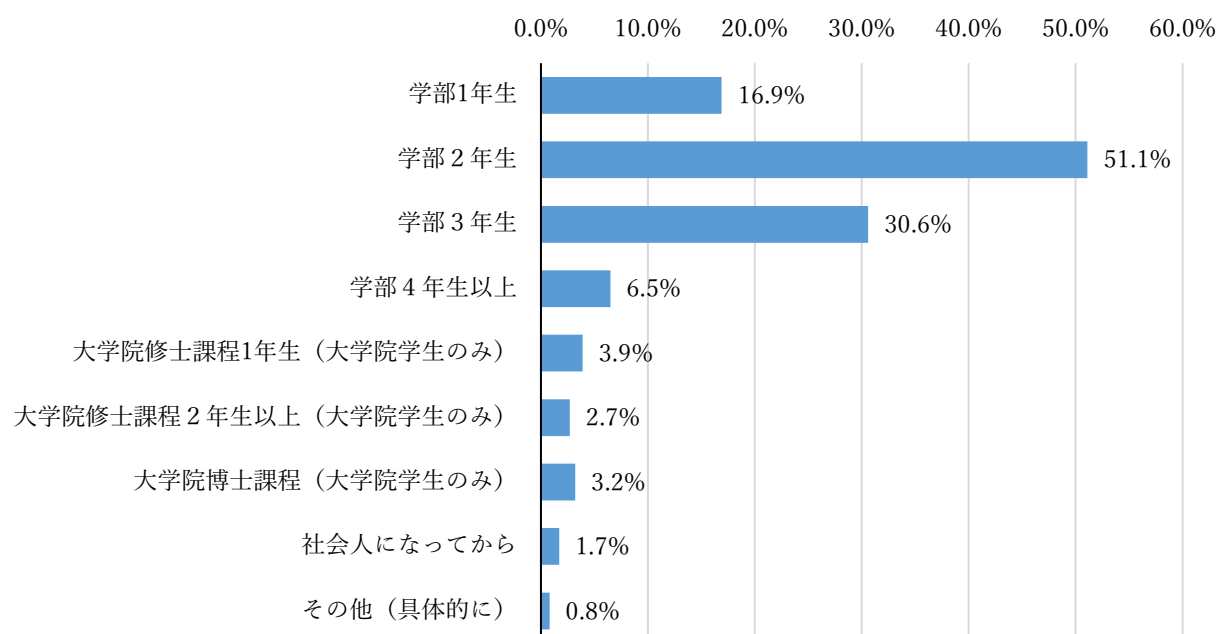
家族	1,909
友人	1,569
恋人	423
先輩	97
教職員（クラス担任など）	38
保健センター学生相談室	27
学外の相談窓口	2
その他	6

Q29. あなたは大学入学後、留学しましたか（1 週間程度の短期間の研修・ゼミを含みます）。また、留学生していない方は留学に関心がありますか？もっともあてはまるものを一つ選択してください。



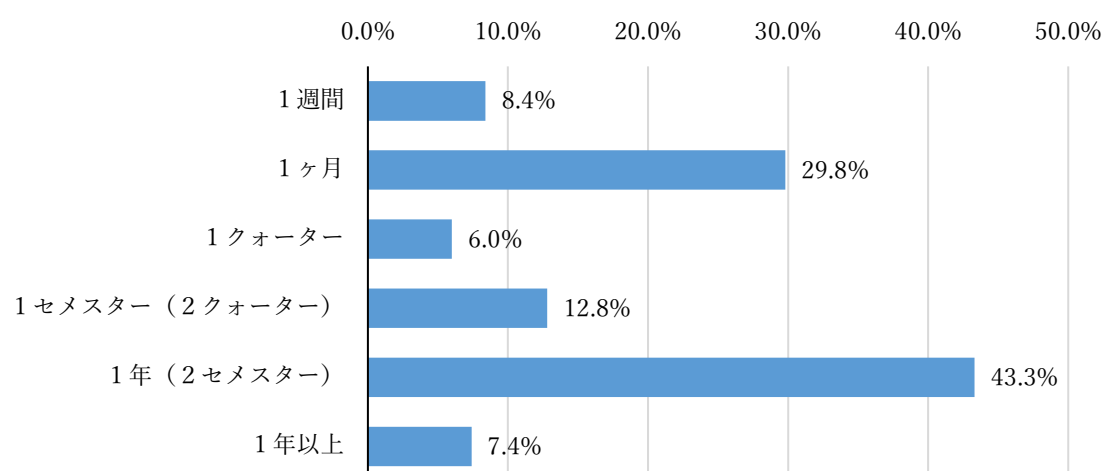
早稲田大学に現在留学している外国学生	671
留学した（現在、留学中を含む）	736
留学予定	427
留学していないが、留学に関心がある	4,230
留学しておらず、留学に関心がない	3,705

Q30. 【Q29 で「留学した（現在、留学中を含む）」か「留学予定」と回答した方にお尋ねします】あなたはいつ留学しましたか、あるいはいつ留学予定ですか。あてはまるものすべて選択してください。



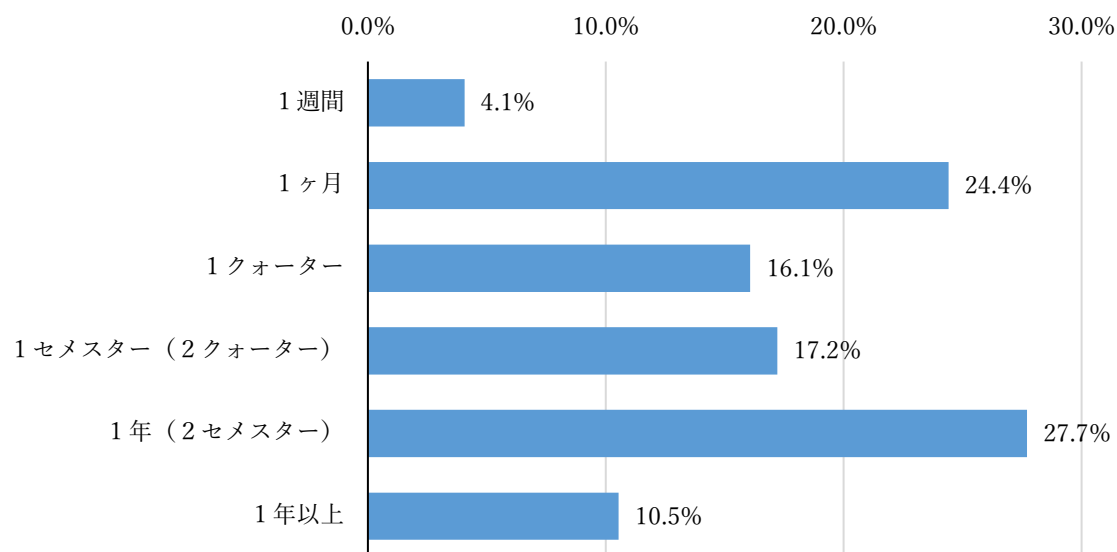
学部 1 年生	193
学部 2 年生	582
学部 3 年生	348
学部 4 年生以上	74
大学院修士課程 1 年生（大学院学生のみ）	44
大学院修士課程 2 年生以上（大学院学生のみ）	31
大学院博士課程（大学院学生のみ）	37
社会人になってから	19
その他（具体的に）	9

Q31. 【Q29 で「留学した（現在、留学中を含む）」が「留学予定」と回答した方にお尋ねします】あなたが留学した、留学する期間はどのぐらいですか。あてはまるものすべて選択してください。



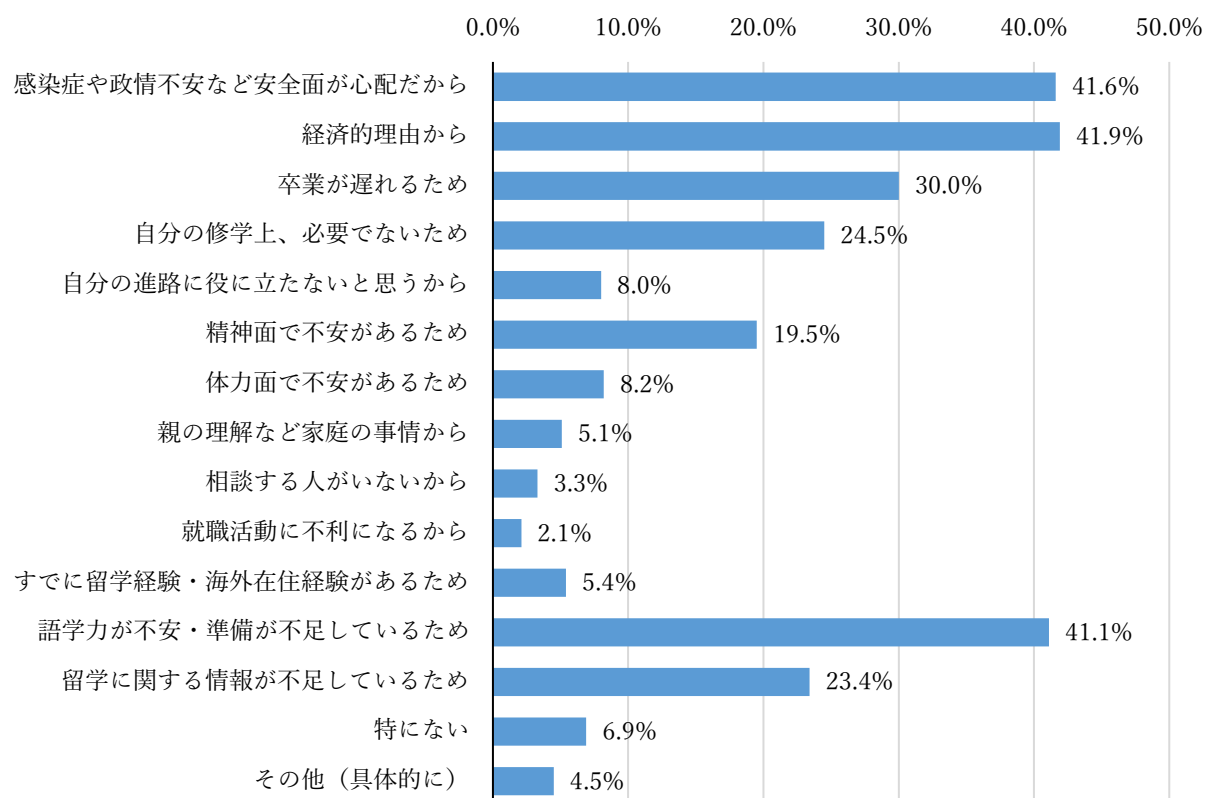
1 週間	94
1 ヶ月	333
1 クォーター	67
1 セメスター（2 クォーター）	143
1 年（2 セメスター）	484
1 年以上	83

Q32. 【Q29 で「留学していないが、留学に関心がある」と回答した方にお尋ねします】あなたが留学したい期間はどのぐらいですか。もっともはてはまるものを選択してください。



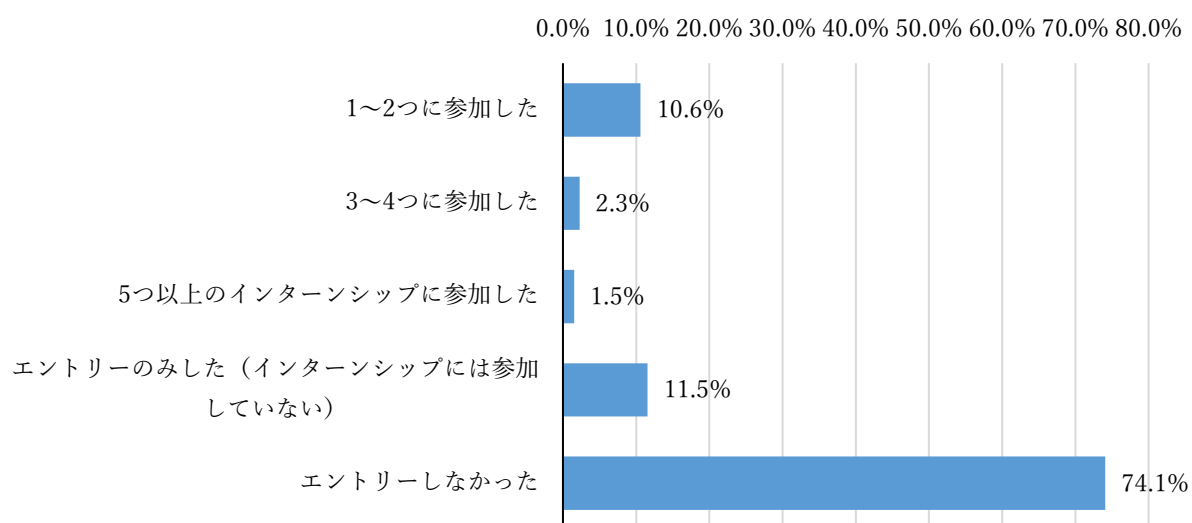
1 週間	171
1 ヶ月	1,028
1 クォーター	677
1 セメスター（2 クォーター）	725
1 年（2 セメスター）	1,167
1 年以上	444

Q33. 【Q29 で「留学していないが、留学に関心がある」、「留学しておらず、留学に関心がない」と回答した方にお尋ねします】留学を妨げる要因は何ですか。あてはまるものすべて選択してください。



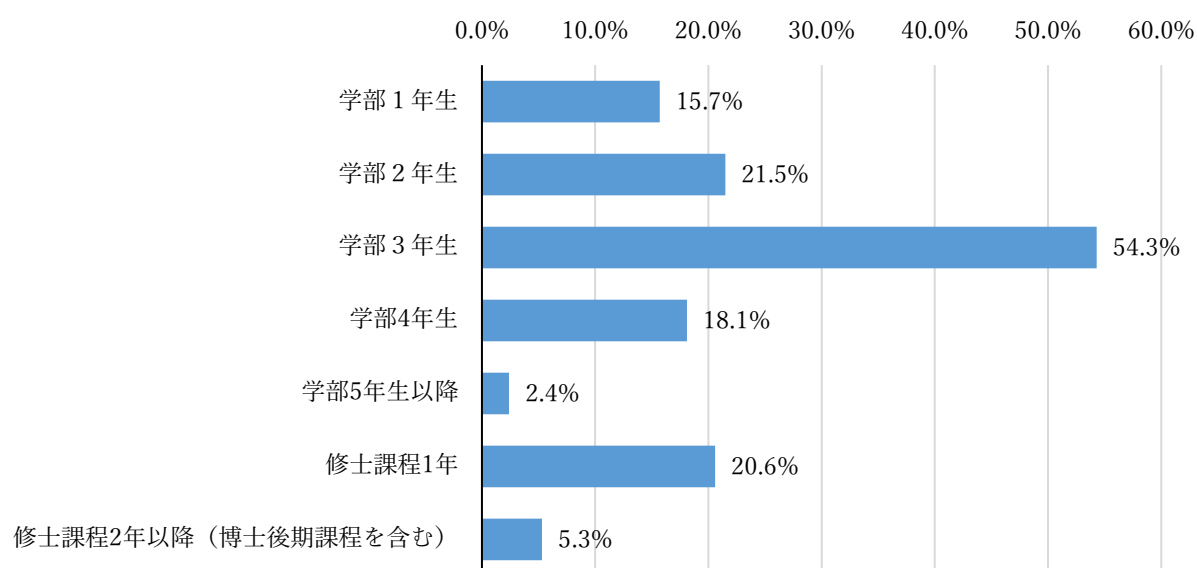
感染症や政情不安など安全面が心配だから	3,174
経済的理由から	3,197
卒業が遅れるため	2,295
自分の修学上、必要でないため	1,869
自分の進路に役に立たないと思うから	611
精神面で不安があるため	1,493
体力面で不安があるため	630
親の理解など家庭の事情から	393
相談する人がいないから	255
就職活動に不利になるから	157
すでに留学経験・海外在住経験があるため	409
語学力が不安・準備が不足しているため	3,138
留学に関する情報が不足しているため	1,787
特にない	530
その他（具体的に）	340

Q34. あなたはインターンシップ・プログラム（5 日以上のもの）にこれまで参加しましたか。もっともあてはまるものを一つ選択してください。



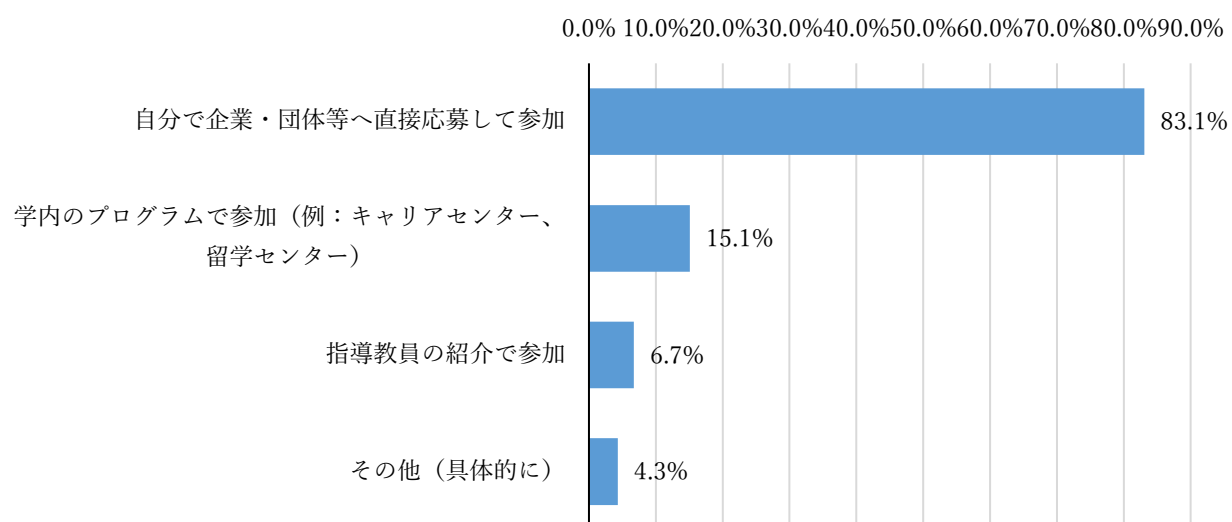
1～2 つに参加した	1,033
3～4 つに参加した	221
5 つ以上のインターンシップに参加した	148
エントリーのみした（インターンシップには参加していない）	1,124
エントリーしなかった	7,210

Q35. 【Q34 で「インターンシップに参加した」と回答した人にお尋ねします】あなたがインターンシップにこれまでに参加した時期はいつですか？あてはまるものすべて選択してください。



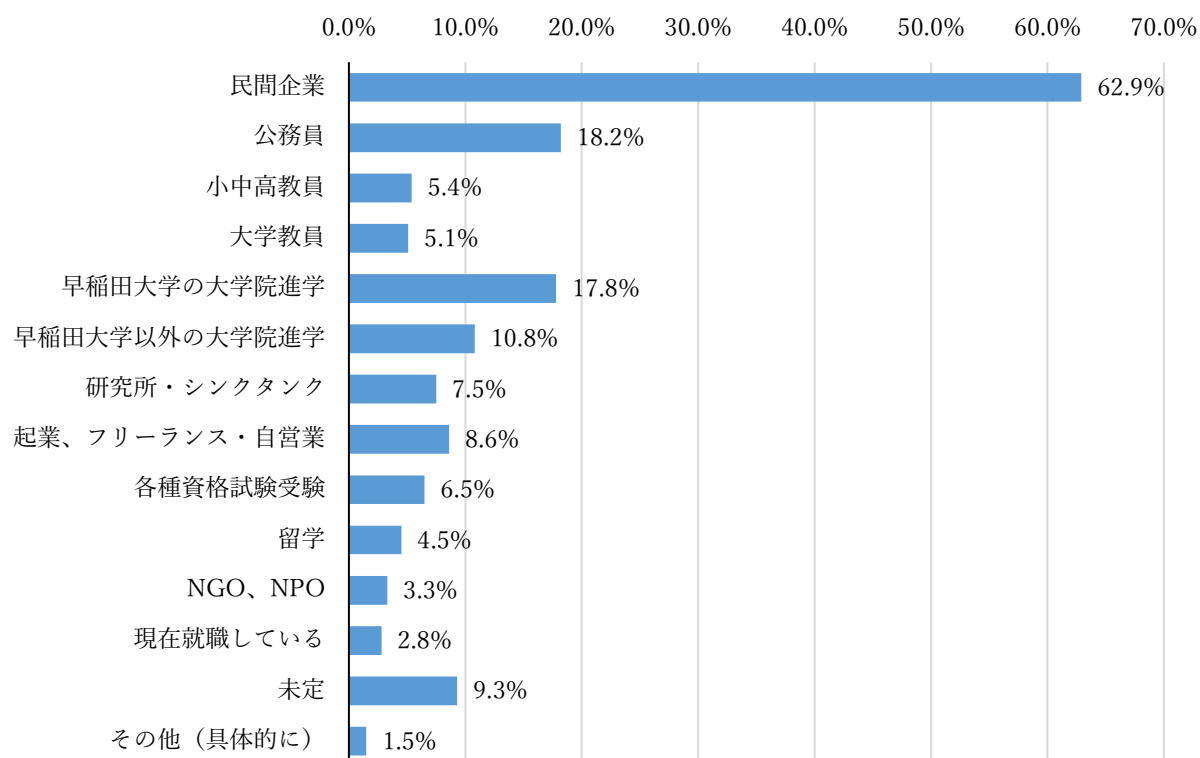
学部 1 年生	217
学部 2 年生	298
学部 3 年生	752
学部 4 年生	251
学部 5 年生以降	33
修士課程 1 年	285
修士課程 2 年以降（博士後期課程を含む）	74

Q36. 【Q34 で「インターンシップに参加した」と回答した人にお尋ねします】あなたはどのように参加しましたか。あてはまるものすべて選択してください。



自分（自分）で企業・団体等へ直接応募して参加	1,148
学内のプログラムで参加（例：キャリアセンター、留学センター）	208
指導教員の紹介で参加	92
その他（具体的に）	59

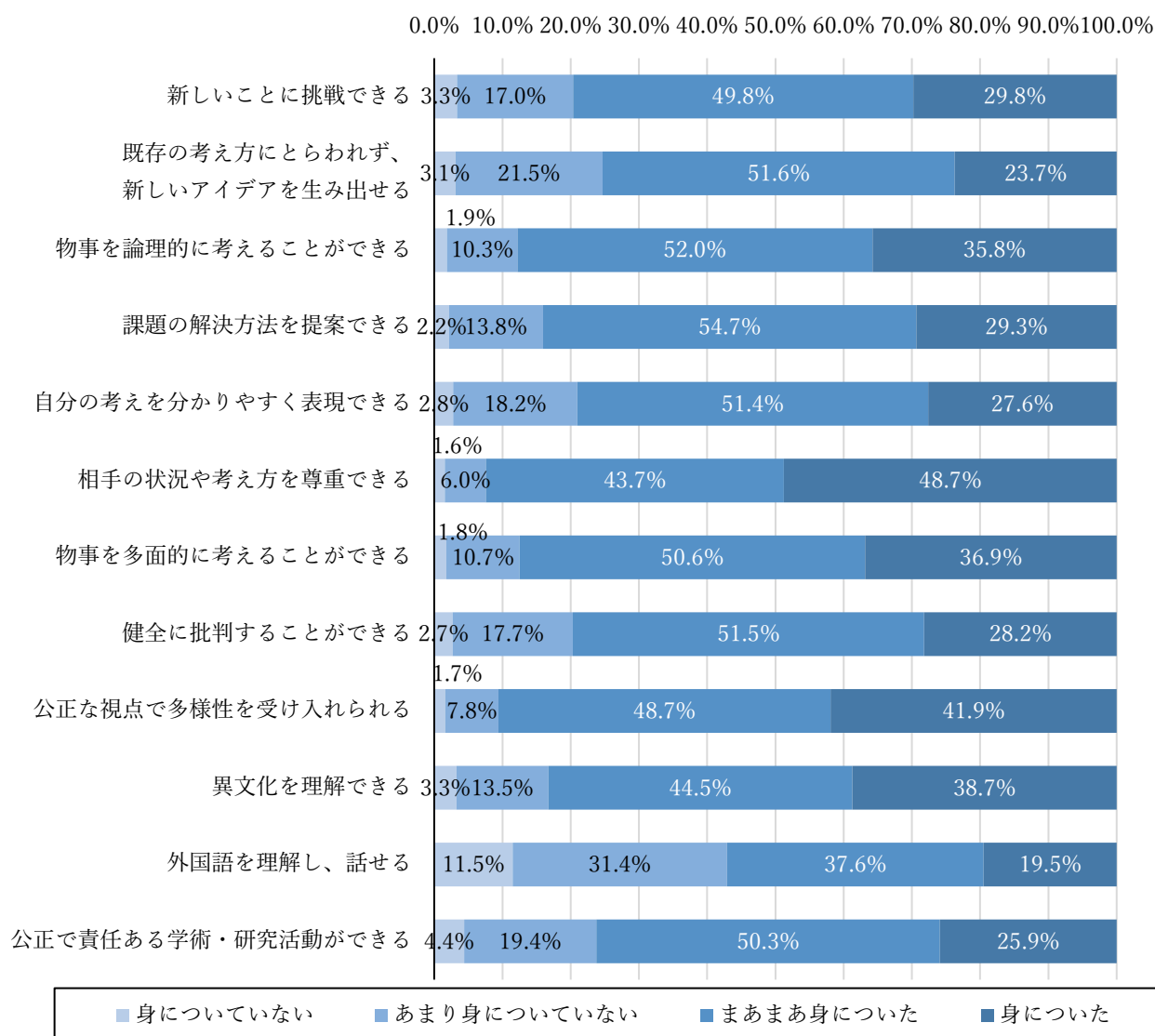
Q37. 現在、あなたは学部・大学院卒業後、どのような進路を考えていますか。あてはまるものすべて選択してください。内定している場合には、内定先を選択してください。



民間企業	6,129
公務員	1,776
小中高教員	529
大学教員	500
早稲田大学の大学院進学	1,732
早稲田大学以外の大学院進学	1,055
研究所・シンクタンク	734
起業、フリーランス・自営業	838
各種資格試験受験	633
留学	440
NGO、NPO	320
現在就職している	273
未定	910
その他（具体的に）	148

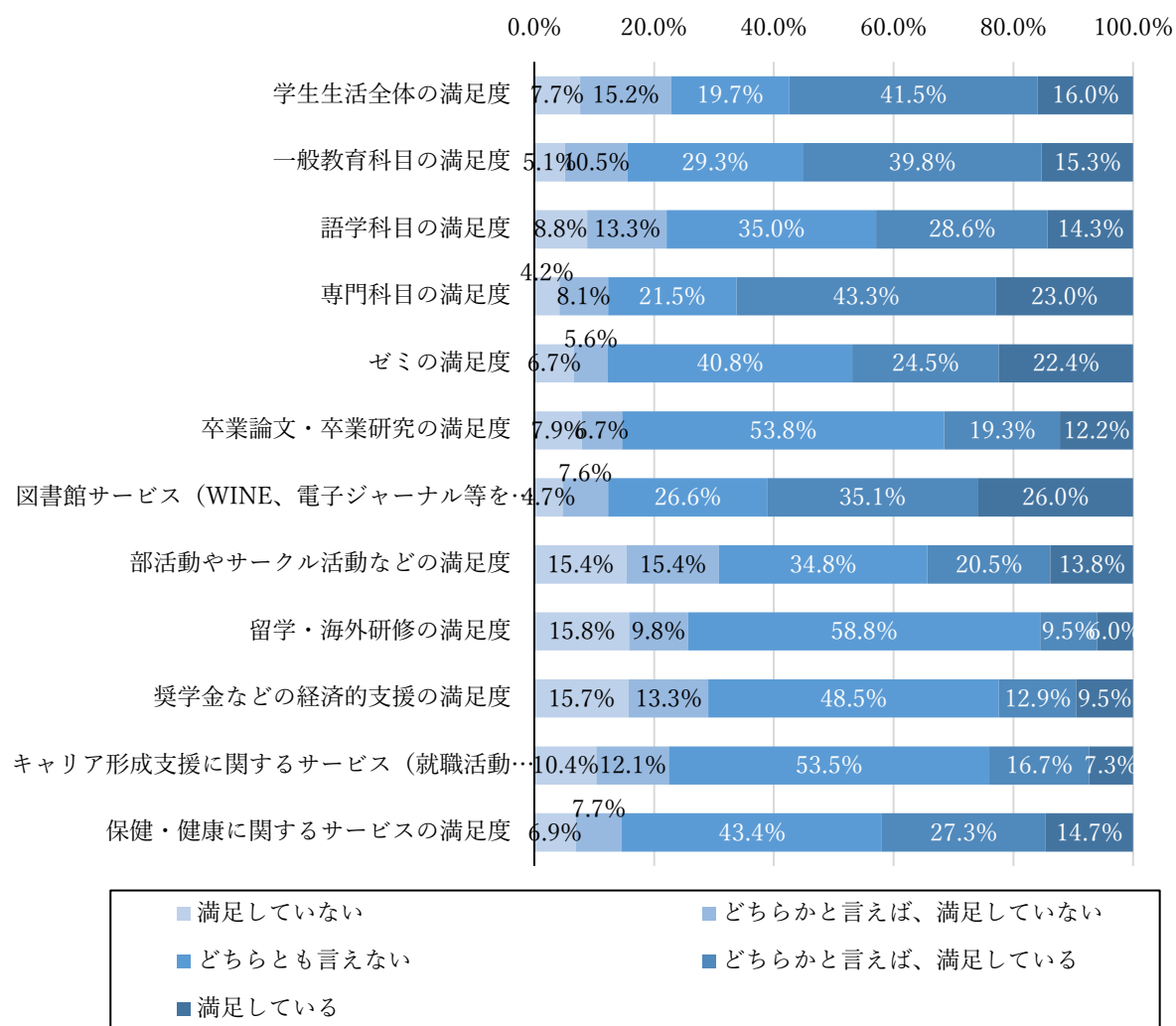
4. 学修成果・満足度等

Q37. 【現在】あなたは、次のそれぞれについて、どれくらい身に付いたと思いますか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。



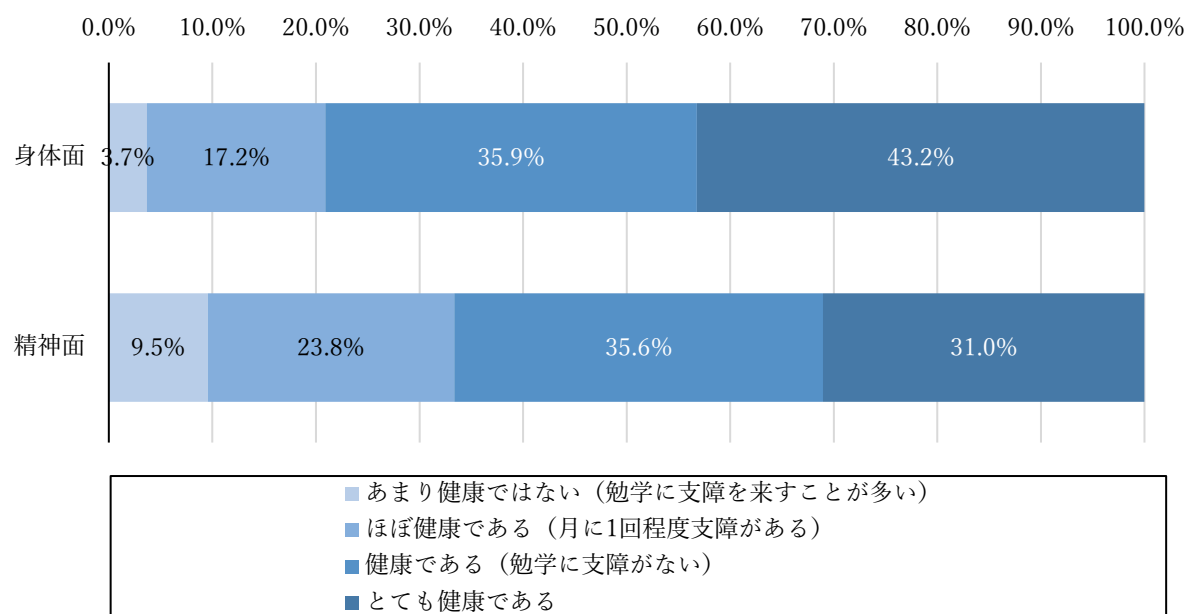
	身についてい ない	あまり身につ いていない	まあまあ身に ついた	身についた
新しいことに挑戦できる	324	1,649	4,824	2,886
既存の考え方にとらわれず、新しいアイデア を生み出せる	303	2,085	4,993	2,296
物事を論理的に考えることができる	181	998	5,034	3,460
課題の解決方法を提案できる	209	1,333	5,289	2,837
自分の考えを分かりやすく表現できる	270	1,759	4,974	2,670
相手の状況や考え方を尊重できる	152	582	4,223	4,714
物事を多面的に考えることができる	173	1,037	4,891	3,562
健全に批判することができる	259	1,707	4,976	2,727
公正な視点で多様性を受け入れられる	160	750	4,706	4,053
異文化を理解できる	315	1,302	4,305	3,745
外国語を理解し、話せる	1,112	3,037	3,637	1,884
公正で責任ある学術・研究活動ができる	424	1,874	4,867	2,504

Q38. 2020 年度春学期の授業や学生生活等の満足度について、それぞれ最も当てはまるものを選択してください。



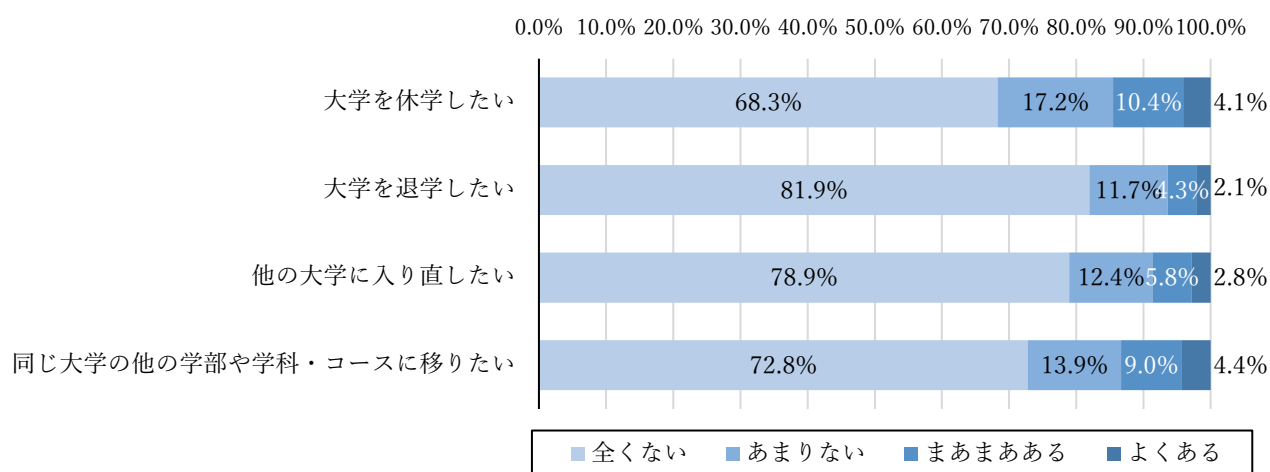
	満足していない	どちらかと言えば、満足していない	どちらとも言えない	どちらかと言えば、満足している	満足している
学生生活全体の満足度	742	1,466	1,907	4,013	1,543
一般教育科目の満足度	491	1,007	2,816	3,832	1,475
語学科目の満足度	848	1,277	3,363	2,750	1,372
専門科目の満足度	406	777	2,063	4,161	2,208
ゼミの満足度	630	531	3,862	2,314	2,123
卒業論文・卒業研究の満足度	743	630	5,043	1,809	1,147
図書館サービス（WINE、電子ジャーナル等を含む）の満足度	456	729	2,555	3,376	2,500
部活動やサークル活動などの満足度	1,474	1,471	3,328	1,961	1,323
留学・海外研修の満足度	1,483	920	5,512	891	565
奨学金などの経済的支援の満足度	1,480	1,255	4,569	1,215	896
キャリア形成支援に関するサービス（就職活動の支援等を含む）の満足度	976	1,137	5,039	1,571	692
保健・健康に関するサービスの満足度	658	732	4,125	2,589	1,395

Q39. あなたは現在、身体面・精神面で健康ですか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。
この質問項目に回答したくない場合には、未回答のままで結構です。



	あまり健康ではない （勉学に支障を来すことが多い）	ほぼ健康である（月に 1回程度支障がある）	健康である（勉学に 支障がない）	とても健康である
身体面	347	1,614	3,369	4,055
精神面	894	2,229	3,337	2,907

Q40. 現在、次のような不安や悩みがありますか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。この質問項目に回答したくない場合には、未回答のままで結構です。



	全くない	あまりない	まあまあある	よくある
大学を休学したい	6,232	1,569	952	373
大学を退学したい	7,457	1,065	392	187
他の大学に入り直したい	7,193	1,130	532	257
同じ大学の他の学部や学科・コースに移りたい	6,620	1,266	815	398

付録2. APに関する文献リスト・サマリー

APに関する文献リスト（年代順）

No.	著者	年	著者・論文
1	嶋野英彦 他	2004	「アドミッション・ポリシーと入学受入方策」『大学入試センター研究開発部共同研究報告書』。
2	嶋野英彦・鈴木規夫	2004	「国立大学における『入学者受入方針』、『選抜方法』、及び『教育面の配慮』の実体とその相互関連について」『大学入試研究ジャーナル』14, pp.119-126.
3	大学入試センター研究開発部	2004	「アドミッション・ポリシーと入学受入方策——大学における学生の入学受入方策に関する総合的調査研究」共同研究『ユニバーサル化時代における高校と大学の接続の在り方に関する調査研究（イ）』報告書。
4	沖裕貴・田中均	2006	「山口大学におけるグラデュエーション・ポリシーとアドミッション・ポリシー策定の基本的な考え方について」『大学教育』3, pp.39-55.
5	島田康行	2006	「入学前教育の在り方を再考する—アドミッション・ポリシーとの整合性」『大学入試研究ジャーナル』16, 113-118.
6	島田康行	2007	「アドミッションポリシーに応じた入学前教育の試行」『大学教育学会誌』29, pp.169-175.
7	大久保敦	2008	「高校調査書及びアドミッション・ポリシーで重視される内容の比較——高校調査書『指導上参考になる諸事項』に記載されている内容の分析から」『大学入試研究ジャーナル』18, pp.31-36.
8	望月由起	2009	「大学生のアドミッション・ポリシー認知—入学時調査の結果をふまえて—」『大学入試研究ジャーナル』19, pp.71-76.
9	松尾憲太郎・近森節子・川口潔・村上亨	2010	「立命館大学における「アドミッション・ポリシー（入学者受入れ方針）」モデルの構築—法学部と情報理工学部を事例として」『大学行政研究』5, pp.93-109.
10	松本茂、山本裕子、橋場論	2010	「アドミッション・ポリシーの現状と課題に関する考察——円滑な高大接続を目指して—」『立教ビジネスレビュー』3, pp.122-135.
11	齋藤朗宏	2013	「各大学経済学部におけるアドミッション・ポリシーのテキストマイニングによる分析」『大学入試研究ジャーナル』23, pp.171-178.

12	佐藤史人・池下和美・池際博行	2013	「大学入試におけるアドミッション・ポリシーのあり方と入試関連業務に関する研究:和歌山大学の事例に即して」『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』23, pp.127-132.
13	佐野秀行	2013	「アドミッション・ポリシーのテキスト分析:設置形態,規模,学部系統別に見た大学の公開情報」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』65.
14	根岸千悠	2013	「国立大学教員養成系学部におけるアドミッション・ポリシーの特徴-「求める学生像」の分類を通して」千葉大学大学院人文社会科学研究所 研究プロジェクト報告書第262集『社会とつながる学校教育に関する研究』pp.50-57.
15	齋藤朗宏	2014	「アドミッション・ポリシーの違いをもたらす要因の検討」『大学入試研究ジャーナル』24, pp.207-212.
16	佐藤喜一・並川努・濱口哲	2014	「新潟大学におけるアドミッション・ポリシーの見直しに向けた予備的検討」『大学入試研究ジャーナル』24, pp.163-171.
17	西郡大	2014	「実質的な活用に向けた「入学者受入れの方針」の見直し」『大学入試研究ジャーナル』24, pp.113-119.
18	立脇洋介・山村滋・濱中淳子 [他]	2015	「アドミッション・ポリシーをめぐる学生と教員の意識」『大学入試研究ジャーナル』25, pp.57-62.
19	山村滋・鈴木規夫・濱中淳子・立脇洋介	2015	「アドミッション・ポリシー政策の効果」『大学入試研究ジャーナル』25, pp.103-109.
20	齋藤朗宏	2016	「アドミッション・ポリシーとディプロマ・ポリシーの関連性に関する分析」『大学入試研究ジャーナル』26, pp.73-79.
21	吉村幸	2016	「アドミッション・ポリシーに基づく個別大学の入試設計のあり方について」『大学入試研究ジャーナル』26, pp.81-88.
22	真名瀬陽平・佐々木 銀河・田原敬・五味 洋一・青木真純・竹田 一則	2017	「障害者差別解消法施行に伴う日本の国立大学におけるアドミッション・ポリシーの課題」『大学教育学会誌』39(2), pp.95-104.
23	西村 公・井上敏憲・中村裕行	2018	「アドミッション・ポリシーの認知状況から見えるもの」『大学入試研究ジャーナル』28, pp.93-98.
24	樽松理樹・天野哲彦	2019	「テキストマイニング技術を用いたアドミッション・ポリシーの分析」『令和元年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会研究発表予稿集 I』, pp.202-207.

25	大塚智子・関安孝・喜村仁詞・竹内世生	2020	「アドミッション・ポリシーに基づく入学者選抜の妥当性」『大学入試研究ジャーナル』30, pp.86-91.
26	吉田章人・並川努・板倉孝信・坂本信	2020	「新潟大学におけるアドミッション・ポリシーの再検討」『大学入試研究ジャーナル』30, pp192-198.
27	大澤 公一	2021	「教科・科目の学力に関する自己保有度の基礎的分析:教科学力アドミッション・ポリシーとの親和性の観点から」『大学入試研究ジャーナル』31, pp175-182.
28	大塚智子・喜村仁詞	2021	「一般選抜における活動報告書の評価項目の作成方法:「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」のAPに基づく評価」『大学入試研究ジャーナル』31, pp.380-385.
29	樽松理樹・天野哲彦	2021	「アドミッション・ポリシーにおける「求める学生像」の分析」『大学入試研究ジャーナル』31, pp.1-6.
30	西郡大	2021	「入学者選抜の効果検証の在り方に関する考察」『大学入試研究ジャーナル』31, pp.27-34.
31	山田美都雄	2021	「国立教員養成大学・学部の入学者選抜における「主体性等」評価の方針に関する実態分析:社会課題的文脈を視野に」『大学入試研究ジャーナル』31, pp.43-48.

No.8	
タイトル	「大学生のアドミッション・ポリシー認知—入学時調査の結果をふまえて—」
著者	望月由起
年	2009
出所	『大学入試研究ジャーナル』19, pp.71-76.
目次	1 はじめに 2 調査方法 3 調査結果 4 おわりに
キーワード	AP 認知、量的調査、個別大学
方法・視点	実証分析
レビュー	1999 年の中央教育審議会答申にて大学入試選抜の「相互選択」の考え方の提言のもと入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が示され、AP の確立に向けた整備が進んでいた。本論は、国立大学では「入学者受入方針の策定率は比較的高いものの、選抜方法、入学者受入方針、教育面での配慮の三者の相互関連はあまりとられていない」（鳴野・鈴木、2004）とされていた 2009 年当時に、大学レベルで「AP が、どの程度、その大学に入学した学生に認知されていたのか」に焦点を当て実証的に検討したものとなっている。 本論では、横浜国立大学の 2007 年度入学者を対象に調査を実施し、1656 名の有効回答数を得ている。まず、学生の属性との関連においては、男子学生が女子学生に比べて非認知率が高く、また教育人間科学部の非認知率が明らかに低い傾向にあることが示された。これについて筆者は、進路意識の性差は従来から指摘されてきたことに言及しつつ、男子学生に対しての有効な情報提供の必要性について指摘している。また、AP 認知の高い学生に大学案内や入学者選抜要項などを「目にした」と回答する割合が高いことから、「声にして伝える」ことを課題として提示している。 一方、入学者選抜方法との関連においては、一般入学者選抜による入学者の AP 非認知率が高いという結果になった。これについては、入試の教科・科目やその配点といったレベルでの関連を示すことができるよう、より現実的・具体的な AP の提示を求めている。 また、学生の志望度との関連においては、受験期（高校 3 年時）の志望度が低い学生は AP 認知が低い傾向になり、また志望理由における「職業」「学び」と AP 非認知の間に実質的な相関が見られたとする。このことから、大学での学びや将来の職業についてのキャリア展望の未成熟な状態の志望した者は、入学時に AP 認知が低い学生であると推測している。一方で、教育的進路成熟（主として進学先の選択・決定への

	取り組みの姿勢)との関連については、教育的進路成熟尺度 15 項目をもとに因子分析を行い、「進学展望・準備因子」(第 1 因子)「進学調査検討因子」(第 2 因子)「進学先自己決定因子」(第 3 因子)のそれぞれの因子ごとに関連を見ている。結果、「進学調査検討」因子と AP 非認知に関連があったことから、AP の認知が低い学生は、進学に関する調査や検討が不足していた者であると推測されている。上記の結果を踏まえ、受験生のキャリア形成として大学進学や将来に対する関心を働きかけの必要性について言及される。 本論はマクロレベルの検討に留まっていた AP 認知度の分析について、個別大学に目を向け具体的な問題について言及した先駆けともいえる論文である。本論を経て、以後個別大学における AP の検討の数は増えていくことになる。本論から連なる一連の個別大学の調査結果を経て、課題及びその対策を包括的に検討していくことが今後求められる。
--	--

No.19	
タイトル	「アドミッション・ポリシー政策の効果」
著者	山村滋・鈴木規夫・濱中淳子・立脇洋介
年	2015
出所	『大学入試研究ジャーナル』25, pp.103-109.
目次	1 本稿の課題 2 分析枠組み 3 AP に含まれる能力・態度等の抽出・分類過程および分析対象学部を選定過程 4 学生・教員による評価データの収集 5 AP の個々のレベルでの選抜上の効果 6 おわりに
キーワード	政策検証、量的調査、全国調査
方法・視点	政策分析
レビュー	本論は、1999 年の中央教育審議会答申以来大学の入学者選抜への反映を求められてきたアドミッション・ポリシー政策（AP 政策）について、その効果を検討しようとする論文である。すなわち、各大学が志願者に対して身につけていることを求める能力や態度等と、実際に選抜された学生が身につけている能力や態度等を比較することによって、AP 政策が選抜上いかなる効果があるのかを実証的に分析しようと試みているのである。 本論ではこの分析のために、各大学の AP にどのような学生像が含まれているかを明らかにし、かつ入学後の教育方針（～できるようになる）ではなく選抜の時点で「身につけているべき能力や態度等」に焦点を当てることによって、①AP が（選抜の時点で）求めている能力・態度等と②実際に入学してきた学生が身につけている能力・態度等を比較し、AP の選抜の効果を測る、という分析枠組みを設定している。なお、焦点を当てる AP は学部の AP としている。 まず、①AP に含まれる能力・態度等を抽出するために、本論では日本におけるすべての AP（2011 年度または 2012 年度）を、インターネットを利用してデータ化した上で、学部レベルの AP を有する 977 学部からキーワードを抽出し、表 1 に示されるような 49 の能力・態度等に分類している。また、977 学部のうち 4 つ以上のキーワードを持つ学部を 350 学部選定し、そのうち 49 のキーワードをもつ学部を選びだして 204 学部（夜間課程を除く）を分析対象としている。 上記を踏まえ、本論では、上記の 204 学部を対象に、①大学 1 年生（50 名）②1 年生の教育に携わっている大学教員（10 名）に対して、49 の能力・態度等を入学時点でどの程度身につけていたかを自己評価してもらうアンケートを実施した。

結果として、まず学生個々のレベルでの選抜上の効果については、少なくとも 10 の学部に含まれておりかつ専門分野に関する関心を除いた 21 項目について、大学入学時の獲得度について自己評価を求めたところ、AP に「ある」場合と「ない」場合で評価得点にあまり差は見られない結果となったとする。一方、教員の学生に対する評価については、同様の条件設定で 20 項目について入学時の学生が身につけていたか否かを求めたところ、AP に提示されている場合とされていない場合とであまり差は見られなかったとされる。

上記の検討結果をふまえ、本論は、「学部レベルかつキーワードが 4 つ以上という分析方法上の制約の下では、全国レベルでみるならば AP 政策は効果的であるということ」を支持するような結果は得られなかった」と指摘する。しかし、本論はその結果で AP 政策を切り捨てるのではない道を探ることを試みる。具体的には、AP における各大学・各学部の裁量が大きいことを鑑み、個々の学部のうち効果が上がっているものに注目し、その志願者への周知の仕方や AP と選抜方法・プロセスの関係を分析することで、AP の可能性を探ることこそ課題であるとする。

本論は全国の学部を対象とした横断的な調査であり、かつ「政策の効果検証」という視点は先行研究にはないものであった。本稿が最後に提示する、効果が上がっている個々の学部の検討については、そこから抽出されたナレッジの活用方法も含めて、今後さらなる検討が求められる。

No.22	
タイトル	「障害者差別解消法施行に伴う日本の国立大学におけるアドミッション・ポリシーの課題」
著者	真名瀬陽平、佐々木銀河、田原敬、五味洋一、青木真純、竹田一則
年	2017
出所	『大学教育学会誌』 39(2), pp.95-104.
目次	1, 問題と目的 2, 方法 3, 結果 4, 考察
キーワード	障害者差別解消法、合理的配慮、AP の課題
方法・視点	記述内容の分析
レビュー	「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（いわゆる障害者差別解消法）」が 2016 年に施行されることに伴い、大学等は、障がいのある学生が「大学の制度や慣行等について、教育を受ける障壁となっており除去してほしい」と申し出た場合に、その社会的障壁の除去に必要な配慮内容が大学教育の目的・内容・機能における本質的変更になるのかを各大学等が検討する必要がある（青野、2016）。このさい、大学における教育の本質を示す資料として、AP が挙げられる。しかしながら、従来 AP に関する議論では障がいのある学生の入学を前提においた議論は行われておらず、合理的配慮が本質的な変更であるか否かを判断する材料としての AP の記述の明確化・具体化について、現状の考察や今後の展望を探究した議論は存在してこなかった。 本論は、上記の問題意識のもと、障害者差別解消法が施行される前の日本の国立大学の AP の記述内容を分析するとともに、その課題と今後の展望について述べている。まず、AP の記述内容については、学部・学科にアドミッション・ポリシーが策定されている国立大学を対象に、「入学者に求める力は何か」と「どのような力をどのように評価するのか」を述べている文章を抽出している。結果としてみられた抽出語のうち、障がいのある学生が特に困難を抱える「読み・書き・聞く・話す・コミュニケーション」に注目して検討を行ったところ、「読み・書き・聞く・話す」については使用している学部数は 25 以下と少なく、一方「コミュニケーション」については約 6～12%の学部で見られ、その特徴としてどのような能力を求めているのが不明瞭である可能性を挙げている。また、アドミッション・ポリシーに関する合理的配慮の記述は同一ページには見られず、「受験上の配慮における事前相談」という形で設けられていたとする。

本論は上記の検討のうえで、まず「基礎学力やコミュニケーション能力が求める行動の不明瞭さ」は、学生からの配慮の申し出に対する「本質的な変更か否か」の判断を困難にすることを指摘する。例えば、聴覚障がいのある学生がリスニング試験を免除してほしいと配慮を申し出た際に、この不明瞭さは、「聞く」ことは基礎学力に含まれるため入学者に求める能力を満たさないと判断するか、あるいはそれは基礎学力に含まれないため他の能力を満たせばよいと判断して免除するかといった判断を困難にするという。同様に面接試験を前提にすることの多い「コミュニケーション能力」についても、対人関係やコミュニケーションに困難を抱える障がいを有する学生への配慮の判断は曖昧である。また、面接試験などの主観的な判断が入りやすい試験では、不明瞭な「コミュニケーション能力」という基準のもと、新奇場面の苦手さやコミュニケーションに障がいのある学生を不当な判断で合格・不合格にしてしまう可能性もあると指摘する。

上記をふまえ、本論は豪州の大学における合理的配慮のモデルをもとに、APの記述をより具体的なものに改善するとともに、APに修学上の不安に対する相談や合理的配慮の情報を提示することを求めている。

本論はAPを「合理的配慮を本質的な変更と判断するか否か」に影響を与えるものとした上で、従来指摘されてきた「APの記述の抽象度の高さ、曖昧さ」の問題点を「障がいのある学生への支援」という観点から批判的に検討している。今後、本論が末尾で述べているようにDPの批判的検討が必要であるとともに、本論で扱われている宮崎大学の例のように、数は少ないものの改善策を提示している個別の大学の実践にスポットを当て、その策定過程や意義について検討することが必要になると考えられる。

No.23	
タイトル	アドミッション・ポリシーの認知状況から見えるもの—2007 年度及び 2016 年度高校卒業予定者へのアンケートから—
著者	西村公、井上敏憲、中村裕行
年	2018
出所	『大学入試研究ジャーナル』 28, pp.93-98.
目次	1 はじめに 2 調査の概要 3 調査の結果と分析 3. 1 AP の言葉の認知状況 3. 2 第一志望大学の AP の理解状況 3. 3 出願大学決定における AP の考慮状況 3. 4 情報の必要性 3. 5 大学の設置者別にみる AP の認知等の状況 3. 6 2016 年度 AO・推薦入試受験者の AP 認知等の状況と合否の関係
キーワード	高校生、経年比較、AP 認知
方法・視点	量的調査
レビュー	アドミッション・ポリシーに関わる先行研究では、AP を策定する大学が増加する傾向にある一方で、受験者の AP 認知が決して高くないといった指摘（鳴野・鈴木 2006）がなされ、AP の明確化についての 2014 年中教審答申などを経て、その具体化が提言された。 本論はそうした AP の認知状況や、AP 明確化に伴う認知度の変容などを検証することを目的としたものである。具体的には、愛媛大学に多くの生徒が出願・進学する市の県立普通科高校 5 校を対象に、2008 年 2 月と 2017 年 2 月に同様の AP 認知に関する調査を行い、それらの比較検討を行っている。 検討結果について概観すると、まず AP という言葉の認知状況については 2007 年度と比較すると 2016 年度は向上しており、また志望先大学の AP を理解している受験者の割合が増加していることが確認されたとする。一方、先行研究においては、学力検査が主となる一般入試選抜の受験者は AP を重視しない傾向にあることが指摘されてきた（鳴野・鈴木 2006、望月 2009）が、その傾向は同様に 2016 年度の結果においても見られているとする。また、2016 年度においても、AO・推薦入試出願者は AP 認知は高いものの、出願時に AP を考慮している割合はそれ以外の受験者と比較しても大きな差がないという結果となった。回答者全体を見ても、2016 年度結果で回答者の半数が AP を考慮せずに出願大学を決定しており、出願に際して AP を考慮

	している受験者の割合は未だ少数に留まっていることを指摘している。この要因について筆者は、別の項目で大学の公開する情報の必要性の認識は兩年度ともに高いという結果をふまえつつ、大学入試センター試験の結果（合格可能性）が出願時に最も考慮されており、参照される大学情報は AP ではなく、むしろ大学入試センター試験の受験科目や学力検査の方法・配点であるから、と推測している。一方筆者は、大学入試センター試験における受験科目や学力検査の方法・配点は、本来 AP が具体化された結果のもののはずであり、具体的な選抜情報と AP との関係性を示すことが AP を形骸化させない一つの方策ではないか、と指摘する。 もちろん、本論でも述べられているように本調査はあくまで絞られた対象校に対する調査であり、この結果を普遍的なものとして捉えることは難しい。また、AP の認知・考慮を手段と捉えるか、目的と捉えるかという議論もあるだろう。しかし、本論のような同じ受験者集団の経年比較によって、大学入試センター試験との関連のように高校生目線から見た AP の位置づけについて示唆を得ることは重要である。今後より幅広い対象における検討が望まれる。
--	---

No.30	
タイトル	入学者選抜の効果検証の在り方に関する考察
著者	西郡大
年	2021
出所	大学入試研究ジャーナル No.31
目次	1, はじめに 2, 先行研究の分析：様々な効果検証の枠組み 2-1, 追跡調査による検証 2-2, 評価手法の精度に関する検証 2-3, 選抜機能に関する検証 2-4, ユニークな制度や方法の検証 3, AP の妥当性という論点 4, 教学マネジメントの中で捉える検証の在り方 5, まとめ
キーワード	効果検証、AP の妥当性、教学マネジメント
方法・視点	先行調査の整理
レビュー	今まで AP をはじめとする入学者選抜に関わる改革については、様々な形で効果検証が試みられてきた。本レビューでも個別大学や特定領域の大学の AP に関わる検証について扱っているが、本論はそうした個別の検証事例のレビューをふまえ、高大接続改革の文脈の中で進められている入試改革の効果検証の“あるべき姿”とは何かという点について検討している。 まず、筆者は入試改革の効果検証に関わる先行研究を、大きく3つの観点で整理する。一つ目は「追跡調査」であり、追跡調査にはそれぞれ「大学入試後のパフォーマンスを入試区分で比較」するもの、「学業成績以外の評価指標を取り入れた分析」を行っているもの、より「長期的な視点に立った検証」という3つのカテゴリーがあると指摘する。これらの追跡調査を通じて、受け入れた学生の入学後のパフォーマンスを追跡し、それを以て入試改革の妥当性を検証しようとするものである。二つ目が「評価手法の精度の検証」である。これはアドミッション・ポリシーに沿った学生を選抜するために、面接や書類審査、能力試験といった評価の方法をより精緻化することによって、入試の妥当性を向上しようとするものが挙げられる。三つ目は「選抜機能に関する検証」であり、合格者の学力水準や合否入れ替わり率などをもとに選抜が機能しているかを検証するアプローチである。この3つの観点のほか、ユニークな精度や方法の効果検証について行っているものも存在するとする。 本論は上述の観点をふまえつつ、追跡調査の割合が多いことに触れながら、「追跡調

査の結果から、ある入試区分で入学した学生の学業成績が芳しくないという結果が得られた場合、この結果によって何を改善すべきだろうか」という問題提起を行う。それは、AP そのものの妥当性は何であり、それは大学のカリキュラム全体の改善とどのように結びつくかという問いである。

筆者はこの問いを提示した上で、追跡調査を「教学マネジメント」の中に位置づけることで、教育プログラム全体の効果的な改善をもたらすことができるような「妥当性を持つ AP」を設定できるのではないかという仮説を提示する。具体的には、AP を単に一つの指標として検証するのではなく、学修目標 (DP) や体系的な教育課程 (CP) をふくむ包括的な連関の枠組みとしての「教学マネジメント」に AP を位置づけること、そして DP に基づいて設定された CP に存在する、特に低学年に位置づけられる科目や学習活動群に取り組むために必要な能力や資質 (レディネス) を AP として設定することが妥当であるとする。そして追跡調査では AP で示したレディネスの有無を検証することが目的であるとするのである。このように、従来のような形で AP の妥当性を既存の指標や観点で検証するのではなく、大学の教学マネジメント全体の連関の中で捉え、DP で示す学生の育成という目的の中で AP の妥当性を検証していくことが“あるべき効果検証”と筆者は指摘する。

こうした入試改革の検証のアプローチについては、一方で筆者自身述べているように多様性を否定すべきものではなく、またこの提案も発展的あるいは批判的に検討される必要がある。「教学マネジメント」それ自体の枠組みや、AP をはじめとする政策そのものの効果検証といった観点も一方で重要といえるだろう。本論で総括的に整理された従来の検証をふまえ、今後の研究が期待される。

No.31	
タイトル	国立教員養成大学・学部の入学者選抜における「主体性等」評価の方針に関する実態分析
著者	山田美都雄
年	2021
出所	大学研究ジャーナル No.31
目次	1, 問題設定 1. 1, 「主体性等」評価という現況 1. 2, 先行研究 1. 3, 本稿の研究課題 2, 高大接続改革答申の分析 2. 1, 「主体性等」評価が求められる背景 2. 2, 「主体性等」が具体的に言及される場面 3, アドミッション・ポリシーの分析 3. 1, 分析概要（分析の対象と手続き） 3. 2, 分析結果 4, 考察と今後への展望
キーワード	主体性等、国立教員養成大学
方法・視点	実態分析
レビュー	2014 年に中央教育審議会より発表された「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」（答申）では、その柱の一つとして「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」（以下、主体性等）の育成が掲げられた。一方、この「主体性等」概念については概念的に明確に定義づけられておらず、この概念に基づく評価には慎重になる必要がある。本論は、このような「主体性等」概念に着目し、それがこんにちの AP においてどのような評価方針のもと設定されているのかを明らかにすることを目指している。 本論では上記の目的のもと、「教員養成」という一つの職業に紐付けられた国立教員養成大学・学部（41 大学）に調査対象を限定し、それらの AP の内容・構造、「主体性等」概念との連関を分析している。また、答申等においては、「主体性等」の前提として社会的な問題状況が前提として提示され、そうした社会的課題の解決への志向性が言及されていることを踏まえ、「社会課題的文脈」との連関についても検討を行っている。 まず、分析対象の 41 大学の AP の「入学者に求める能力・資質像」に当たる文章を 328 項目抽出し、学力の 3 要素（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を

	持って多様な人々と協働して学ぶ態度」(資質・態度)に振り分けた。そして、その振り分けの結果 62.2%を占めた「資質・態度」について下位概念への分類を行い、「行為系概念」「素養系概念」「態度志向系概念」を析出している。その上で、本論は、「主体性等」概念、および「社会課題的」な文脈が登場する場合のこれらの下位概念の出現割合について分析を行い、「主体性等」概念は「態度・行動」概念と、「社会課題的文脈」は「意欲・意志」概念との親和性が高いと述べる。 筆者は、「主体性等」概念については国の各行政文書において「態度」という語句が用いられていることや、「社会課題的文脈」においては高校生に対する水準として「行動」よりも「意欲・意志」を重視した結果ではないかという解釈を行う。そして、後者の点について今後の「総合的な探究の時間」の普及に伴う学習スタイルの変容をふまえ、「意欲・意志」に留まってよいのかという問いを投げかける。 筆者が末尾に述べているように、国立教員養成大学・学部に限定した調査結果を、大学の AP に関する議論全体に敷衍できるかどうかは検討の余地がある点であろう。また、「主体性等」といった概念が、実際に入学した大学生にどのように受け止められているのかといった、より実態的な分析も必要になってくると考えられる。
--	--

2021 年度 早稲田大学 学生生活・学修行動調査報告書

2022 年 5 月

早稲田大学 大学総合研究センター

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1 (7 号館 4F)